

獨軍の作戰は殆んど此の條項の教へと全く一致して今更蛇足を附する必要はない全く神速なる機動と疾風迅雷の作戰なればこそ斯くも偉勳を奏し得たのである。

露第一軍は恰も盲者の手探りの如く獨の一騎兵師團に操縦せられ遅々として前進せず然も「ケエニヒベルヒ」要塞に吸引せられたやうに二日間戰場附近を彷徨し碌々追撃もせず尙ほ友軍の危急をも救はず夢遊患者の如く朦朧として何等なすなき間に其の友軍を殲滅したる獨軍は忽然として前面に現はれ前車の轍を履み敗退するに至る。

要するに將帥の巧妙なる兵の運用に依り絶對的兵力の不足を補ひ三倍以上の敵に對し戰勝を獲たるは畢竟唯だ兵力の多寡地形の不利のみに依ることなく優勢の敵に對しても運用の妙を極度に發揮し必勝の信念を以て作戰を指揮するの肝要なるを痛感す。

第六章 黑溝台附近の會戰(第八師團の戰鬪)

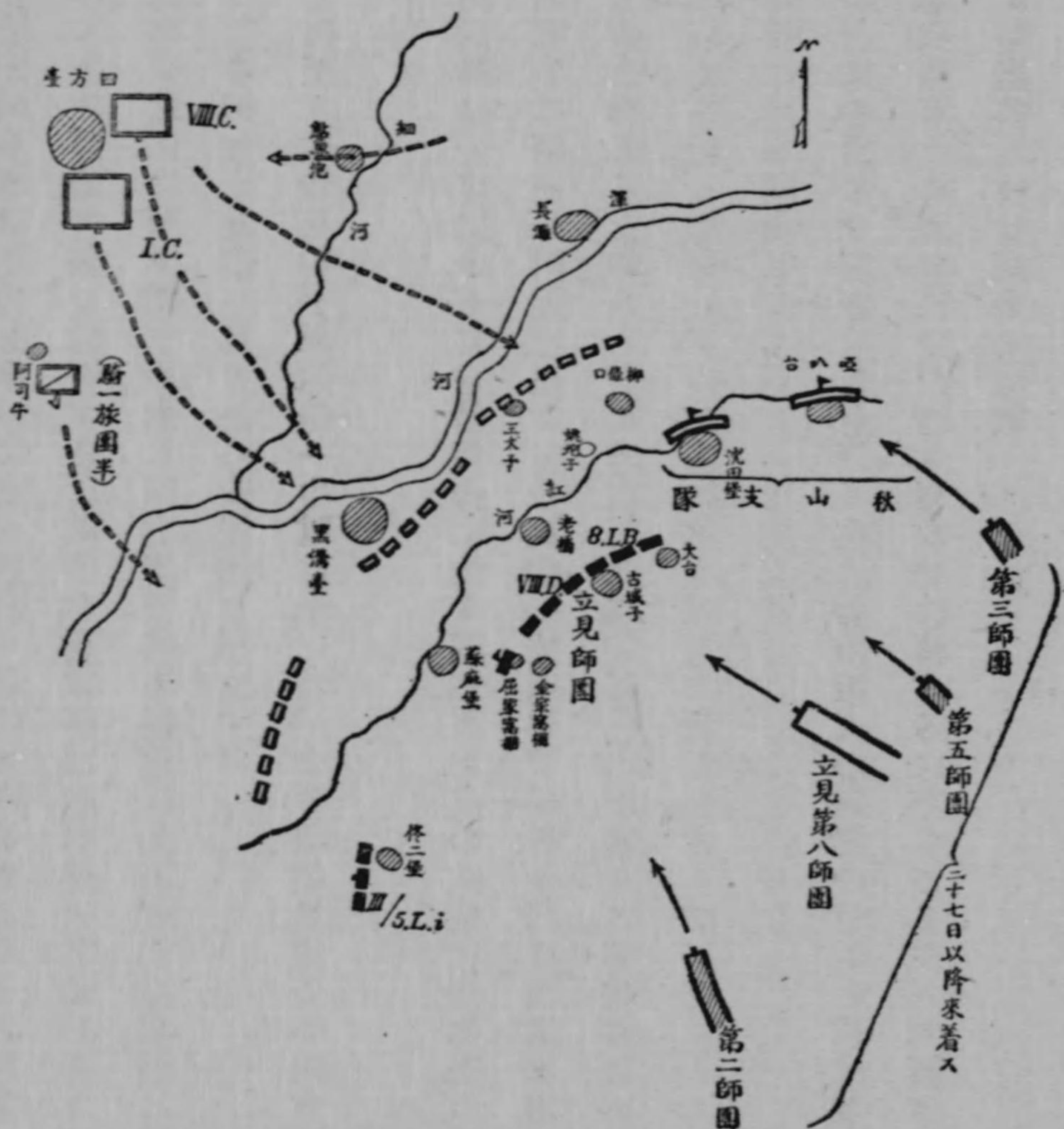
(日露戰役三八、一、二六—二九日の四日間)

其の一、開戦前の狀況と戰鬪經過の概要

一、開戦前の狀況

明治三十八年一月難攻不落と稱せし旅順要塞は乃木軍の堅忍不屈の肉彈戰により半歳惡戰苦鬪の結

圖要況戦の前直開臺溝黑



果陥落し今や我が滿洲軍は全力を擧げて奉天附近一帯の地區に蟠居しある露軍に對し總攻撃の準備を著々進めつゝある際諸情報を綜合するに敵の右翼方面は敵兵逐次移動しありて我が左翼秋山支隊方面たる渾河右岸地區に續々敵軍増加し四方臺及其の附近に集合せし敵兵團は第五、第八軍團(約五、六師團)なるが如く我が左翼方面の狀況逐日切迫す。

一月二十四日に至り敵歩兵約一聯隊砲一中隊は十二時三十分頃鮎魚泡より四方臺に向ひ前進を開始す。

總司令官大山元帥は一月二十五日來諸報告に依り滿洲軍正面の敵情に變化なきも前述の敵情併に敵の騎兵約一旅團半は阿司牛附近に在り又歩兵約一旅團半、砲數十門は黑溝臺附近に於て渾河左岸に進出せんとする企圖あるを知ると共に昨夜第二軍(奧軍)にて獲たる捕虜將校の言に依れば敵は二十六、七兩日を以て全線を砲撃し其の結果に依り攻撃を決行せんとするもの如きを推知す。

又當時歐洲電報は露本國內甚だ不穩にして露都及「ワルシャウ」併に「セバストポール」に大暴動起り露帝及皇后の行衛不明なるを報ぜしを以て敵は此の際人心鎮壓の目的を以て我が第三軍(乃木軍にして旅順要塞攻圍軍)の到着に先だち大舉攻勢に轉ずるに非らざるやと判斷す。

二、立見軍の臨時編成と彼我兩軍の激戦

本情況に在りて我が滿洲軍の左側は頗る危険に瀕したるを以て立見中將の指揮する第八師團をして

黑溝臺方面の敵を撃破し該方面の累を除去せしめんとす。

第八師團は一月二十六日風雪酷寒を冒し黑溝臺方面の敵を攻撃せしも敵は益々兵力を増加し我が攻撃進捗せず次で我が總司令官は諸情報に依り敵は眞面目に大舉して我が左翼に向ひ攻撃を企圖しあるを看破し第八師團に更に第五、第三、第二師團等を増加し臨時立見軍を編成し敵攻勢の機先を挫かしむ所謂黑溝臺附近の會戦にして我が兵力約四師團戰闘員約六萬敵は露第一軍團長「グリツペンベルク」大將の率ゆる約二倍の七師團戰闘員約十一萬兩々相對して一月二十七—二十九日迄連續三日寒氣頗る凜烈加ふるに降雪あり零下約二十度雪を蹶つて奮闘遂に露軍總攻勢の企圖を挫折せしめたり。

死傷我が軍將兵約一萬敵又約一萬數千の激戦なりき。

其の二 立見第八師團の戦闘

一、會戦第一日(一月二十六日)

露軍西伯利亞第一軍團長「グリツペンベルク」大將の率ゆる第二軍(約七師團)は日本軍の最左翼方面に進出し來り之が急を救ふ爲立見師團をして黑溝臺方面に急派し同師團は一月二十六日古城子より金家窩棚(要圖參照)に互る線に前進せんとし左の如く前夜攻撃を部署す。

- 1、後備歩兵第八旅團(長岡見少將)をして現在地たる古城子附近に在りて師團の前進を掩護せしむ。
- 2、歩兵第四旅團は金家窩棚東端に向ひ前進し七時迄に同地東側畑地に集合すべし。
- 3、歩兵第十六旅團、野砲第八聯隊(一中隊欠)、工兵第一中隊、衛生隊は歩兵第十六旅團長の指揮に屬し狼洞溝を経て大臺に向ひ前進し七時迄に同村東南畑地に集合すべし。
- 4、騎兵第五聯隊(臨時配屬)は六時古城子出發七時屈家窩棚に至り黒溝臺方面を搜索し在修二堡の歩五の第三大隊と連絡すべし。
- 5、後備歩二の第四中隊は古城子南端に在りて警戒に任ずべし。
- 6、師團長は七時大臺に至る。

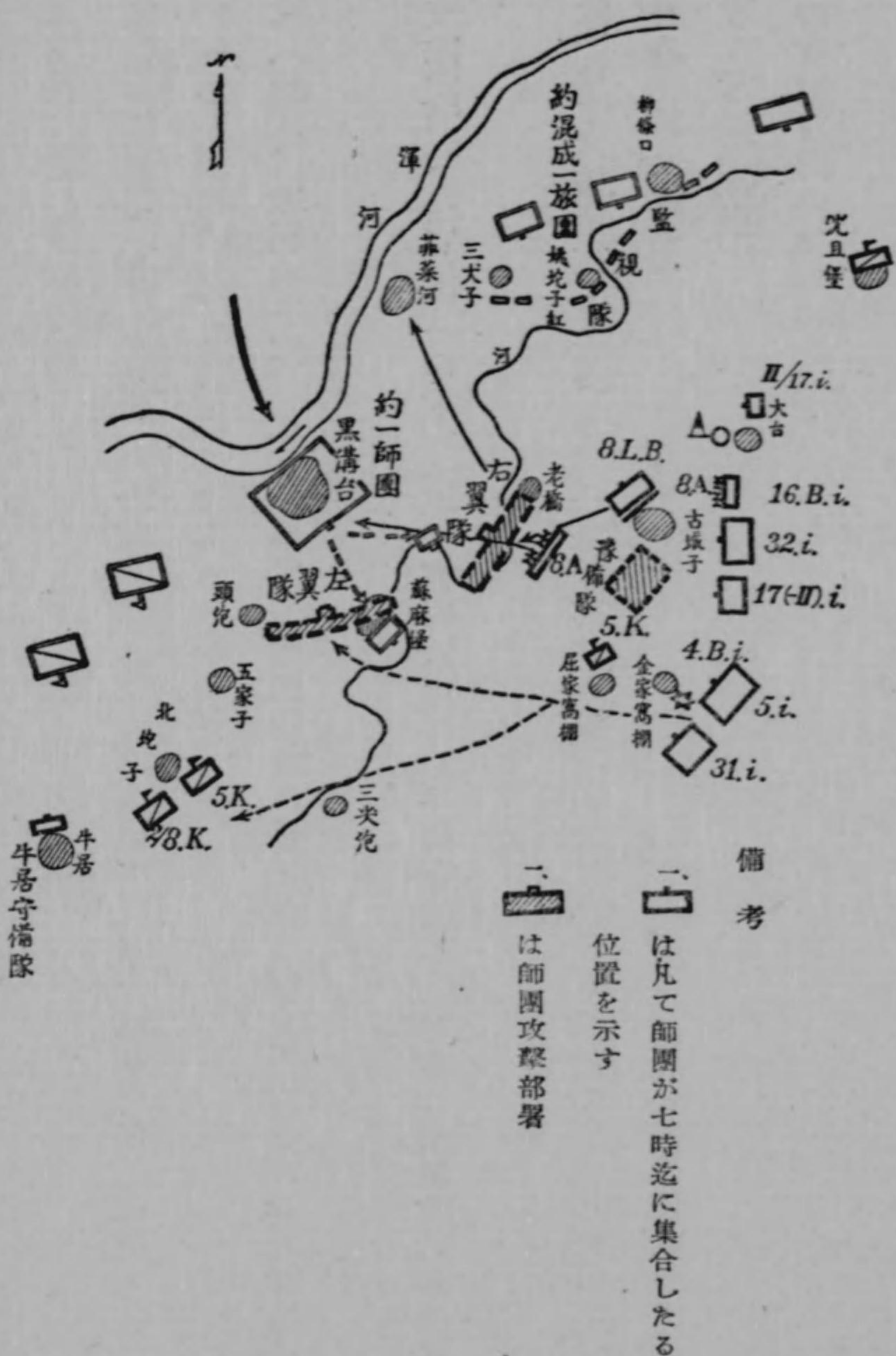
師團長は七時大臺に著し十時迄に知り得たる敵情左の通り。

- 1、約一師團の敵黒溝臺を略取し其の一部は蘇麻堡に又混成一旅團を下らざる敵は三犬子及柳條口に在るものの如く其の監視兵は柳條口―姚坨子東方を経て老橋西方に互る紅河の線に在るを知る。
- 2、師團攻撃部署について

師團は右の状況に依り黒溝臺方面の攻撃に際し柳條口附近の敵兵我が右側を危険ならしむるを

顧慮し有力なる豫備隊を右翼後に備へ隨時柳條口方面の敵に對し得べき處置を施し先づ主力を以て黒溝臺方面の敵を攻撃するに決し左の如く部署す。

圖要署部擊攻團師に併狀敵の近附臺溝黒
(後以時十日六十二月一)



一、右翼隊〔後備歩兵第八旅團、騎兵第八聯隊（一中隊欠）〕は左翼隊に連繫し老橋及其の南方地區より黒溝臺に向ひ攻撃前進。

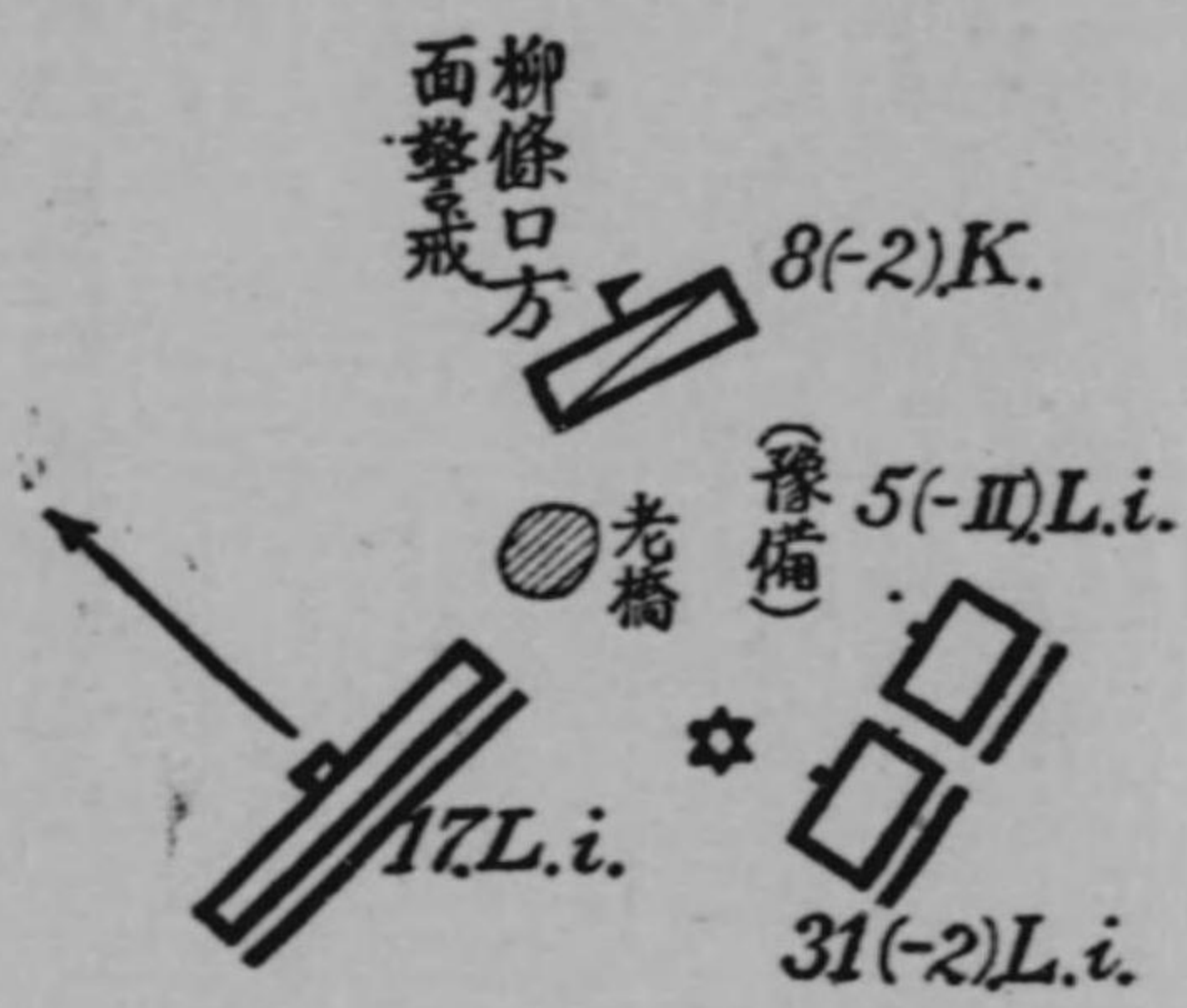
二、左翼隊〔步第四旅團（步五、步三一聯隊）衛生隊半部〕は直ちに屈家窩棚を経て蘇麻堡に向ひ前進し蘇麻堡―頭泡の線より黒溝臺に向ひ攻撃前進。

三、砲兵隊（砲八、戰利砲中隊、工兵一中隊）老橋附近に於て菲菜河及黒溝臺に對し陣地を占領。

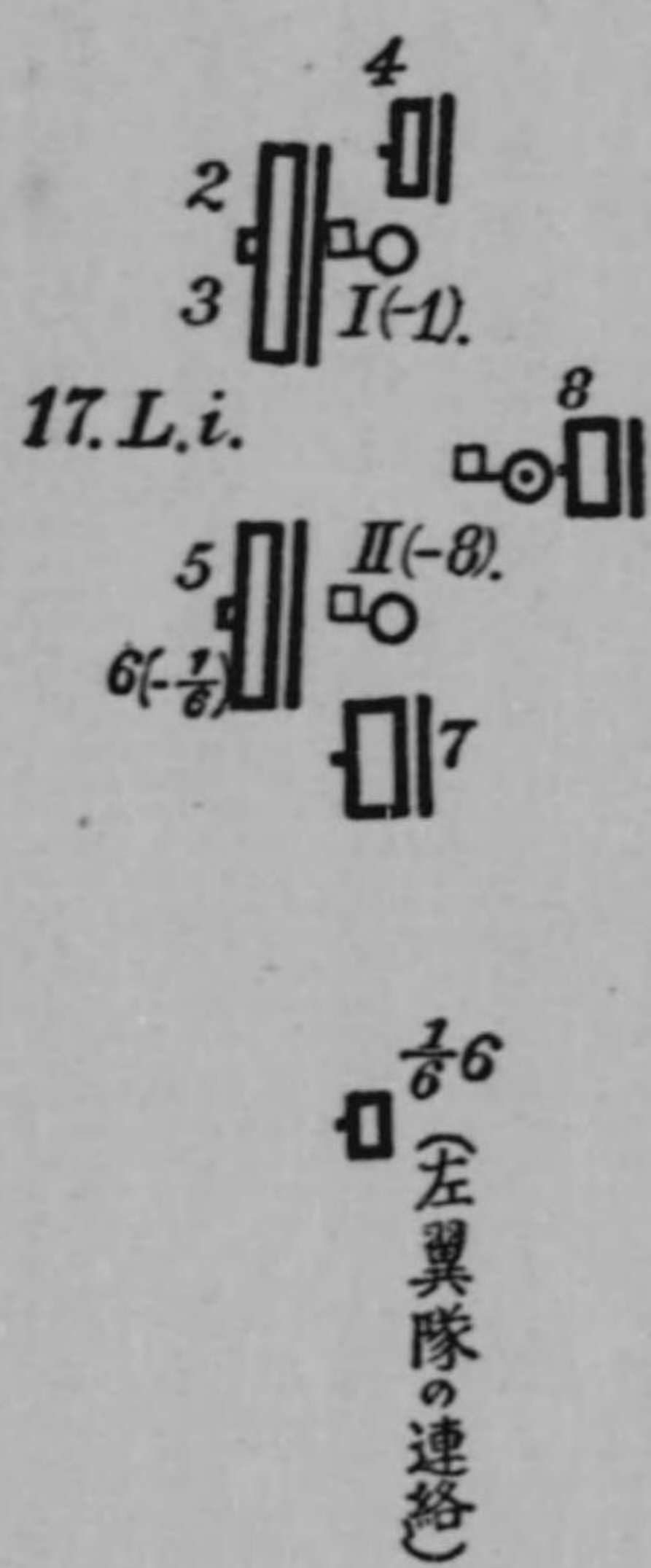
四、騎兵支隊（騎五、同八の一中隊）北坨子方向に進出し牛居守備隊と連絡し左翼隊の左側背を掩護す。

五、豫備隊〔步十六旅團（步十七、步三一聯隊）〕は古城子南方に位置し柳條口方向を搜索し且沈且堡の豊邊支隊に連絡す。

1、右翼隊の戰況（後備旅團）
イ、右翼隊の攻撃左圖の如し。



ロ、第一線後備歩兵第十七聯隊の展開部署

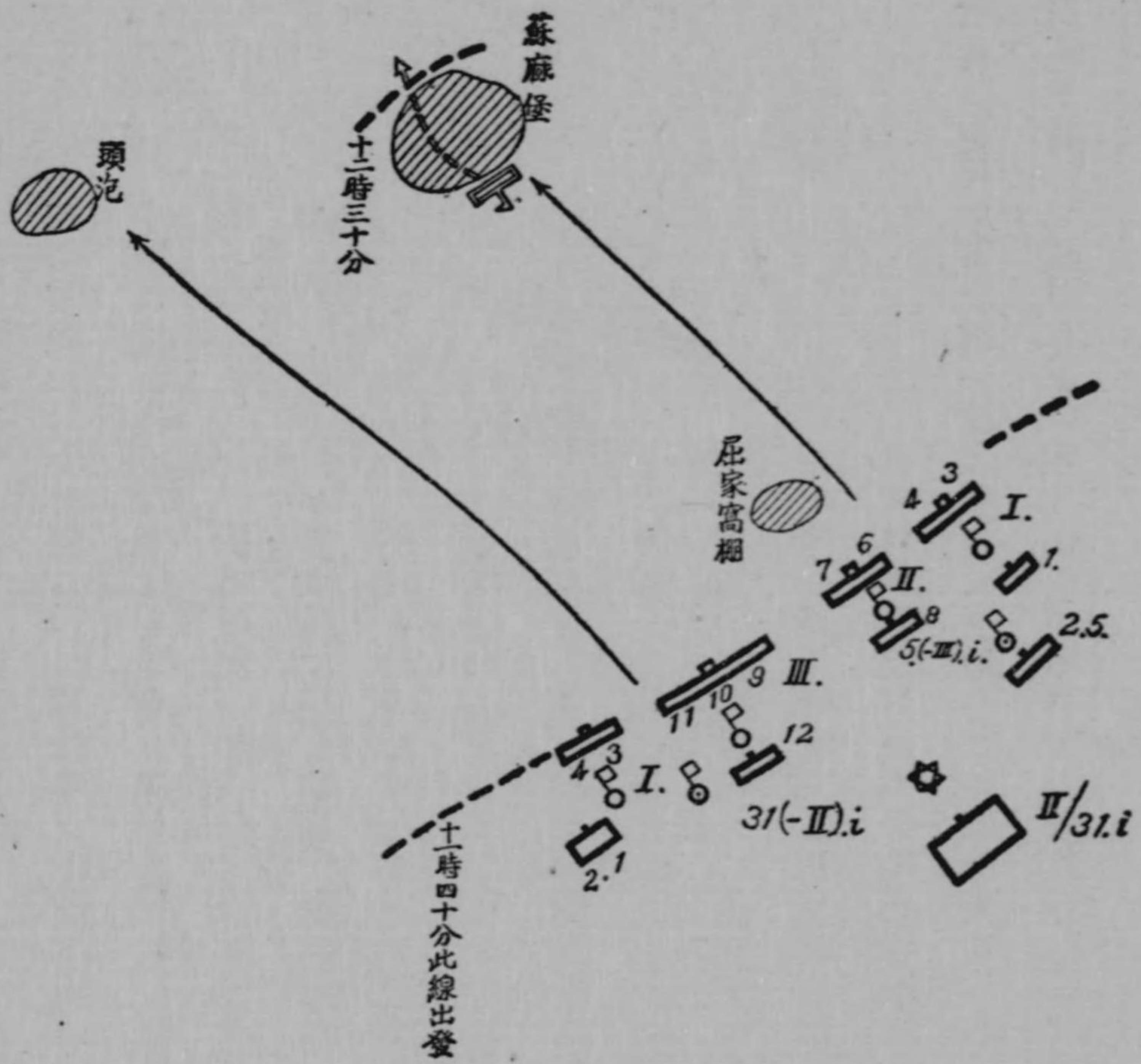


第一線聯隊は右要圖の如く攻撃展開し老橋に向ひ前進す。
 發進後約七百米にして散開依然前進を續行するや老橋東南約三百米の小丘阜に在りし敵の歩兵約一中隊より射撃を受け第一線中隊之に應射するや敵兵漸次増加して約二大隊となる。
 兩大隊長は其の豫備隊を各増加し之を攻撃せしむ。

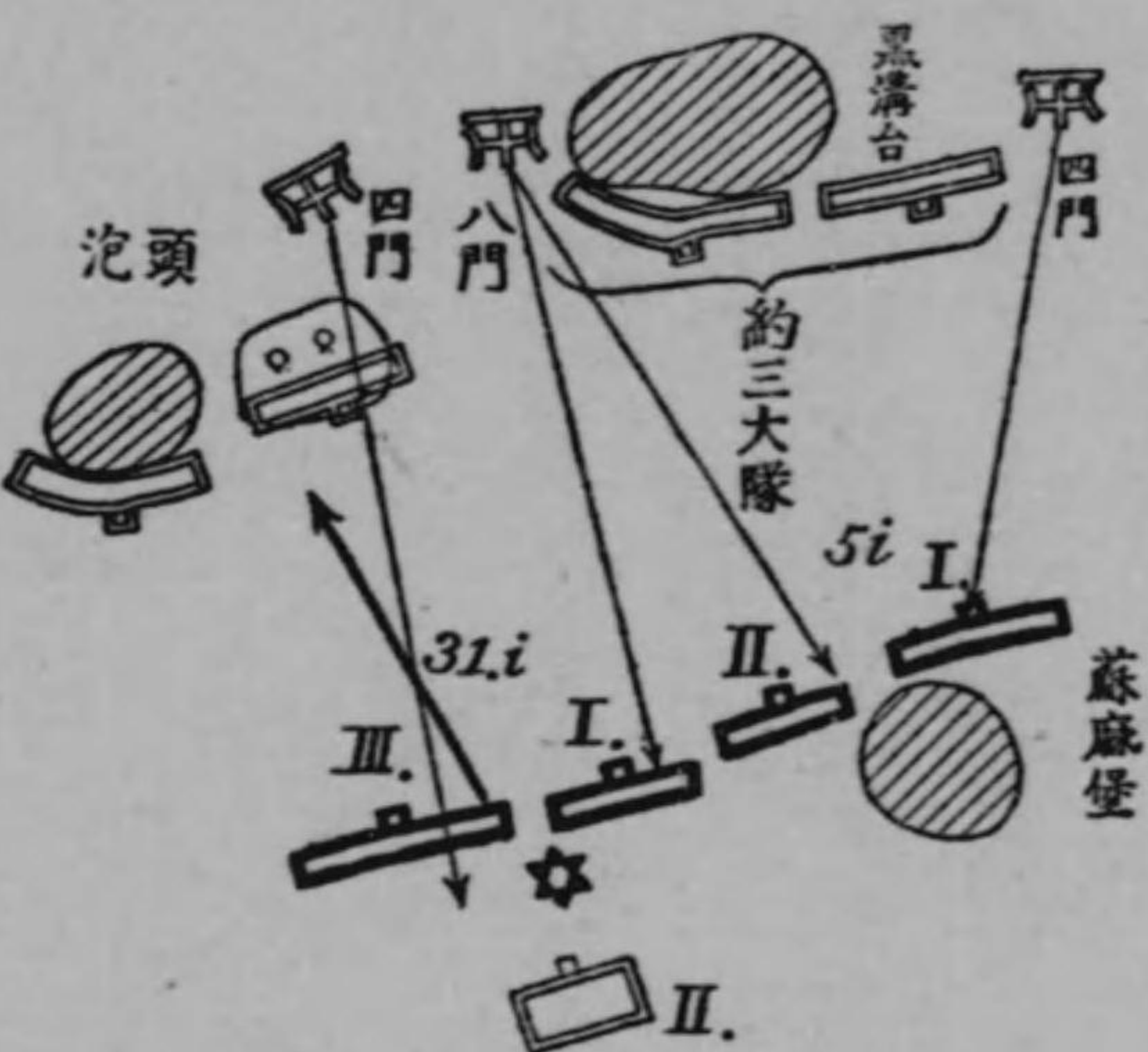
是時右翼隊長岡見少將は第一線右翼後に續行せる後備歩兵第五聯隊(第二大隊欠)を右第一線とし右翼に展開極力當面の敵を攻撃せしめ豫備たる後備歩三一を二分して兩翼後に跟随せしむ。

2、左翼隊の戦況(歩四旅團)

十一時師團攻撃命令を集合地に於て受領し直ちに左圖の如き攻撃部署に展開し右聯隊は蘇麻堡に左聯隊は頭泡に向ひ攻撃前進す。



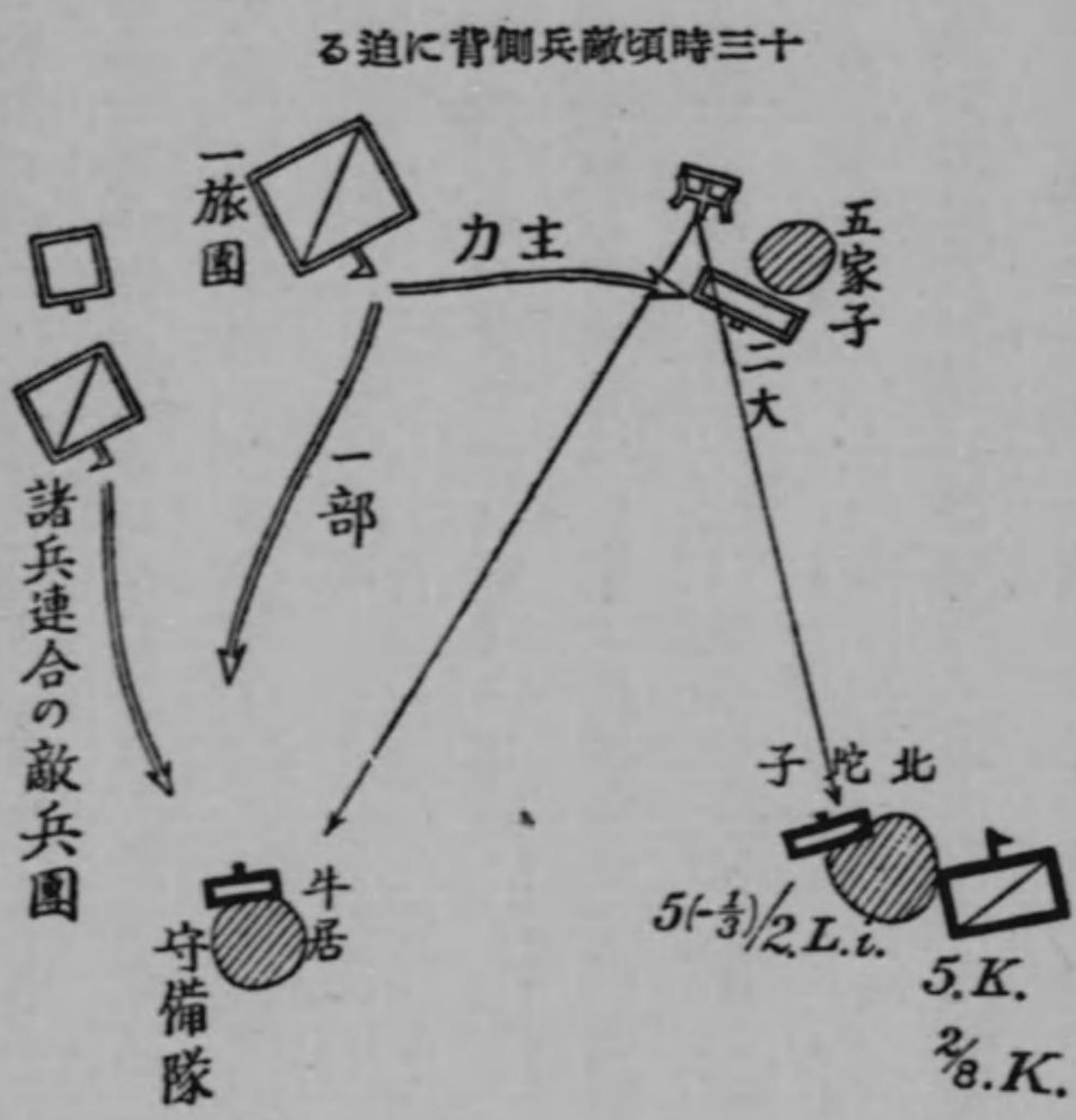
右第一線たる歩兵第五聯隊の戦況
 右第一線たる歩兵第五聯隊は敵騎約二十を驅逐して蘇麻堡を占領し第一大隊は直ちに黒溝臺南方に散開せる敵の歩兵約二中隊に對し十三時頃より射撃を開始す。



同時頃敵の歩兵約二大隊黒溝臺南方無名寺附近より我が第二大隊に對し猛烈に射撃を加へ我が死傷續出す然れ共大隊長以下靡雪紛々たる裡を猛然として敵火を冒し邁進十四時蘇麻堡の西北六、七百米の丘阜に達し第一大隊も蘇麻堡西北端より更に約百米前進して第二大隊に連繫す。
 左第一線たる歩兵第三十一聯隊の戦況
 旅團の左第一線たる歩三十一聯隊は右聯隊に連繫して前進十三時五十分三尖泡小流の線に達す是時頭泡及其の東方疎林より敵の銃火を受け豫備隊の同河を越へし後頭泡東北地區より俄然敵の砲火を蒙り第一線は直ちに散開して射撃を開始し豫備隊の各中隊は一列横隊となり敵砲、銃火を冒して躍進し第一線は敵を距る約九百米に達し十四時十分頃より熾なる火戦を交へしも前面殊に左側面の敵砲火猛烈にして死傷續出し攻撃意の如く進捗せず。

當時敵の砲兵は頭泡東北に約四門其の東方に約八門、黒溝臺西南端方向に約四門を認め又其の歩兵は頭泡を右翼として東北方に互るが如きも降雪霏々として遠望を妨げ共に明確ならず。

3、騎兵支隊(騎五聯隊と同八の一中隊)
 七時以來屈家窩棚に位置し敵情の搜索に従事せしも十二時二十五分北坨子方向に進出し牛居守備隊と連絡し左翼隊の左側背を掩護すべき命を受け即時出發十三時頃北坨子に到達し修二堡より來



著せし後備歩二の第五中隊(一小隊欠)と共に警戒に任ず。
 當時敵の騎兵一旅團餘五家子西北渾河左岸の地區に現はれ一部は牛居方向に他は五家子方向に運動し其の歩兵二大隊騎砲兵約一中隊五家子西南より我を射撃し牛居方向にも諸兵連合の敵兵續々進入し我が側背を壓迫せんとす。
 4、師團豫備たる歩十六旅團の行動
 朝來大臺附近に位置しありしが十時三十分敵の歩兵約一大隊同地北方約八百米より俄然射撃す

るに及び直ちに右翼に在りし歩十七聯隊の二中隊をして大臺北端に據り應射せしめしに幾もなく敵兵柳條口方向に退却せしに因り同聯隊第二大隊を同地に留め自餘の諸隊を古城子南端に集合し歩三二の一中隊を古城子西北端に配置し老橋、姚坨子方向に對し警戒せしむ時に十一時二十分なり。

5、師團長の新來の敵に對する處置

正午頃敵の歩兵約一旅團、長灘方向より大臺若しくは沈且堡に向ひ前進し來るの報に接し大臺の歩兵十七聯隊第二大隊に砲兵一中隊を屬し師團の右側を掩護せしむ。

6、砲兵隊の戦況

砲兵隊は主として右翼隊の老橋附近の攻撃援助に任じ十四時頃古城子西端及其の兩側に放列を布置して専ら老橋附近の敵を射撃し少時の後敵兵退却するや右翼隊は之を老橋西方紅河の線に追撃して射撃し後更に躍進して同河の西方約四百米に達せしも我に據るべき地物なく且黒溝臺附近よりの敵の銃砲火極めて猛烈にして前進意の如くならず此の間砲兵隊は降雪甚だしく展望全く利かず射程の關係もありて陣地を老橋附近に逐次變換し半遮蔽陣地を占領して黒溝臺の周圍に配置せる約三十門の敵砲兵に對し射撃し尋て我が右翼隊の紅河の線より前進するや黒溝臺東端の敵歩兵を射撃し之を援助せり。

7、右翼隊の戦況其の二(十四時以降)

右翼隊長岡見少將は十四時以後豫備たる後備歩三十一聯隊の第一大隊(二中隊欠)を第一線後備歩五の右翼に同第二大隊(二中隊欠)を歩五、歩十七聯隊の中間に増加し極力攻撃を督勵するも敵の兵力優勢にして暫に前進し得ざるのみならず敵の一部隊菲菜河方向より我が右翼に迫撃し來りしに因り自然我は守勢鉤形を取るに至り砲兵第五中隊は臂力を以て老橋西北側に陣地に轉じ之に對し猛射を浴せしも其の後敵兵益々増加し我が右翼を漸次包圍せんとする狀況なり。

然るに當時右翼隊の死傷甚だしく彈藥亦欠乏し奈何ともする能はず遂に現狀を維持するに汲々として一步も前進するを得ずして日没に至る白皚々たる原野に雪は滲々として媳まらず銃聲しきりに各方面に音す。

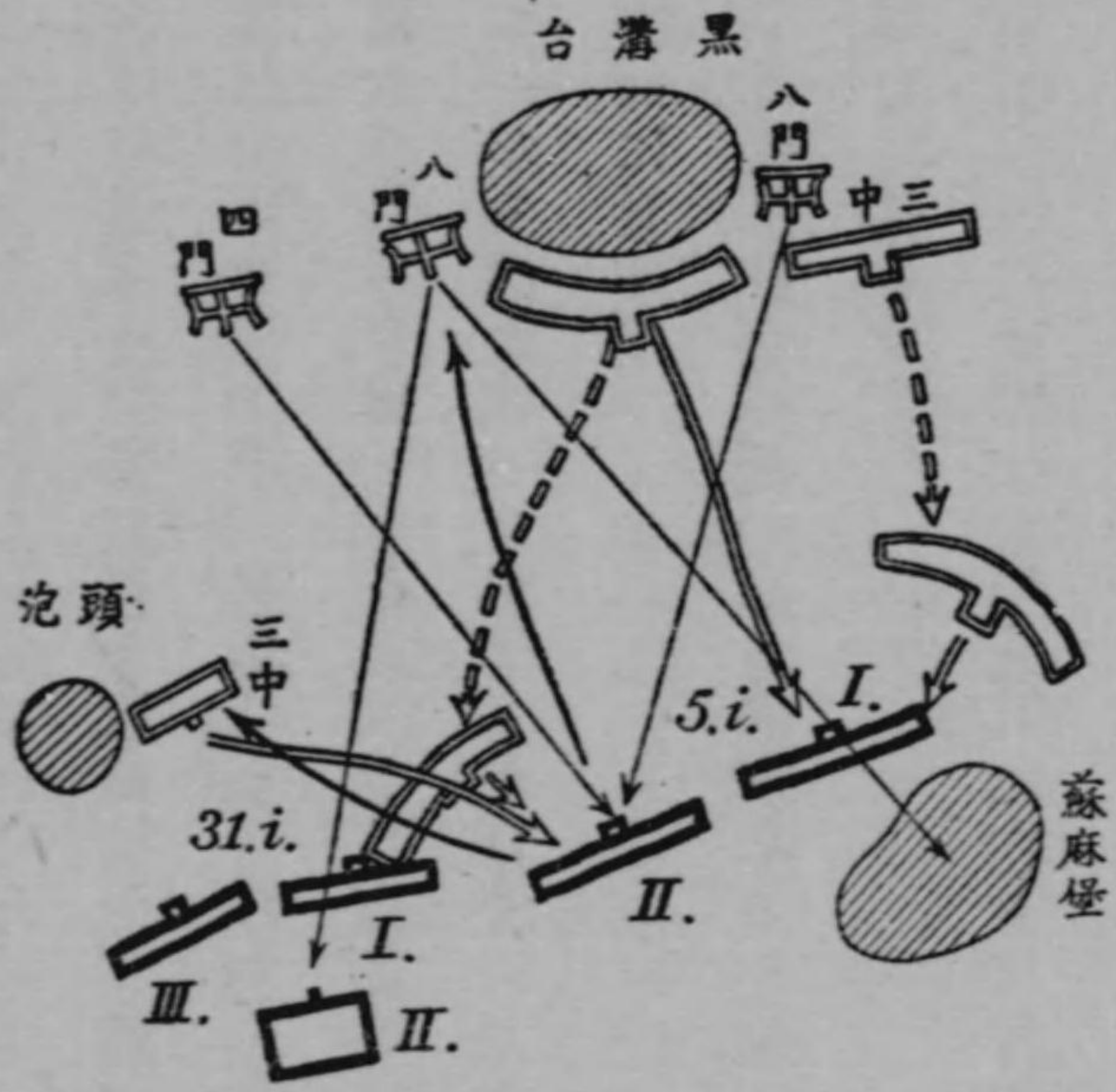
右翼隊長は我が正面の頗る過廣なるを慮り夜に乗じて第一線を老橋西方紅河の線に退け後歩十七聯隊を豫備とす。

配屬騎兵第八聯隊は右側地區に在りて柳條口方向に對し警戒せんとせしも敵の銃砲火猛烈にして果さず終日古城子に在り。

8、左翼隊の戦況其の二(十四時以降)

左翼隊の前面に在りては十四時 敵砲八門黒溝臺西南端に現はれ其の豫備隊を急射し尋て蘇麻

堡を亂射し又敵砲四門黒溝臺西南約千米より歩五聯隊第二大隊を射撃し同時敵の歩兵約三中隊頭
泡東北端より同隊に向ひ射撃を開始す。

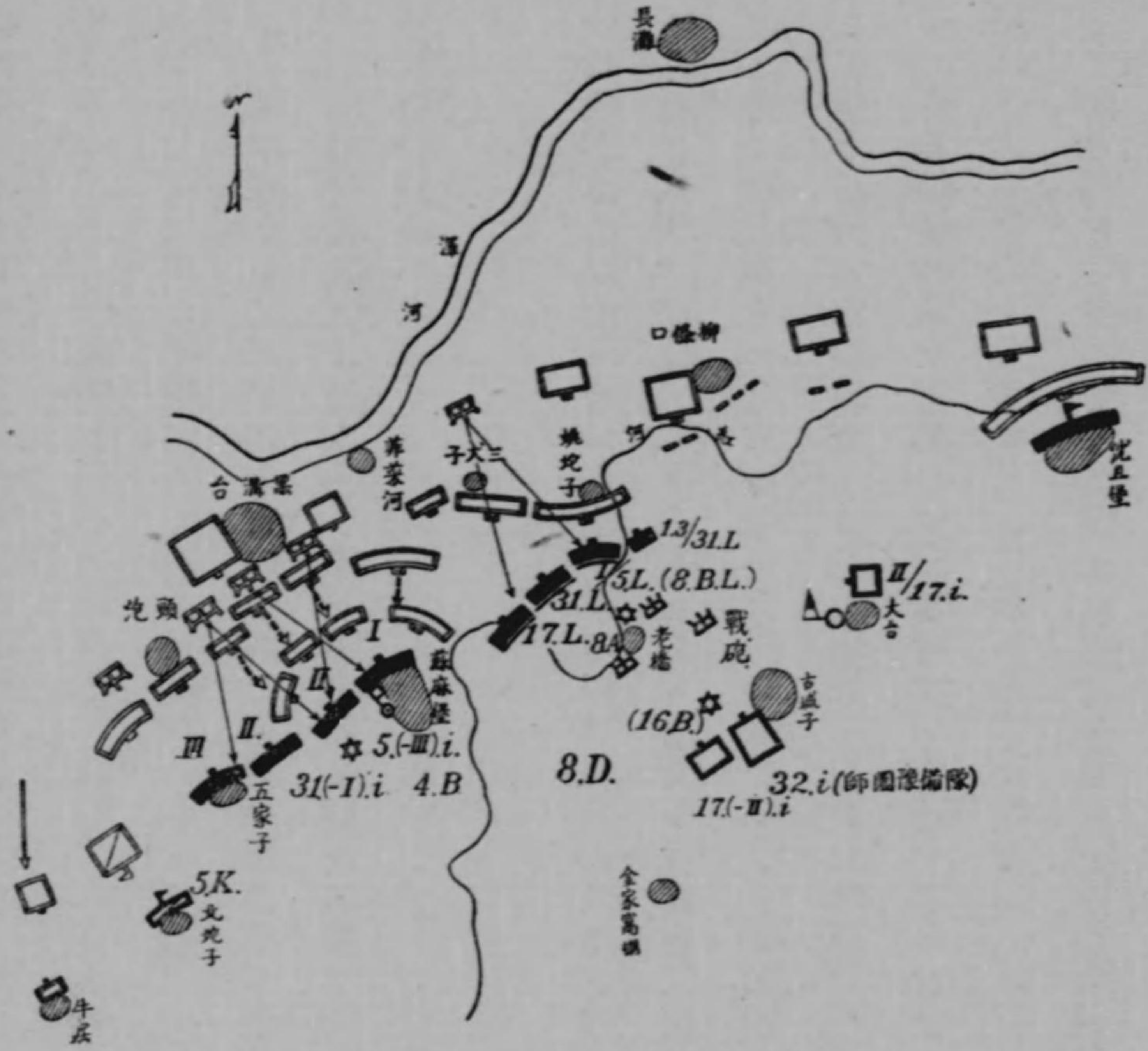


火力を集注して殆んど之を塵殺せり然れども其の後の攻撃意の如く進捗せず現狀を維持して終に
日没に至れり。

二、會戰第二日以降の戦況梗概(一月二十七日—二十九日)

圖要圖戰日一第戰會近附臺溝黒

夕日六十二月一



會戰第一日たる二十六日は終日降雪と續々當面に現出する敵後續兵團の増加に依り第八師團は攻撃豫期の如く進捗せざるのみならず死傷續出して戦況稍、悲觀すべき實情に在りしも各隊奮戦死闘して辛うじて現状を維持し夜に入る寒威厳しく將兵の動作困難を極む。

元來本戦闘は露第一軍團長が第二軍團司令官の企圖を無視し深甚なる決意を以て獨斷攻勢に轉じたものにして従つて自主的攻勢意力頗る強く部下將兵又志氣振ひありて日、露兩軍の戦闘といへば稀に見る壯烈なる劇戦を展開す。

第二日の戦況

立見師團長は此の日我が第五師團増援の爲來著するの通報を得たると昨日迄師團豫備たりし歩兵第十六旅團の新鋭を新に第一線に増加し萬難を排しても黒溝臺附近を奪取せんとし夫々攻撃を部署す
 1、右翼隊は拂曉と共に敵砲兵の火力を集注せられしも歩兵第十六旅團中央隊となり其の左翼地區に進出するや之に協力して右第一線たる歩十七聯隊を現在地附近に在りて右側の掩護に任じ右翼隊長は後三十一、同五の兩聯隊を指揮して攻撃前進を開始するや敵は我が右側に進出し來り我を包圍脅威せんとす。

此の頃敵の砲火は益々劇しく濛々たる火煙は旅團司令部を始め各隊を覆ひ然も右側に迫りし敵は勇敢に前進し掩護に任ずる後歩十七の一部は逐次壓迫せられて後退するものの如く右翼隊長岡見少將勵聲叱咤して死守防戦せしめ自ら主力を掲げ黒溝臺の敵に向ひ邁進せんとするも敵の銃砲火は猛烈にして容易に進捗せず然かも數次に互る敵の逆襲は咫尺の間に彼我相接して對峙しありしも我が第五師團の右側に進出するや辛うじて敵は漸次後退す。

2、中央隊として新に戦線に加入せし歩十六旅團の戦況

當旅團は出征直後旅順攻撃増援の爲派遣されしが到着間もなく旅順要塞は開城し直ちに師團に復歸せし所本會戦となり志氣頗る振ひ意氣旺なりしが第一日は師團豫備として控置せられ勃々たる英氣を抑へつゝ戦況を直視しありしが其の夜師團命令により中央隊となるや將兵意氣衝天を以て本日の戦闘を開始せり。

旅團は拂曉と共に大臺を發し古城子東方を経て蘇麻堡東方に向ひ前進し七時開進を始むるや曉霧晴るると共に俄然蘇麻堡西北地區の丘阜附近より敵歩兵の射撃を受け茲に展開して攻撃前進に移りしも確たる敵狀を知るを得ず唯だ前面一帯に敵歩兵充滿しありて其の後方には幾線もの密集部隊の存在しあるを認め旅團長の沈靜なる指揮に依り紅河の線に攻撃隊勢を整へ蘇麻堡以東の敵と對す。

3、左翼隊の苦戦

此の日左翼隊長依田少將は其の主力を以て先づ頭泡を攻略せんとし歩第三十一聯隊の主力を以て

五家子より攻撃せしめ第五聯隊の主力をして蘇麻堡及其の西方より此の攻撃を援助せしむ。然るに敵は黒溝臺及頭泡並に其の西側一帯に著しく増加して猛烈に攻勢に轉じ來り加ふるに我が左側背は敵の騎兵及歩兵の迂回攻撃を受け頗る危機に直面するに至る。此の時更に右第五聯隊の正面の敵は逐次我が右側に繞回して正面と共に一齊に攻撃前進し來り加ふるに敵砲兵は集中せられ最も苦境に陥りしも將兵能く沈著して其の位置を殊守して一步も退かず。

聯隊長津川大佐斃れ歩五の第一大隊全く敵に包圍せらる。

蘇麻堡の西方約千米にある丘阜を占領し近く敵の猛攻と對峙しありし聯隊長の直接指揮する第一大隊は十一時四十分頃聯隊長敵彈の爲斃れ其の他將校多數死傷せしも頑として死守す。

敵は益々近迫し彼我六十米を距てて交戦下士官兵殆んど半數は斃れ頗る窮地に陥りしも聯隊長は重傷なるも軍旗と共に全滅を賭して奮戦之れ努めしも敵歩、騎兵に側背を全く包圍せられ如何とも爲すべき策なきも東北健兒沈著して動搖せず一意奮戦して遂に友軍の來援を待ちしも來らず遂に力盡きて蘇麻堡に退却するに至る。

4、彼我砲兵の懸隔餘りにも大なり。

此の日我が野砲兵第八聯隊(三十六門)は前日に同じく老橋東南陣地に在りて主として黒溝臺附近

の敵を射撃し戦利砲中隊(六門)は古城子南方に位置し専ら蘇麻堡附近の敵を射撃す。

然るに敵の砲兵は現認し得るものみにて約百三十四門なり即ち

姚坨子附近三十二門、烟臺子附近二十四門、黒溝臺東西の地區二十四門、別に巴荒地、屈家窩棚方面に行動する騎砲三十四門、若干の損傷ありとするも少くも百門の敵野砲及騎砲は二方面より我が山砲、聯隊を猛射し殆んど其の手足を出す能はざらしめ且自由に我が歩兵に砲彈を雨注せしめたるは我が軍が如何に苦戦せしかを想察するを得べし。

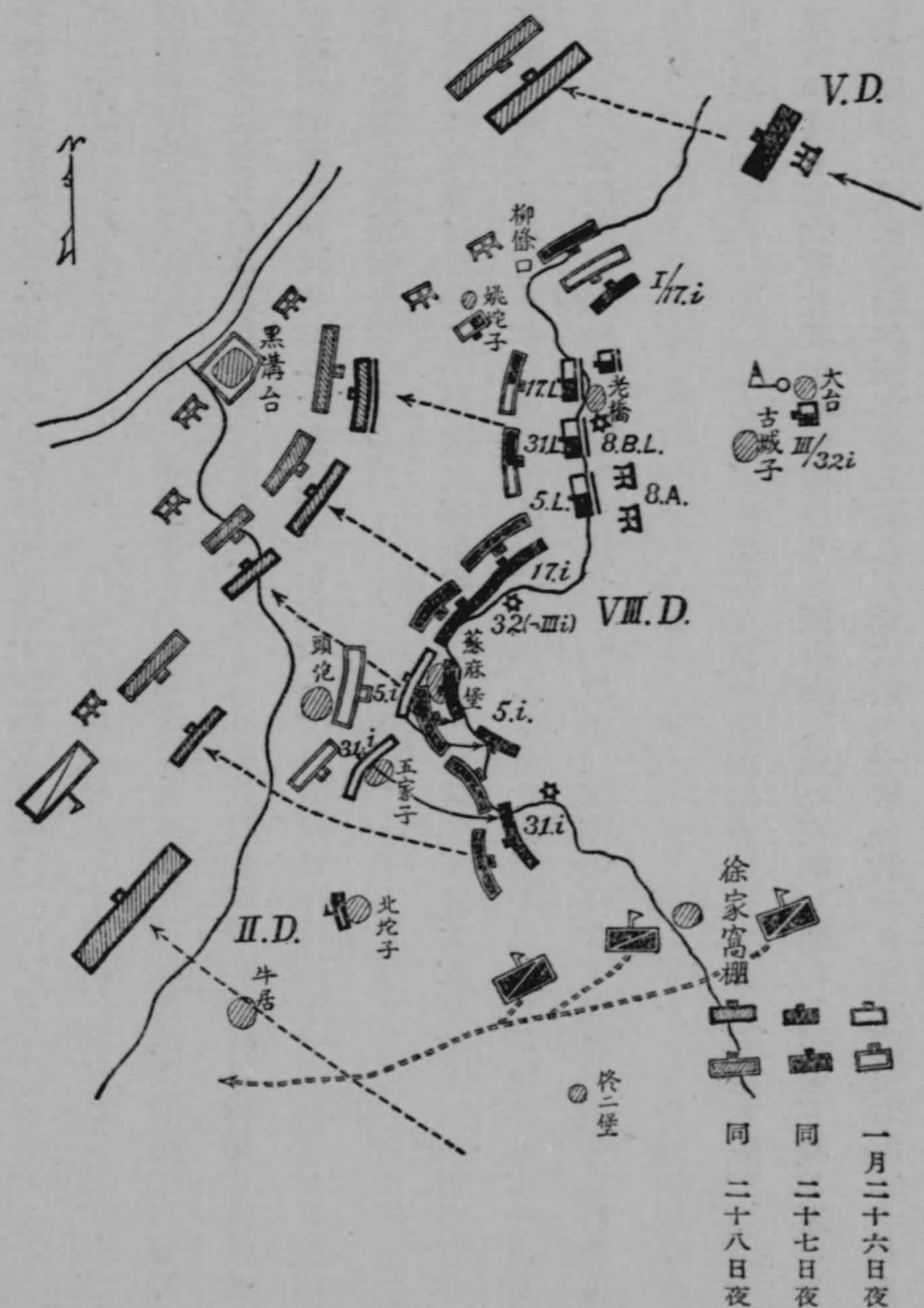
5、敵が蘇麻堡に對し夜襲を決行す。

此の日第八師團は全力を展開し一舉に黒溝臺附近の敵を撃攘して之を攻略せんとし敵の第一軍團長は獨斷攻勢に轉ずる自信ありて如何なる犠牲を拂ふも彼我兩軍の爲最も要地たるべき蘇麻堡を奪取せんとし日、露兩軍必死の攻防戦を現出せしが我が左翼隊の一部は遂に撃退せられ蘇麻堡に退却す。

露軍は東狙兵第一師團長「ゲルンゲロス」中將其の他の積極的意見により大夜襲を敢行するに決し「ゲ」中將自ら歩兵十二大隊を指揮し決然として蘇麻堡に向ひ夜襲を斷行し殆んど我が軍を包圍的に肉迫し各所闇黒の裡に接戦格闘が演ぜられ支那家屋の土壁一枚を隔てて群がる露軍と相對し部落内に火災起り炎々として戦場を照らし遂に敵は日本軍の一角を突破して部落内に進入し亂戦混

黑溝臺附近立見軍戰經過要圖

自一月二十六日同至二十八日夜



闘遂に退却するの已むを得ざるに至る。

五家子方面も又同一狀況にて遂に同夜敵の爲奪回せられ會戰第二日第八師團の奮闘も遂に其の效を奏せず。

第三日以降は右に第五師團、左に第二師團更に第三師團は來援し志氣頓に振ひ且側背の不安を除き昨夜迄後退しつゝありし第八師團も中央及左翼方面より攻勢に轉じ舊陣地を奪還し尋て更に夜襲を決行し遂に當面の敵を渾河右岸に撃退し我が滿洲軍の右側安全を確保するを得たり。

其三 本會戰の教訓と原則との對照

一、豫期する遭遇戰に於て敵情不明の場合に於ける戰闘指導

本會戰の第一日立見師團長は黑溝臺附近に少くも一師團を下らざる敵の在る事は推知しあるも同地に在りし後備隊其の撤退に際し敵との觸接を絶ち爾後の搜索十分ならざると降雪の爲展望を妨げられ敵狀殆んど不明なり。

之に於て師團長は全局の判斷に基き主動の地位を獲得する目的を以て後備旅團（地形を比較的知りある爲）を右翼隊とし歩兵第四旅團を左翼隊とし黑溝臺を攻撃目標に示し不期の戰況に牽かるることなく明確な方針を定めて攻撃部署を決定せり。

殊に新鋭なる歩第十六旅團を師團の豫備隊とせしは當時敵の有力なる兵團我が右側方面に進出しあ
るを豫期し之に策應せん爲である。

騎兵聯隊の主力を右側前に配置して専ら柳條口方向に對し警戒せしめ師團としては非常なる關心を
右側に持ちつゝ攻撃を開始せり。

従つて右翼隊の攻撃部署も一箇聯隊を第一線とし右側後に旅團の主力を豫備として控置せしが如く
全體的より觀察すれば右側警戒偏重の感なきにしもあらざれど師團長としては敵狀不明の爲何時側
面より不意に側背を脅威さるるやの懸命頗る大なると黒溝臺附近の敵兵力判定を多くも一師團を上
らずと稍、過少に推察せしも其の原因の一ならんか。

當時の狀況として師團の攻撃部署は概して適當なるべきも作令七五の主趣に依り危険翼方面の指揮
官は常に搜索を周密にし現在ならば飛行機に依り絶へず敵の行動を注視し斷乎たる決意を以て機敏
なる行動に出で速かに攻撃を決行するを適當とするが如し。

二、平坦地に於ける遭遇戦の攻撃前進について

平坦地の遭遇戦と云へば其の行動彼我兩軍共容易にして自然勇往邁進する軍隊は一氣に疾風迅雷的
に戦闘を指導し敵の戦勢浮動して未だ定まらざるに乘じ巧に機動を行ひ各、當面の敵の弱點を衝き
之を壓倒すること又容易なるが如きも實際問題として平坦開闊地は敵火の掃射地帯相當廣く且つ遠

くして其の前進も亦困難なるものにして有形的損害の僅かなるに比し志氣上の影響は可なり大なる
ものなり況んや本戦闘の如く敵情不明にして至る處優勢なる歩、砲兵に遭遇し而も降雪は紛々とし
て展望を妨げ一種の夜間戦闘の如き場合は敵眼敵火に遮蔽する代り我も又暗中摸索の感ありて各所
に不期戦を惹起し攻撃の進捗は遅々として意の如くならざるものあるを感ず。

作令九一の砲兵は攻撃前進の初期に在りては主として敵砲兵及遠距離より射撃する敵機關銃等を射
撃し歩兵の前進を容易ならしめ次で主なる火力を敵の歩兵に集中して我が歩兵を支援し一部の火力
を以て敵の砲兵を制壓し或は敵の後方部隊の増援を妨害するを要すと教へし所以なり。

三、師團の部署と其の砲兵の配置について

作令九五歩、砲の協同は歩兵戦闘の開始せられたる以後に於て特に重要なり而して爾後我が歩兵の
前進困難となるに従ひ愈、其の度を増し而も連絡の保持益、困難となるを以て我が歩兵敵の歩兵火
を被るに先だち更に歩砲の協定を補綴し……。

師團砲兵の使用竝に歩砲の適切なる協調が如何に戦闘の進捗に影響あるかは本戦闘に鑑みて痛感す
る所なり。

第八師團の攻撃部署に伴ふ砲兵聯隊は全力を右翼隊の直後に配置し左翼隊には一門の直接協同すべ
き砲兵なし而も敵は我に約三倍の野砲を有する戦闘に於てをや。

師團長としては次の理由に依りかく配置せしならんか。

- 1、師團の主攻撃を右翼方面に指向する爲歩砲の協同を極力後備旅團の攻撃正面に集中する要あり
 - 2、黒溝臺附近の敵は正面より攻勢に轉ずる顧慮あり。
 - 3、右側柳條口方面よりする敵の攻勢を顧慮する。
 - 4、山砲の威力としては現在の敵に對し不十分なり分割するより寧ろ集團するを利とする。
- 當時砲兵の使用原則として集團砲兵なるものが稱揚せられありし時とて已む得ざりしならんも左翼隊としては砲兵皆無にして隊長としては屢、其の一部の配屬を切望せしも聽かれず。
- 全然歩兵獨力にて敵の歩、砲兵の火力に苦戦し其の猛射の爲甚大の損害を生じ然も我が砲兵は此の方面に威力を及ぼすことなきため敵砲兵は獨り其の猛威を振ひ攻撃全く頓挫するに至れり。
- 之れ作令九五、「……所要の砲兵は第一線歩兵に近く陣地を變換し萬難を排して歩兵の要望を充足し得る如く適時適所に火力を發揚せざるべからず此の種砲兵……第一線歩兵の指揮官に配屬するを有利とす……」
- 砲兵隊長としても狀況上座視するに忍びず一部と雖も分屬を希望せしも全局の判斷上遂に其の事なくして遂に左翼隊は一時後退の已むなきに至れり。

四、敵砲彈下に於て歩兵部隊の前進

作令八九、「第一線部隊は成るべく長く集結せる態勢を以て敵に近接すべしと雖も敵砲兵の有効射撃を被る顧慮あるに至れば適宜疎開せる隊形に移り……」

本戦闘に於て中央隊たる歩兵第十六旅團が展開地區に前進する間幸ひにも曉霧の爲敵眼を遮蔽せしが一旦霧晴るるや俄然として敵砲兵より正面、側面より猛射を受け有形的損害は大した事なきも精神上の打撃は稍、大にして各隊共整々たる展開をなし得ず旅團長の毅然たる指導と紅河の障礙に依り辛うじて其の猛射を避けたり。

今日の兵器殊に科學の進歩は到底日、露役當時の比にあらざつて砲火の下に於ける歩兵部隊の有形、無形の損害は蓋し尠少ならざるべく各級指揮官は機敏なる指揮により敵砲火の有効射撃を被る顧慮の點に十分考慮し過早、過遲に陥ることなく敵火の損害を減少する手段を講ぜざるべからず。唯だ深甚なる注意を要するは小部隊長の疎開後の行動なり。

敵砲火は我が頭上に曳火破裂し其の爆音と蒙煙は全部隊の前進を阻止するならん此の時に於て小部隊は上級指揮官の統制下に在るとは云へ或る程得隨意に進止し固著し乃至轉移し爲めに各部隊間の混淆隊伍の支離を來たし或は著しく行進の遲滯を來たすことなきを保し難し萬一事茲に至れば戰機之が爲に逸し戦闘能力之が爲めに滅殺されること蓋し尠少ならざるべく之の浮動に乗じ敵は巧に機動して我を不利に陥し得ることとならん大に關心すべき緊要事なるべし。

五、上級指揮官の堅確不動の決意は不利なる戰勢を挽回す。

本會戰第三日は第八師團長兼立見軍司令官は異常の決心を以て部下各隊に攻撃を激勵し黒溝臺に對する攻撃を再興し假令全滅するも決意猛攻を續行すべく命じ右翼第五師團の進出、左翼第二師團の協力に依り一意前進せしむ。

右翼隊、中央隊共に勇を鼓して敵陣地に肉迫し左翼隊又萬難を排して前進し夕刻各隊は夫々突撃を執行せしも敵兵頑として退かず。

而も右翼隊は夜襲に失敗し一部後退の已むなきに至り立見師團長としては此の悲觀すべき連日の戰況にも係らず斷乎たる最後の決心併に不拔の攻撃精神を以て從容迫らざる沈勇なる態度を以て刻々の戰況に應じ最善の努力最良の方策を以て之の困難なる戰鬪を指導し遂に第四日目に於て戰勢を反轉せしめ遂に優勢なる勁敵を撃攘し赫々たる皇軍の名譽を發揚するを得せしめたり。

作令綱領十「……劍電彈雨の間に立ち勇猛沈著部下をして仰ぎて富嶽の重きを感じしめたる」所以ならんか。

第四篇 陣地攻撃

第一章 陣地攻撃に関する原則解説

其の一 攻撃準備

一、防禦陣地を占領せる敵に對しては機動に依り成るべく陣地外に決戦を求むるを可とす（作令一〇五）。

元來防禦陣地を占領せる敵を正面から攻撃することは兵力殊に強大なる砲兵を要し而かも著しく複雑靱強の性質を帯び資材の充實により其の抵抗も數層の段階となり而かも攻撃奏功するも敵に殲滅的の打撃を與ふることは困難である。

故に已むを得ざるか、任務上是非共攻撃せねばならぬ時は格別なれども成るべく迂回して敵の側背に迫り陣地外にて決戦を求むることが最良の方法である。

然しながら攻者として其の欲する方策をとらんとすれば何等かの特殊の方法を探らねばならぬ夫れ

は決戦を求めんとする方面の地形の周密なる偵察と我が行動の絶對的秘匿と神速なる機動である。迂回なり繞回なりの方法は其の主力を以てすると一部を以てするとに依り差はあるが要は勉めて堅固なる敵の防禦正面の攻撃を減じて其の目的を達成せんとするのである例へば日露戦役に第一軍が岫巖附近の敵を攻撃するに當り淺田少將の指揮する支隊を以て敵の右側背に迂回せしめしため敵は遂に動搖を始め損害なく之を占領するを得たり又奉天會戰の乃木、奥兩軍が遠く敵の右側背に進出し準備しあらざる地區に決戦を求めたるが如く何れも本原則の又一戰例たり得べし。

二、攻撃準備の意義と處置の概要

1、敵が主動の利を放棄し地形、地物を利用し物質的威力の發揚には十分意を用ひ諸般の設備を整へいざ來れと待ち構へて居るのであるから攻者としては飽くまで主動の利を發揮し時間の許す限り敵情、地形を搜索して左の件を策定す。

攻撃の時期、方向、方法

右の事項を決定せば十分なる準備の下に統一せる攻撃をなし得るのである。

搜索手段については飛行機、騎兵、歩兵或は砲工兵、装甲車等を利用し夫々其の目的に依り各機關の活動特に將校斥候を以てする戰鬥の爲の搜索は重要な責務を遂行し得るものであつて日露戰役當時も將校斥候は青年歩兵將校の華であると賞揚せられ難局に當る程克巳奮勵其の任務に邁

進し決死的に活躍して大に効果を發揮したものである。

攻撃の時期

晝間か夜間か拂曉か或は薄暮を利用するか或は隣接部隊の關係より前後する等夫々の方法は高級指揮官の余圖に依り決定せらる。

方法

敵の警戒陣地を攻略したる後攻撃の部署を決定するか或は警戒陣地薄弱にして一舉に本陣地と併せ攻撃し得るか或は歩、砲の前進關係等を規定し攻撃すべき方法を策定す。

要するに注意すべきは時日を遷延し敵をして益、陣地を強固にし又は新に兵方を招致するの時間を得せしめざるに在り。

2、開進の配置(作令一〇六)

開進の配置とは攻撃の爲敵陣地前に到着し我が軍の余圖、敵情、地形に稽へ攻撃の準備を容易ならしむる爲に警戒部隊及び本隊たる諸隊を夫々横廣の隊形に配置するを謂ふ。而して此の配置に就かしむるには次の事項を考慮する。

イ、攻撃準備を容易ならしむ。

ロ、爾後に於ける動作の自由を確保す。

- ハ、敵砲兵及飛行機に依る損害を減少する。
 - ニ、地上及上空の敵に對し遮蔽すること。
- 3、高級指揮官の處置
- イ、速かに通信隊長をして必要なる部隊間特に前方に派遣しある部隊との連絡を確保せしむ。
 - ロ、前衛に師團主力の開進掩護の位置を概示し且所要の搜索を命ず。
 - ハ、側縦隊の占領地區と停止位置の概示と搜索。
 - ニ、主力縦隊前衛と側縦隊との搜索、警戒地區の境界線を示す。
 - ホ、主力縦隊本隊の開進地區を夫々指示す。
 - ヘ、本隊砲兵は要すれば陣地を概示して敵の攻勢移轉に任へしむ。
 - ト、全般の爲防空の處置(以上作令一〇七)。
- 4、開進の配置に就くべき各部隊の動作(作令一〇八)
- イ、敵の視察を避くること。
 - ロ、敵砲兵特に瓦斯彈、飛行機の攻撃に依る損害を減少すること。
- 要するに配置を敵に偵知せらるることは我が余圖を察知せらるることとなるから勉めて地上、空中よりの視察を避くることに注意する。

又防者砲兵は其の一部を以て必ず妨害を加へんとし又敵飛行機も此の時機に於ては爆彈投下等に依り攻者を攻撃することを豫期し地形を利用し要すれば部隊を分置し止むを得ざれば疎散の配置を取る。

特に注意すべきは村落、森林等を利用し行動するに當り敵に察知せられ急襲的に瓦斯彈を打ち込まれる虞があるのと撒毒につき豫め發見處置が肝要である。

又道路は車輛部隊に譲ることは當然であるが從來綱要に「砲兵に譲れ」とあるを特に現時並に將來の部隊編成上車輛部隊が著しく増加せし爲なることを注意するを要す。

同位置にある部隊の高級先任官の爲すべき處置。

イ、必要なる警戒部署。

ロ、成るべく廣正面の隊形を以て隠蔽して各方面に進出し得べき進路の偵察且所要の設備。

5、搜索及偵察(作令一〇九)

イ、搜索、偵察の價値。

敵陣地の状態特に強度は攻撃計畫に大なる影響があるから敵の陣地及其の前後に於ける地形の偵察は状況の許す限り師團長の統一せる計畫に基き各部隊協力して迅速に成果を擧げねばならぬ。

然らばどれだけの範圍を偵察するかと云へば成し得れば攻略せんとする敵陣地の全縦深に互り状況の許す限り細密に行ふのを最善とする殊に主陣地帯の状況は出来るだけ其の状態、兵力、配備特に砲兵の配置、側防火の設備を偵知するのである。

□、搜索と敵警戒部隊の驅逐と攻略。

防者としても主陣地帯を丸出しにすることなく必ず前方に警戒部隊を出し幕を張つて目隠しをするのと搜索據點として主陣地帯の掩蔽をする。

従つて確實なる敵情は敵の警戒部隊を驅逐したる後始めて之を知り得るを通常とする。

殊に近代戦では築城術が發達したのと其の掩蔽手段が巧妙になつたので縱令飛行機を以てしても容易に發見されないから警戒陣地を早く奪取して搜索しなければならぬことになる。

警戒部隊を驅逐する方法

敵の小部隊ならば前衛適時之を驅逐し砲兵觀測所を獲得する。

稍有力なる部隊の場合は師團長の統一せる部署にて攻略す。

此の際飛行機、氣球及砲兵情報機關(砲兵聯隊内の情報班、指揮班の總稱)は特に活動して有效なる偵知手段を採らねばならぬ。

6、攻撃計畫(作令一一一)

一、攻撃方針の確定

攻撃計畫は先づ攻撃方針を定め之に適する如く企圖する方針は左記の事項により定める。

任務、地形、敵陣地の強度特に障碍物、側防機能の状態、撒毒地域、兵力、素質及裝備、攻撃に使用し得べき時日、準備彈藥數。

二、攻撃計畫に於て企劃すべき事項

攻撃計畫は戦闘經過に應ずる軍隊の部署を定め其の行動を律する爲の準繩たるものであつて其内特に重要なものは

イ、豫想する戦闘の各期就中突撃時機に於ける歩、戰、砲の密接なる協同。

ロ、奏功後の戦闘指導に要する準備。

要するに攻撃計畫は其の指揮官の腹案であつて決して規則的のものではない之に依りて戦闘各期に於ける各兵特に歩、戰、砲が協同して各隊長の戦術能力に應じ状況に適應して活動せしむる準繩であることを注意する。

三、攻撃命令(作令一一二)

師團長攻撃計畫策定せば之に基き通常攻撃に關する命令を下し各部隊を攻撃準備の位置に就かしむ其の主要事項左の通り。

歩兵 第一線部隊、展開區域、攻撃目標、戦闘地域、展開完了又は攻撃前進の時機、爾後に於ける戦闘遂行の要領要すれば使用し得べき彈藥の概數等（重火器特に歩兵砲の増加に伴ひ砲兵と同様の意味）。

戦車 歩兵に配屬するときは配屬すべき兵力、時機要すれば配屬期間、行動地域及時機の統制に關する事項等。

師團長直轄の時は待機、出發位置、出發時機、行動地域、攻撃目標、歩兵に對する協同法、任務達成後の行動等。

砲兵 主要なる各期に於ける歩兵直接協同の火力、其の他の火力及目的、陣地と爲すべき地域、使用し得べき彈藥の概數、效力準備射撃及效力射開始の時機、陣地變換に關する事項、歩兵に配屬すべき兵力及時機、要すれば攻撃準備射撃の要領。

工兵 戦闘各期に於ける作業要すれば完成時期、作業援助部隊、作業の掩護法、歩兵其他に配屬すべき兵力及其の時機等。

飛行機 戦闘各期に於ける任務要すれば使用すべき時機及機數。
其他 諸兵特に歩、戦、砲の協同に關する細部事項。

突撃準備特に障碍物破壊に關する事項、豫備隊の行動、防空、連絡、瓦斯防護、補給事項等。

三、展開

1、展開とは軍隊に戦闘任務を與へて縦長に配置するを云ふ所謂第一線に何大隊、豫備隊に何大隊と配置する。

縦長區分は戦闘指導に關する方針に基いて地形、兵力、敵情、側方依托の關係、明暗の度を考慮して定む。

2、攻撃準備位置について（作令一一二）

イ、第一線歩兵の展開區域

狀況の許す許り敵に近接せしむることが必要であるこれは攻撃の諸準備を爲すのが容易であるのと爾後の攻撃實行も容易であり歩兵線の直後に配置する砲兵も從つて敵に近く陣地を占領することが出来る。

ロ、砲兵陣地（作令一一五）

狀況の許す限り敵に近く配置すること必要であるそれは

一、敵陣地の全縦深に互り威力を發揚し得ること。

二、戦闘間陣地變換の不利を避ける爲。

最初の配置上の著意

火砲の特性に應じ任務、彈藥補充の難易等に依り定む即ち運動性小なるものは勉めて前方にして該地に於て成るべく長く動作し得しめ又歩兵直協の砲兵は所要に應じ容易に陣地を變換し得る如く考慮すること肝要である。

ハ、展開時に於ける各部隊の動作(作令一一七)

一、要旨

展開を命ぜられたる各部隊は秩序と連繫を保ち所要の警戒を爲し且成るべく遮蔽しつゝ攻撃準備の位置に就く。

二、歩兵

1. 第一線部隊は狀況に適合する態勢(地形、敵情等に應じ適當なる態勢をとる意)を以て敵情、地形を搜索する之が爲には前方に所要の斥候を出し又展望哨を利用する。
2. 直接協同すべき戦車及砲兵と必要なる協定をなす(協定事項は後章に述べ)。歩操四八九「大隊の展開は狀況の許す限り敵に近接して行ふ然れども戦機を逸し或は爾後の戦闘を拘束することなきを要す」又歩操四九二「展開に方りては通常重點を指向すべき

部分を決定し之に應ずる如く兵力を部署す最初より之を決定する能はざるときは爾後に於ける兵力の使用に支障を生ぜざる如く融通性を存するを要す」。

即ち歩兵大隊は敵情、地形等展開に要する確なる資料を得たる後之に基き展開すれば其の部署自ら適切に行くから努めて敵に接近したる後展開を行ふを有利とす。

要するに攻撃準備位置に於て概して展開の資料を得たならば大隊は展開するを可とするが師團内の大隊として狀況に依りては十分敵情、地形を搜索するを得ずして展開資料を得なかつたならば大隊として展開せぬがよろしい。

4. 攻撃準備位置に在りて過早の戦闘を戒むるも其の前方に觀測及爾後の攻撃進捗上必要の地點は一部を以て占領するを有利とす。

三、戦車(作令一一八)

戦車を有効に使用するのには不意且急襲的でなければならぬ夫が爲協同すべき歩、砲兵指揮官との協定に依り自己の行動を計畫し更に敵情、地形の搜索を周密にして爾後の攻撃を準備して完了するが此の際戦車の行動は極力秘匿するため有らゆる手段を盡くし地形、地物を利用して遮蔽或は偽装し又は轍痕を消滅する等の注意をなすが勉めて夜暗を利用するを可とする行動秘匿の爲砲兵の發射音、飛行機の爆音を利用せば有利である。

四、砲兵(作令一一六、一一九)

1. 爲し得る限り周到なる準備を整へ統一指揮の利を收むること。
2. 地形、戦闘正面等の關係又は敵陣内攻撃に在りて直協の専任砲兵を要するときは所要の砲兵を第一線歩兵の指揮官に配屬。
3. 敵情、第一線歩兵、戦車の兵力、部署、行動等を考慮し戦闘に關する計畫を定め之に基き部下諸隊に任務を與へ展開す。

五、工兵(作令一一〇)

工兵指揮官は任務に基き戦闘各期に於ける作業の計畫を定む。

主として戦車、砲兵等に必要なる通路の設備。

歩兵と密接に連繫して突撃及敵陣内の攻撃に必要な作業の實施。

六、飛行機部隊の地上戦闘に直協する場合(作令一一二)

1. 通常敵の戦車、有力なる砲兵、敵陣地の要點攻撃。
2. 重要なる第二線部隊、機甲部隊、交通要點の攻撃。

四、歩、戦、砲、飛の協同に就て(作令一一四、一一八、一二二、一二三)

1、歩、戦協同の要旨

イ、戦車は歩兵の爲最も緊要なる時機及地點若くは敵の最も苦痛とする時機及地點に對し爲し得る限り多數集結し勉めて同時に使用するを本旨とす。

ロ、之が爲歩兵が敵陣地の最前線の奪取に方りては

緊要なる障礙物の破壊と共に直後の重火器を攻撃。

ハ、陣内攻撃に方りては

我が砲兵の協同適切を期し難き地點の障礙物、重火器を蹂躪し以て歩兵の突撃を支援す。

要すれば敵陣深く突進して砲兵、司令部の急襲。

ニ、戦車を歩兵直協と挺進群に區分す。

戦車兵力大なる時は歩兵直協群と縱深に於ける戦闘を擔任する挺進群に區分し重疊して使用することあり此の場合には行動地域を規定し該戦車敵陣内に突入するに至れば必要の砲兵を以て支援す此の際特に戦車の危害を十分豫防すること。

歩兵指揮官に配屬せられたる場合の使用法

多くは歩兵の擔任正面に使用す其の協定事項は左記の如し。

2、歩、戦、砲の協定事項

直接歩兵の正面に戦車を使用する場合に於ては豫期する戦況に應じ通常左の事項中必要の件を豫

め歩、戰、砲間に協定す。

戰車を使用すべき時機及攻撃目標

進出目標又は中間目標

歩、戰、砲の行動(射撃)開始、戰車出發位置、行動區域、歩兵線超越の時機及方法

歩兵の突入時に於ける戰車及砲兵の協同法

戰車の敵陣地突入後に於ける歩兵線との關係及之に關聯し歩兵線と砲兵射撃區域との離隔の程度

敵戰車の逆襲に對する我が戰車の行動

各時期に於ける戰車の行動に對し歩、砲兵の與ふべき支援

一部隊の行動豫定の如くならざる場合の處置

歩、戰、砲間の通信連絡併に地點及目標指示の方法

任務達成後に於ける戰車の行動等

3、歩、戰、砲、飛の協同

歩兵に有力なる戰、砲、飛隊の協同する場合此の四者の組織的戰鬥力を發揮せんとせば其の強大なる威力に依り豫期の如く敵を席捲すべき確實なる方策を立て爲し得る限り自主的計畫を遂行せざる可らず之れが爲通常左の如く行ふ。

高級指揮官の統一せる計畫に基き準備を周到にす。

此の四部隊の行動を適當に時間及地域に依り規定す。

連絡を確保し各部隊の相互行動を極力緊密、協調し一部の蹉躓に依り全局の協同を破壊せられざる如くす。

其の二 攻撃方式

一、敵主陣地帯を偵知せずして直ちに攻撃する場合(作令一二四)

師團長の攻撃部署は左の著意に依り定む。

當初融通性ある攻撃部署を以て攻撃を開始し爾後如何なる情況判明するも躊躇することなく所期の攻撃を終始すべき方策を採るのである。

即ち砲兵及戰鬥資材を適宜推進し得る手段を準備しありて豫め縦深に對する攻撃準備を整ふ。

前線の敵を撃攘したる際敵主力陣地の位置に依り攻撃の差異

イ、敵主力の陣地其の近く後方に在ること判明せしたる場合には爲し得れば敗敵に尾して前進し一舉に敵陣地を攻略す。

ロ、敵主力陣地適置離隔して準備を整へ有る時は諸隊の前進を統制し砲兵を前方に招致し相互の協

同及連絡を調整する等新たに攻撃準備を整ふるを通常とす。

二、拂曉攻撃(作令一二五)

1、夜暗を利用し敵に近接し攻撃準備の位置を占め翌拂曉より攻撃を實行するので其の利とする所は敵眼、敵火殊に砲火の損害を避け我が企圖を秘匿し敵に近く攻撃準備の位置を占め従つて我が砲兵を敵に近く陣地を占領し砲火の威力を縦深に及ぼし歩、砲の協同が充分發揚し得る。然しながら夜間の混淆を防支するためには爲し得る限り晝間より搜索及諸準備を行ふこと。

我が企圖の絶對秘匿

拂曉の攻撃準備位置は敵情、地形、撒毒地域の有無を考慮し豫め周密なる計畫の下に其の位置を概定し勉めて敵に近接せしむ。

敵前至近の距離に攻撃準備の位置を設くる爲には二夜以上に互り二段三段に推進近接を要するともある。

要するに夜間と雖も黑暗々たる時と月明皎々たる場合により對敵行動は自然差が出来るが歩兵としては成るべく其の有する重火器を前進と同時に有効に使用し得るを一つの限度とすることも考へらるる。

2、攻撃實行に二様式あり。

イ、黎明時を利用して攻撃又は直ちに突撃する場合(作令一二六)

ロ、天明後砲兵威力の發揚後攻撃する場合

(イ)の場合は稍、夜間攻撃に類し其の利害とする所は敵砲火に對する損害を減少する代り我が砲火の協力が困難であるから特に歩、戰、砲の密接なる協同を必要とす。

(ロ)は攻撃準備迄は夜暗を利用し敵火を免るるが攻撃開始は天明後であるから我が砲火の發揚と歩、砲の協同は十分なるも敵砲火の威力も又甚大である。

3、日没時の位置を出發する時刻

一に狀況に依るが要は各部隊をして遅くも拂曉迄に連絡を確保し所要の工事を爲し攻撃實行の諸準備を完了し得せしむるを基礎とする日没後の前進を容易ならしむる爲前進地域の要點(敵の警戒部隊の一部占據)等は敵を驅逐して豫め占領し置くこと肝要である。

4、戰車の出發位置

第一線に近く其の位置を設け必要なる部隊と連絡を保ち爾後の攻撃を準備す。

5、砲兵の準備

成るべく晝間に於て拂曉以後に於ける戦闘に必要な左記事項を準備し且夜暗を利用して展開し

或は陣地を前方に推進して歩兵との協同に遺憾なからしむ。
敵情搜索、情報の蒐集

陣地並に觀測所の設備併に放列と觀測所との通信設備

射撃準備、彈藥補充の方法、上級指揮官との連絡、通信設備

歩兵との協定及通信設備

6、工兵破壊作業の偵察と障礙の排除、進路の標示

7、撤毒地域の制毒

其の三 攻撃の實施

一、攻撃開始より突撃準備に至る間の諸兵動作の概要(作令一三二)

1、砲兵の射撃開始及歩兵の攻撃前進

攻撃實行の爲砲兵の射撃開始及歩兵の攻撃前進は師團長之を命令して統一し實施する。

攻撃初期の砲兵射撃

イ、通常軍直轄砲兵と協力して敵砲兵を制壓又は破壊して歩兵の前進を容易ならしむ。

ロ、此の間要すれば障礙物、側防機能其の他の陣地設備を破壊す。

ハ、時として指揮組織の崩壊、敵後方に於ける交通遮斷若くは擾亂に任ず。

攻撃準備射撃に就て(作令一三二)

狀況特に敵陣地の強度に依り障礙物堅固で歩兵の攻撃前進後破壊にかかつては間に合はぬといふが如き場合で然かも準備彈藥が之を許す場合に於ては軍司令官が統一して軍、師團砲兵をして攻撃準備射撃を行ふことがある。

此の射撃は左の目的を以て歩兵の攻撃前進に先だち我が砲兵を以て不意且猛烈に行ふ。

イ、敵障礙物及側防機能、陣地設備の破壊

ロ、敵砲兵の制壓爲し得れば破壊の實施

2、第一線歩兵部隊の行動及歩、戦、砲の協同(作令一三三、一三四)

イ、第一線歩兵部隊は敵に近接するに従ひ益々詳細に敵情特に障礙物、側防機能、撤毒地域等の状態を偵知し特に歩、戦、砲の協定を補綴し其の協同を愈々緊密ならしむることが必要である。

ロ、砲兵の破壊し得ざる側防機能の破壊

歩兵重火器、戦車、工兵等に依り撲滅又は破壊し爲し得れば砲兵に通報して破壊せしむ。

元來敵の側防機能の詳細なる配置、障礙物の状態等は我が歩兵敵の火網内に入りて始めて確認し得ること多きを以て歩兵としては豫め對應の準備を盡くすと共に速かに發見機を失せず之を

處理し又戰車、砲兵に通報す。

特に突撃直前若くは突撃開始後不意に現出することあるべき側防機關銃に對しては歩兵自ら各種の手段を盡くして之を撲滅せざるべからず突撃の頓座するは多くは此のM.G.の側防火力に因ること多し。

3、配屬砲兵(作令九八)

歩兵に配屬せられたる砲兵は通常聯隊長以上に於て之を使用し要すれば更に大隊に分屬す而して此等の指揮官は速かに砲兵に自己の企圖及戰況を詳知せしめ其の達成すべき目的(歩、砲兵と協同し我が前進特に突撃を最も妨害する敵のM.G.歩兵砲等の撲滅)を示して適宜戰闘せしめ或は射撃目標及其の目的を示して戰闘せしむ。

4、歩兵に戰車を配屬せられたる場合(步操六六一)

聯隊長は戰車に其の攻撃目標若くは協同すべき部隊を示し第一線歩兵の戰闘に直接協同せしむ。戰車を第一線大隊に配屬する場合に於ては勉めて中隊の分割を避くるものとす。聯隊長は戰車を大隊に配屬する場合に於ても爲し得れば使用の時機及地點を示して統合戰闘力の發揮に遺憾なからしむを要す。

戰車の行動を容易ならしむる爲配屬又は直協砲兵と密接に連繫して敵の對戰車砲を撲滅又は制壓

せしめ或は煙幕を利用せしむるを可とす。

二、突撃準備と實施作令(一三五—一四〇)

1、突撃の爲には概ね左の準備をなす。

イ、我が火力を最高度に發揚し敵を萎靡沈黙に陥らしむ。

ロ、障碍物破壊の時機、方法、破壊口の數等は我が企圖を考慮し決定す。

破壊の方法は左の種別にて決行せらるるも相互の協同は必要なり。

戰車を以てする方法(地形と戰車の兵力許す時)。

砲兵、歩兵重火器(良好なる觀測所と彈藥數許す時)を以てする。

歩、工兵を以てする法。

歩、工兵と火砲を併用する法。

但し數線の障碍物に對しては第一線の破壊は通常歩、工兵を以てす。

ハ、各部隊の突撃部署と突撃掩護の處置。

2、突撃實施

イ、突撃支援の砲兵は敵の第一線及後方要點に熾盛なる火力を指向して其の火網及指揮組織を破壊擾亂す。

□、歩兵は亦火力を最高度に發揚し砲兵火力と相俟ちて敵を壓倒震駭し此の間其の第一線歩兵は極力敵に近迫し砲兵の射程延伸と共に最後の砲彈に膚接して突入す。
 射程延伸の時機は歩、砲相互間に豫め時刻を以て規定し且明確なる記號等に依り之が實施を齊ならしむること特に緊要なり。

ハ、狀況に依り第一線歩兵隨時突撃を實施し砲兵之に即應し歩兵を目視しつゝ射撃し且適時射程を延伸するを有利とすること亦少からず。

ニ、最初の突撃に戰車を參加せしむる場合

戰車は通常敵の最前線附近の障礙物、重火器、側防機能等を破壊蹂躪す砲兵之に協同し戰車、砲兵相俟つて歩兵の突撃支援をなす。

ホ、十分なる砲兵の支援を期待し得ざる場合

歩兵は自ら各種火器の威力を最高度に發揚し敵を壓倒しつつ敵陣地に近迫し突撃を決行す。
 此の際敵火の狀態に依り一進一止肉迫するを要するに至るべきも有らゆる好機を捉へ迅速に突進するを要す。

其の四 陣内攻撃（作令一四一）

一、陣内戦に於ける各兵の動作

1、第一の根本は各級指揮官の獨斷とす。

2、歩兵は死力を盡くして一意所命の目標に向ひ突進すること。

3、大戦長は適宜掃蕩隊を使用して殘敵の掃蕩併に堅固なる構築物に據れる敵兵の撲滅。

4、突破孔兩側の席捲は後續部隊の任とす。

5、豫備隊を以て戦果の擴張或は逆襲の撃退要すれば突撃部隊の側面掩護。

6、直協の戰車は機を失せず歩兵に危害を與ふる敵を蹂躪す。

7、砲兵は歩兵と密接に連繫して逐次敵の要部を猛射し一部を以て敵砲を制壓且敵の逆襲を阻止す之が爲所要の砲兵は陣地を前方に變換す。

8、工兵は歩兵を援助し砲、戰車の進出を容易にし要すれば殘敵、地雷の掃蕩、占領地區の補強工事。

9、飛行機は特に敵の後方部隊の移動に注意し速かに其の企圖を偵知して各級指揮官に通報し且適時彼我の最前線等を砲兵に通報す。

第二章 奉天會戰第三師團于洪屯附近の陣地攻撃

(明治三十八年三月六、七日)

其の一 戦前一般の形勢

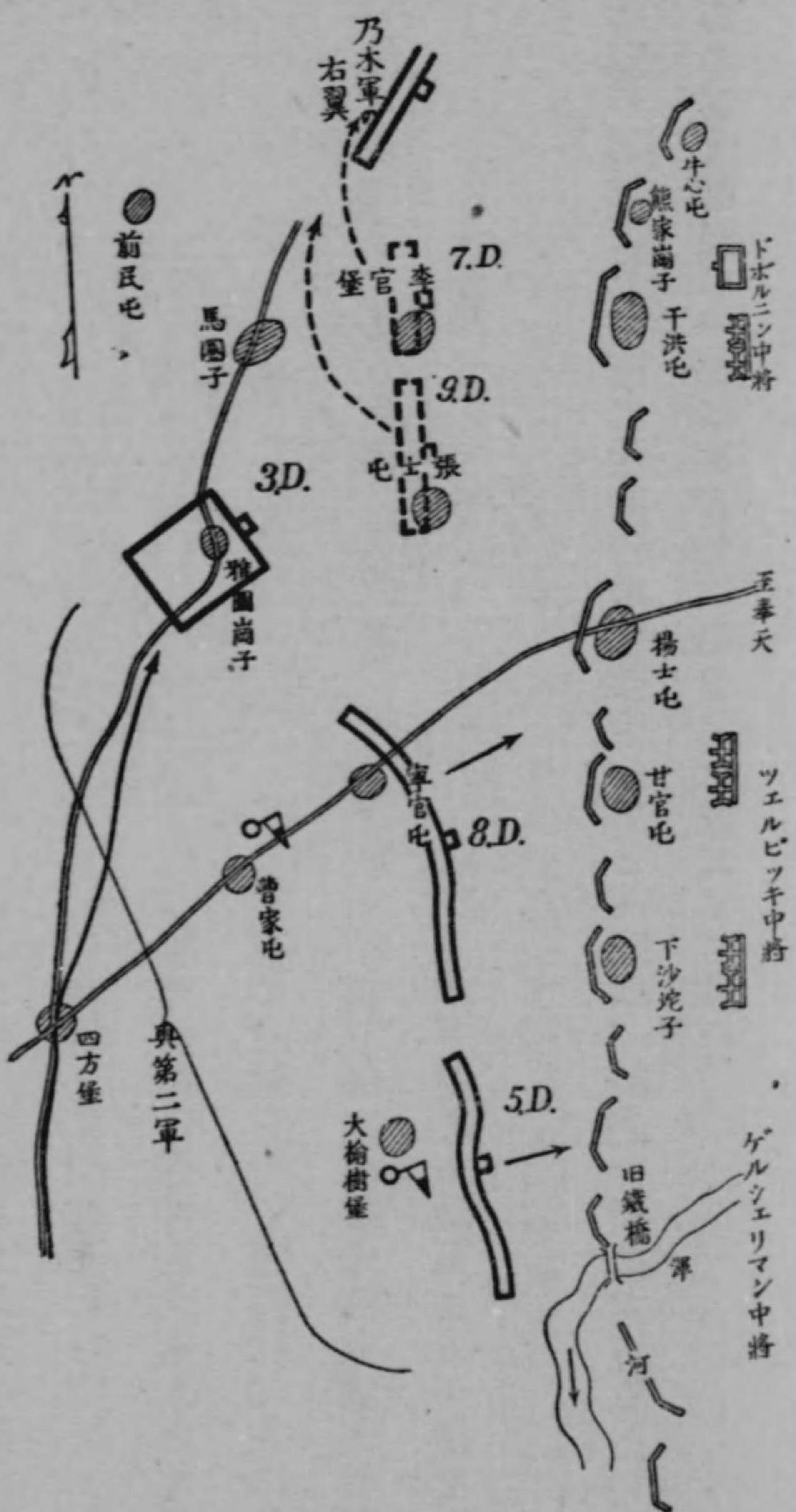
一、第三師團の行動

奉天會戰に於て日本軍第三師團(長大島義昌中將)は始め滿洲軍總豫備隊として軍司令部附近に位置しありしが三月四日大山總司令官の軍命令依り第二軍司令官與大將の隷下に入り軍の左翼後に前進し五日十一時三十分左の第二軍命令を受領す。

1、敵は渾河舊鐵道橋附近より沙坨子、楊子屯の線を占領し目下第五師團は崔家堡附近より魚鱗堡、寧官屯附近に互り各當面の敵を攻撃しつつあり。

第九師團は目下寧官屯以西に展開しありて漸次北方に轉移する筈。

2、第三師團長は直接第九師團長と交渉し第九師團にして張士屯附近を撤去せば直ちに其の師團を展開して楊子屯以西の地區に進出するの準備をなすべし爲之第三師團は直ちに出發四方堡、曹官屯を経て前進するを要す。

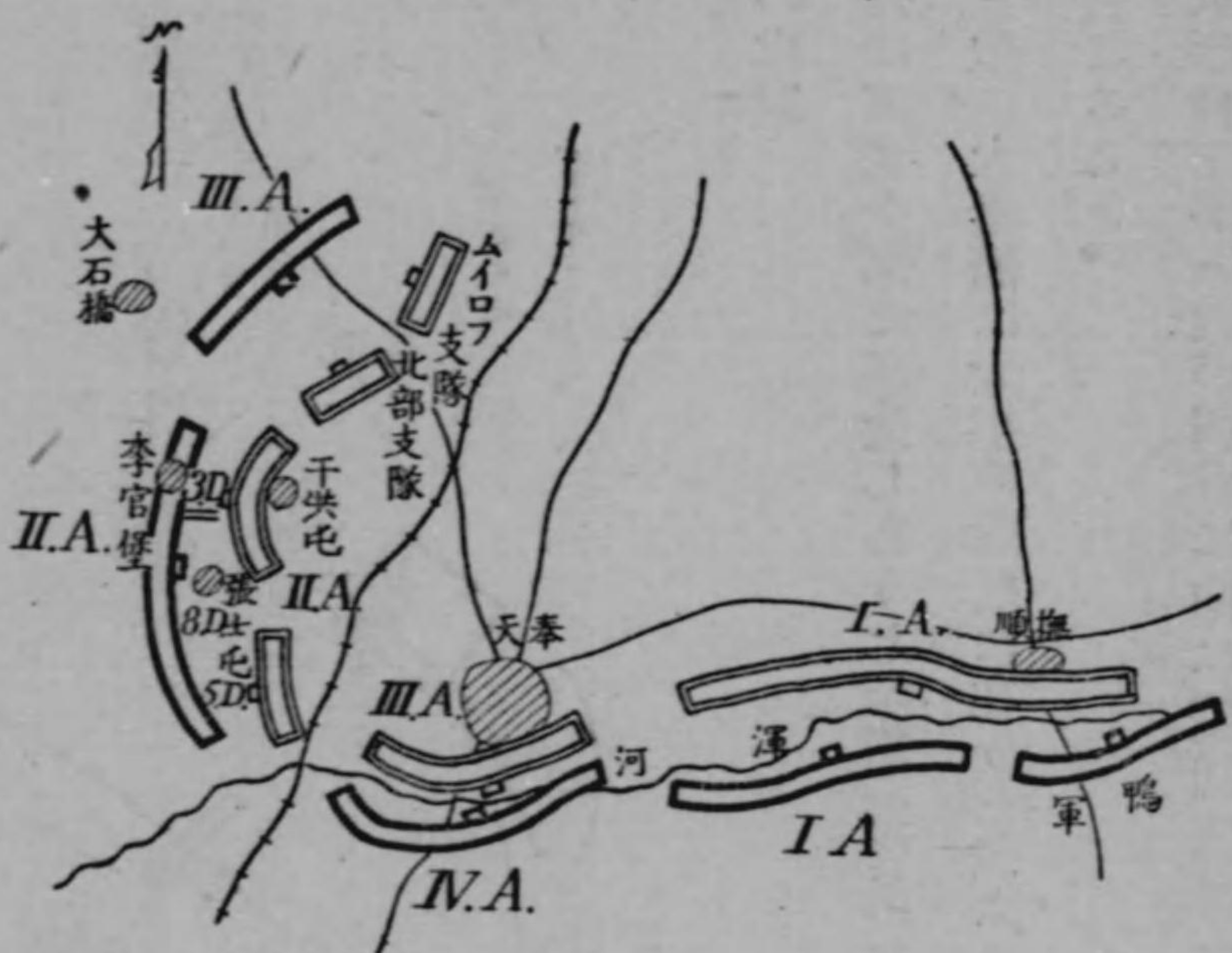


二、師團長の處置

當時師團長は軍司令部に派遣しありし師團副官の報告に依り後塔、太平庄、奉天北方には若干の工事あること敵の大集團は太平庄附近に在りと云ふも確實ならず又敵の大部隊は一昨三日北方に退却せしは確實なること。

乃木第三軍は目下著々敵の側背に向ひ繞回運動中にして現在第九師團の主力は張士屯一部寧官屯

奉天會戰一般關係要圖
三月八日以後



第九師團の部隊にして既に前面の敵と觸接しある部隊は一時之を指揮することを得但し張士屯附近にある第九師團の一部は本日又は明日之を撤去する筈。

に、第七師團の主力は李官堡西南無名部落に第一師團主力は大石橋附近に在ることを知り左の處置をなす。

1、師團參謀を張士屯に在る第九師團長の許に派遣し陣地交代に關する協議なさしむ。

2、師團諸隊は雅圖崗子西側附近に前進し該地附近に開進せしむ。

師團の將に開進を終らんとする十四時五十分軍の攻撃命令を電話にて左の如く受領す。

第三師團は張士屯及前民屯附近より展開し楊子屯北方地區より千洪屯に互る敵を攻撃すべし(上圖參照)。

其二 攻撃戰闘

一、師團の威力搜索(作令一の二〇九、一一〇)

1、三月六日夜半一時軍命にて師團長は左の企圖を知る。

軍の企圖は速かに前面の敵を擊攘し奉天西北方地區に進出するにあり。

之が爲隷下諸團隊は本六日極力各當面の敵を攻撃し其の所命の地區に前進せしめんとす。

然るに師團は五日夜遅く李官堡附近に到達し直ちに第九、第七師團の一部と交代し交代部隊の後退、轉進等混雜の最中にして敵情は勿論附近の地形すら全く不明なり従つて此の現狀を以て直ちに今拂曉敵に對し強襲を行ふは頗る危険であり且不安である關係上師團長は本六日極力敵情、地形を搜索し攻撃を準備するに決し二時之に關する左記要旨の師團命令を下達す(當時歩三四聯隊、騎兵聯隊の主力は一時第四師團に配屬しあり)。

右翼隊〔歩十八聯隊(一大隊欠)工兵第二中隊〕

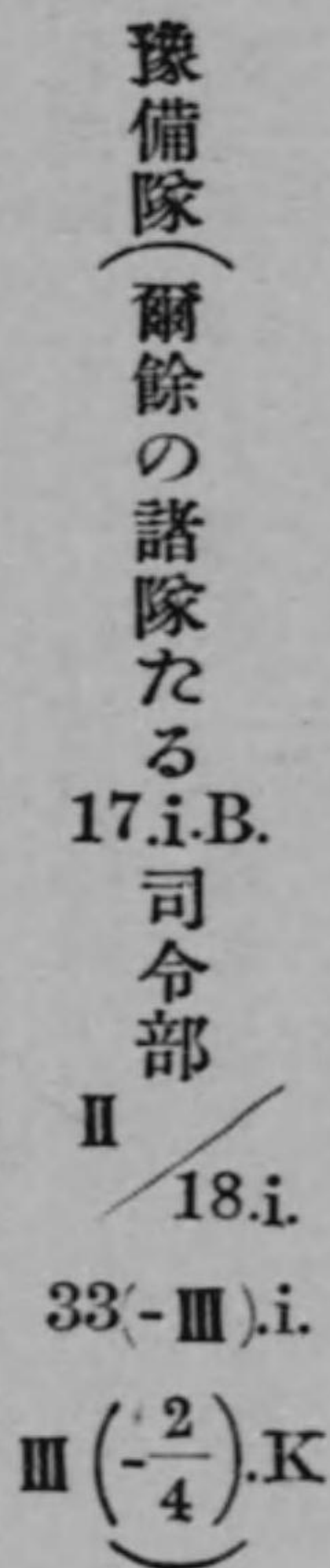
今拂曉迄に一部隊を以て張士屯東方舊第九師團の陣地を占領し主として前面の敵情搜索。

左翼隊〔歩兵第五旅團(歩三三本部と二大隊欠)〕

今拂曉迄に一部隊を以て舊第七師團の陣地を占領し前面の敵情搜索。

砲兵隊(野砲第三聯隊)

今拂曉迄に李官堡附近に於て楊士屯、干洪屯、熊家崗子方向を射撃し得る如く陣地を占領し天明と共に敵陣地を射撃し歩兵偵察隊と協力し敵情報の蒐集。



七時迄に東馬圈子東端附近に集合せしむ。

2、兩翼隊長の搜索部署

イ、右翼隊は第三大隊を張士屯東方約千米の陣地を占領せしめ第一大隊(第一、第二中隊欠)をして楊士屯北側約二千米附近の敵堡壘の搜索。

ロ、左翼隊長は歩六聯隊の第一大隊をして拂曉干洪屯西方約千米の陣地を占領して同村附近の敵情を偵察せしめ爾餘の諸隊を李官堡西側地區に集合待機せしむ。

砲兵第三聯隊は五日夜既に張士屯東北方約七百米の地區に陣地を構築しありしが前述の師團命令は四時に到達したるを以て李官堡附近に陣地を變換せんとせば拂曉迄に之が完成を了せざるを以て六時三十分豫め準備せし張士屯東北方の陣地に進入す。

3、搜索隊の動作

イ、右翼隊の搜索隊たる第一大隊(第一、第二中隊欠)の搜索戦闘

六時三十分張士屯を出發同村東方約千米の搜索據點陣地(第三大隊占領しあり)より兩中隊を廣間隔に展開して前進し七時五分頃より微弱なる敵の小銃射撃を受け兩中隊は散開して之に應射しつゝ遂次小隊乃至分隊毎に躍進し敵陣地前約千米附近に達するや敵火漸く熾烈となり敵陣地の兵力と概ね第一線も判知し得たるを以て九時頃より分隊毎に逐次後退せしめ搜索據點たる第三大隊に收容せられ大なる損害なく主力位置に歸還す。

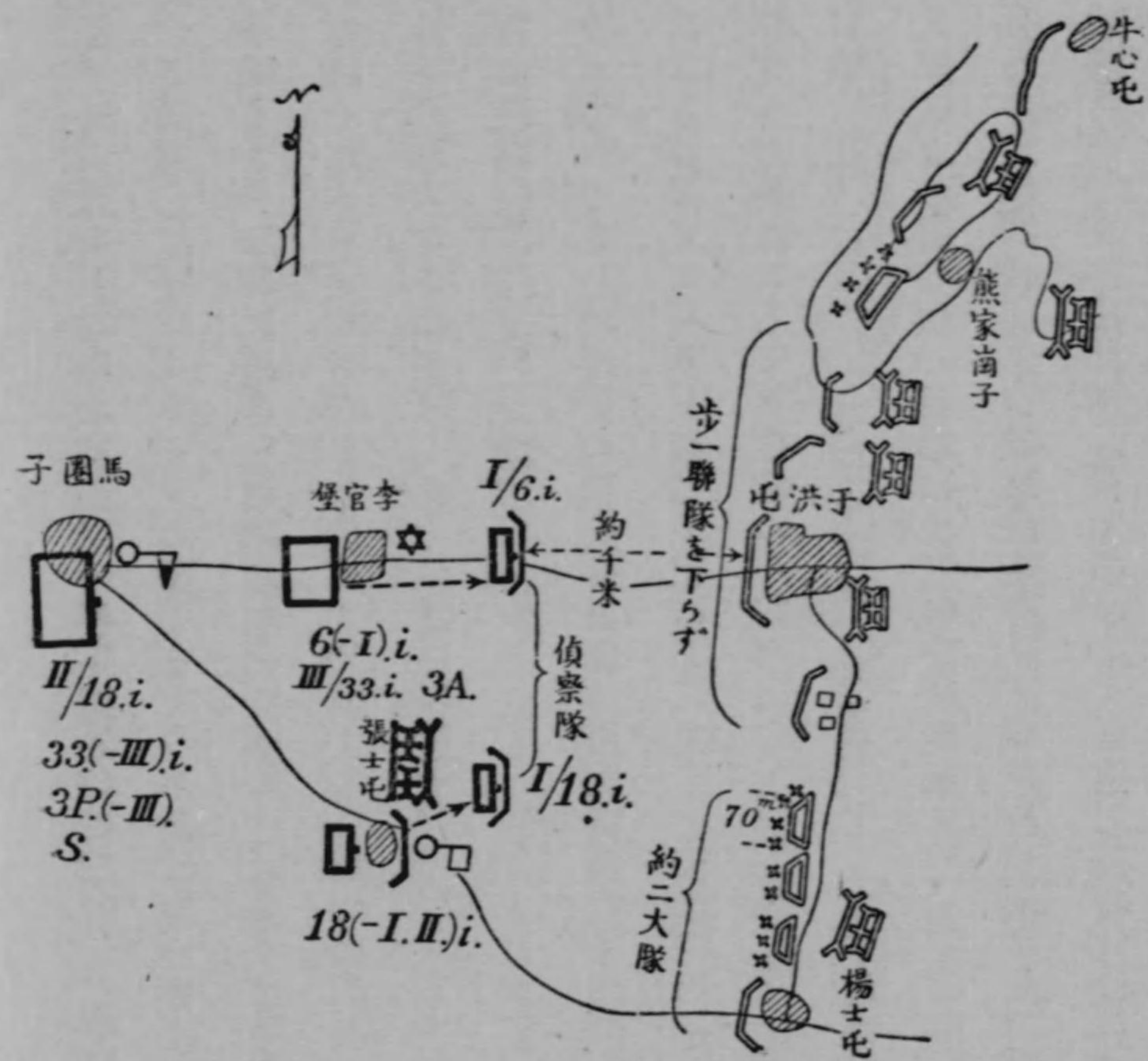
ロ、左翼隊の搜索戦闘(歩六の第一大隊)

六時三十分李官堡を出發し拂曉前大隊全部を廣正面に展開して干洪屯の西方約千米の陣地を占領し天明と共に敵の要點に射撃を開始す敵は之に應じて干洪屯附近より一齊射撃(當時日露兩軍共歩兵の採用せし射法にして指揮官の一號令にて中、小隊一齊に發射する射法なり)を行ひ續いて少時急射撃(當時の射法にて一分間約五、六發發射)をなす爾後敵は砲兵、歩兵を以て屢々我を射撃す大隊は之の間各種の視察に依り偵察に従事す。

其の間旅團長たる左翼隊長は李官堡東南端附近に位置して聯、大、中隊長其の他所要の人員を區處し敵情視察を命じ又直接將校斥候を指示して派遣し偵察大に努め我が砲兵も又射撃を以て偵察隊の動作を援助す。

敵 狀 搜 索 要 圖

三月六日正午に於ける



4、搜索の結果知り得たる敵狀

搜索の結果を綜合するに要圖の如く我に對する敵は揚士屯北方約二千米の堡壘より干洪屯を経て熊家崗子附近の丘阜に互り陣地を占領し干洪屯南方約千米及熊家崗子西南丘阜端の堡壘より障物物を設け且其の兩側には數箇の散兵壕を連接し各村落殊に干洪屯には堅固なる防禦編成を施しあり。

該村及其の南北の敵兵は歩兵一聯隊を下らず又揚士屯北方二千米附近の堡壘は其の南北各六、七百米に互りて散兵壕あり其の間隔は鹿柴を以て閉塞し第一線の兵力約二大隊を下らず。

敵の砲兵は熊家崗子の丘阜に二中隊、其の東南に一中隊

牛心屯東南方森林一中隊、干洪屯東南端に一中隊及南方に一中隊

要するに我に對する敵は微弱なる約一師團と判斷す。

二、第三師團長の決心(正午)

師團は敵情前述の如く且砲兵聯隊が李官堡附近に陣地構成の時間を得ず隨つて攻撃目標たる干洪屯、熊家崗子附近を十分射撃し能はざるを以て晝間力攻するの不利なるを知り明七日拂曉を期し敵を強襲するに決し兩翼隊をして一層敵陣地の偵察に力め且砲兵聯隊をして李官堡北端に陣地變換の準備をなさしめたり。

三、軍司令官の命に依り一部を以て第八師團の攻撃に協力と師團明拂曉の攻撃部署
 十六時三十分師團長は専ら右決心に基き明日の強襲を準備中突如軍司令官より右隣接の第八師團が
 十六時三十分を期し全力を擧げて攻撃前進に移るべきを以て第三師團は之に連繫して當面の敵を攻
 撃すべく命あり。

然るに師團としては目下の現配備及前面の敵狀前述の如くなるを以て今より直ちに晝間の力攻を許
 さず依りて右翼たる歩十八聯隊及砲兵の全部を以て第八師團の攻撃を援助すべく區處し本夜は現在
 の態勢を以て夜を徹するに決し二十時明七日拂曉攻撃の爲め馬圈子に於て左記攻撃命令を下達せり。
 一、右翼隊(長箕形少佐歩十八の第一大隊)は張士屯東方約千米にありて揚士屯北方約二千米の堡壘
 附近の敵を牽制す。

二、左翼隊(長南部少將歩兵第五旅團、騎兵半小隊、工兵第三中隊、迫撃砲一門)は七日拂曉迄に干
 洪屯を占領し得る如く之を強襲し續いて熊家崗子を攻撃す。

三、野砲兵第三聯隊は七日拂曉迄に干洪屯南方村落及熊家崗子を射撃し得る如く李官堡東北端附近
 に陣地を占領す工兵第三大隊(第三中隊欠)は其の工事を援助す。

四、歩屯第十七旅團司令部及歩十八聯隊(第一大隊欠)騎兵中隊は豫備隊となり五時三十分馬圈子東
 端に集合。

工兵第三大隊(第三中隊欠)迫撃砲一門は砲兵隊の工事終了後豫備隊に合す(備考1⁵2は李官堡に
 在り)。

四、左翼隊長の攻撃部署と攻撃實行(三月七日)

左翼隊長は前夜李官堡に於て左記攻撃部署を命ず。

- 1、歩三十三聯隊(長吉岡中佐)(第二大隊欠)及工兵一小隊右第一線、歩六聯隊の右翼に連繫し干洪
 屯南方約五百米の三軒屋の敵を攻撃。
- 2、歩六聯隊(長武内中佐)(第一大隊欠)工兵一小隊は左第一線、五時李官堡東方約五百米に展開し
 其の一部を同村東北約千米に在りて牽制に任せしめ主力を以て干洪屯西南端家屋附近に向ひ攻撃
 自餘の諸隊は豫備として李官堡東側に集合せしむ。

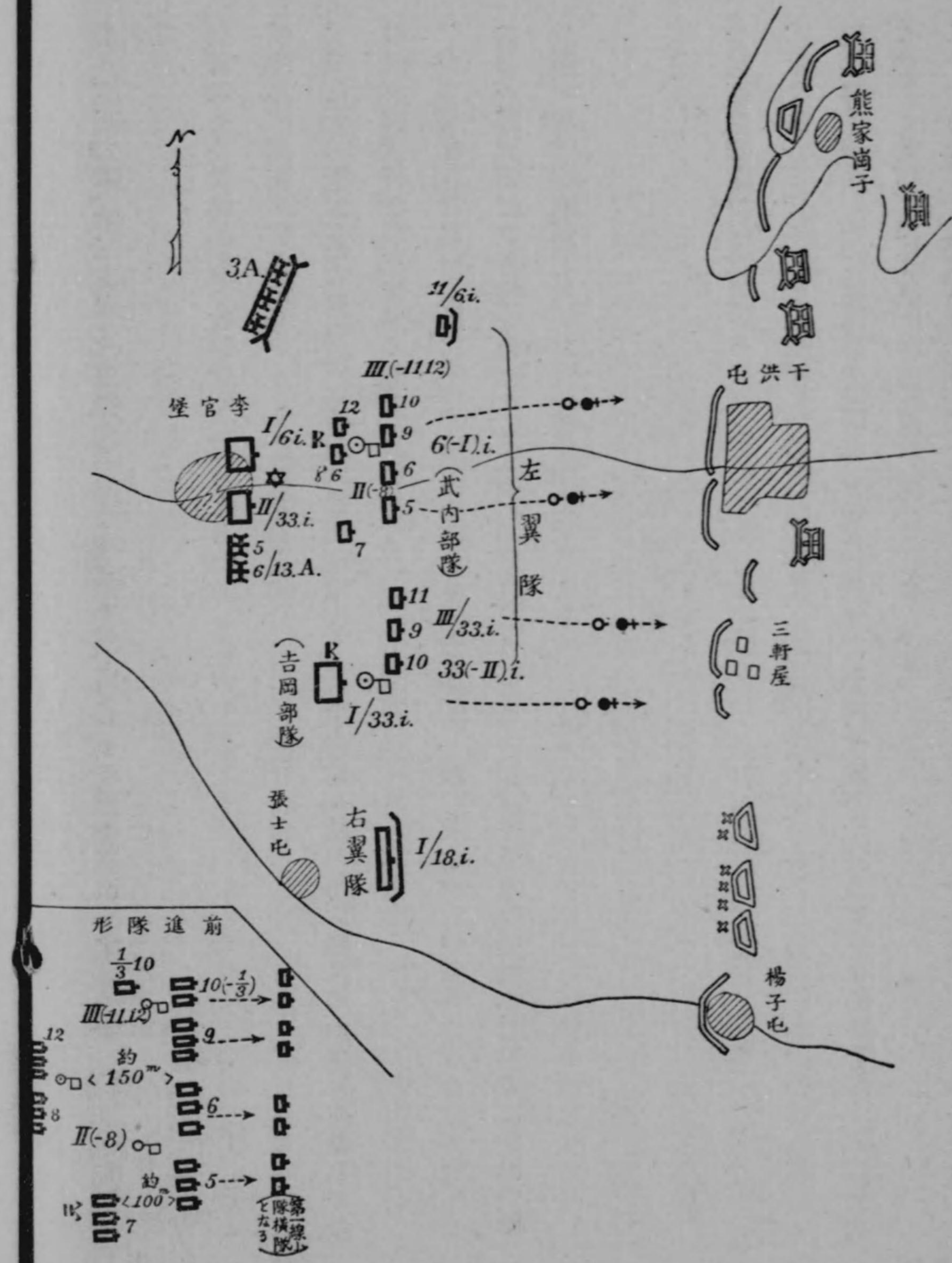
其の三 左翼隊の戦闘經過

一、歩兵第六聯隊の奮戦

- 1、命令は一下せり兩歩兵聯隊長は直ちに翌日の爲戦闘の諸準備に著手し胸中必勝の秘策を藏して
 敢然部下將兵と共に敵陣を突破すべき確たる信念を以て氷點下十度の寒夜に敵眼を避くるため火
 もたかず纔かに半煮飯に空腹を醫し露營の夢を結ぶ。

左翼攻撃隊前進部署要圖

三月七日四時に於ける



作戰要務令と戦史の對照研究

明くれば七日四時歩六聯隊は歩三三聯隊に連り干洪屯西方約千二百米の池の東端に集合し右圖の如く展開し干洪屯西南端突角を攻撃目標として前進を準備し別に第十一中隊を牽制部隊として李官堡東北方約五百米の舊散兵壕に據り射撃を以て敵を牽制し第一線主力が村落内に突入せば引續き前進を命ず。

此の時兩大隊より差遣せる將校斥候は已に敵前四、五百米附近に達す時に東天僅かに曙光を認むるも天尙ほ暗く寒威曉風と共に身にしむ。

2、敵火熾烈を極むるも聯隊は飽く迄銃剣突破を信念として進む。

五時三十分頃第一線は敵前約五百米に達するや前方に二、三の銃聲を聞き次で漸次熾烈となり第一線敵前三百米に達せし頃は頗る激烈となりしも未だ天明に至らず従つて死傷多からず。

斯くて第一線の諸斥候敵下土哨の急射撃を受くるや斥候は急に駈歩に移り爲めに近く續行する第一線小隊も又歩度を早めしかば敵前約二百米に達せし時は靜肅行進を行ひつゝある第二線小隊との距離延伸し自然大隊、聯隊の豫備隊等相當離隔し縱深大になりしため爾後の行動を顧慮し第一線大隊長は一時第一線の停止を命じ第二線を追及せしむ。

此の頃より敵火線の正面著しく擴大し敵火又甚だしく猛烈となりしも彈丸は徒らに頭上を掠めて効果尠なし。

然るに左側にありて牽制に任ずべき第十一中隊射撃を開始するや敵は一般の我が攻撃情勢を察知し射撃は稍、正確となる此の間一時停止を命ぜし第一線も牽制中隊の射撃に誘發せられ我が左翼大隊方面より射撃を開始するに至る。

聯隊長の企圖としては飽く迄夜襲の信條を以て銃劍突破を命じ當日は裝填を禁じありしも如何にせん新募編入の補充兵の參加其の他の關係に依り遂に火線は開始せられたり。

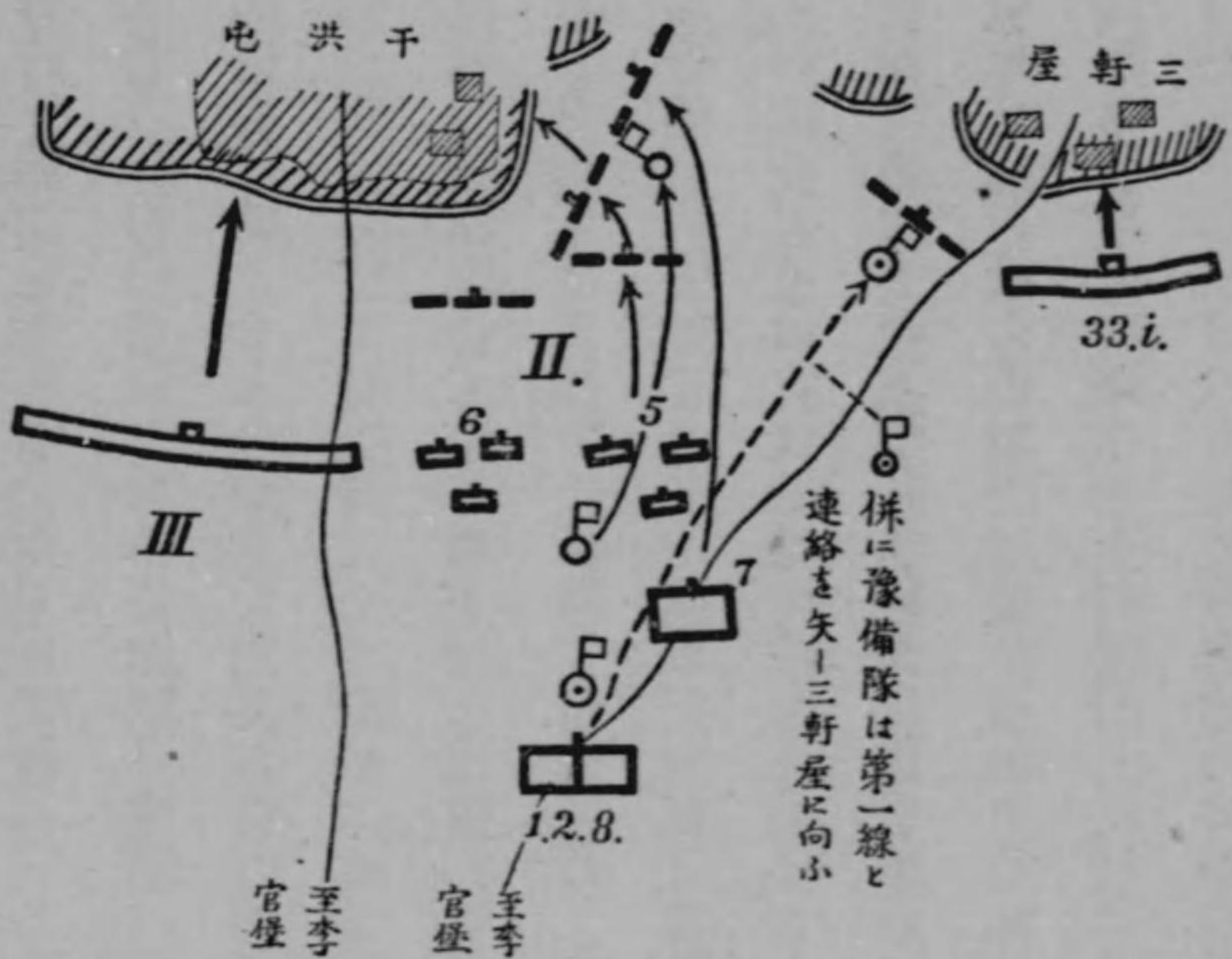
敵は我が射撃の火光に依り第一線を確認し射撃愈、正確となり我が將兵の死傷續出す。

幸にも右第二大隊は未だ射撃しあらざるを以て直ちに第一線に躍進を命じ恰もよし此の時第二線も近く前進し來り一舉驀進せり。

此の時猛火を冒し前進中誰か元氣附けに發したるヨイシヨ／＼の掛聲は其の音調極めて低しと雖も忽ち全線に傳はり今や如何ともなし難し彼の豫期せざる射撃開始、又此の掛聲は生死に直面したる軍隊に戰場不慣の新加入補充兵の行動に發せるは將來幹部として大に反省せざるべからざる所なり。

敵は暗中の黒團に此の掛聲を目標として猛射を浴びせ忽ちにして死傷續出す一時停止して整理を要するに至れり。

3、聯隊の前進方向右に偏し大轉換を行ひ突撃す。



第四篇 陣地攻撃

聯隊は李官堡—干洪屯道に沿ふて前進すべきを實は李官堡—三軒屋道に沿ふて前進しありし事に氣付き直ちに攻撃目標に向ひ左に行進偏移を行はば却つて村端の敵陣地前にて混雜を招くを慮り更に一躍進後斷乎として方向大變換を行ひ敵の左側背より席捲するの有利なるを觀破し約百五十米の躍進を命じ停止と共に方向變換を行ひ同時に豫備たりし第七中隊を其の右翼に進出せしむ。此の動作は眞に猛火を集中せられ甚だしき損害を蒙りしも能く沈著して概ね順調に完了して遂に突撃を決行せり。之れと同時に斜後ろの三軒屋北端と覺しき地點に於て爆藥の炸裂する音を聞く思ふに聯隊の豫備隊(第十二中隊は已に大隊に復歸しあり)第一線に追從中其の方向變換せしことを知らず最初の方向の儘直進の結果三軒屋の敵に衝突したるものにして當時歩三三聯隊の左翼亦軍旗と共に三軒屋に突入し在りたるを知れり。

4、村落を防禦し在る敵に對する突撃

干洪屯の村落防禦をなしある敵は各家屋、土壁に據り我に抵抗し殊に第二大隊の掛聲と三軒屋方面の爆音に因り多大の注意を南部部落方面に集中し第二大隊が激烈なる小銃火を交へ手榴彈を投擲して同村の東南端に突入するや敵は俄かに兵力を増加し接戦格闘の後僅かに一角を占領せしが敵は益々増援を得て第二線家屋に後退して頑強に抵抗し此に家屋戦闘を惹起し歩々火戦と格闘、爆撃の交錯となり各所に紛戦、掃蕩をなし戦闘は漸く靱強となり當時天漸く明け濃密なる朝霧は四邊を鎖し約十五、六米の前方を透視し得るの情況なり。

第五中隊長青山鎔次大尉は中隊の先頭に立ちて最も勇敢に突入し村端西南突角に於て極めて壯烈なる格闘戦起り彼我刺殺斬撃共に屍を累ねて殞れ壯烈の限りを盡し奮戦す。

5、家屋に據る敵の攻撃と彼我の混戦其の極に達す

堅固なる家屋殊に地下室を利用して抵抗する敵に對しては現在ならば直に爆薬破壊又は戦車、装甲自動車、手榴彈、火焰放射器等の科學兵器を用ひ得べきも日露戦當時は多く爆破、手榴彈の外策なく一家屋毎に我が軍に十數名を傷けつゝ占領し行々家屋土壁を破壊して前進し村落中央部に四壁堅固にして高く巖然たる復廓を形成せる老爺廟に衝突し一時退避せる敵も熊家崗子方面よりの増援と共にもり返して一層頑強に抵抗す村落正面より攻撃せし第三大隊も又突破して村落内に

突入し彼我混淆互に包圍と包圍の對峙となり極度の紛糾混戦に陥り殆んど收拾すべからざる景況を呈し今は只一家屋、一圍壁内を掃蕩する個々別々の部分的亂闘となり死傷益々續出したるが敵又續々投降し來る。

老爺廟の復廓の敵は益々勢を増加し却つて攻勢の氣勢を示し互に道路を隔てて接戦遂に煉瓦の投擲戦となり石會戦となり戦闘漸く交綏の状態に陥るも彼我村落内の交戦は入り亂れて慘憺たる光景をなし我が軍屢々此の復廓に突入せしも奪取するを得ず。

當時聯隊長負傷第五、第六中隊長戦死第七中隊長負傷第八中隊長は三軒屋に殞れ大隊の生存將校僅かに三、四名に過ぎず彈藥又盡き爆薬なく死傷者の彈藥を收集して僅かに敵と相對して死守す。6、爾後の戦況益々苦境に陥りしも將兵不屈克く戦ひ左翼隊長は第六聯隊の危急に瀕するを知り尙ほ萬死を冒して連絡せし岡本大隊副官の現状を聴き直ちに其の豫備隊の全部を以て救援せしめしも敵火猛烈にして豫備の三中隊は増援の途中多大の損傷を受け殆んど其の大半を失ふに至る。數回に亘る敵の大逆襲に對し生存者の死守。

依然優勢なる敵と相對し占領地を頑守しある時敵は大規模の大逆襲を決行し來り殊に右方の三軒屋の我が守兵全滅してより該方面の敵と合流して前面、側面より攻撃せられ戦況刻々悲なり。

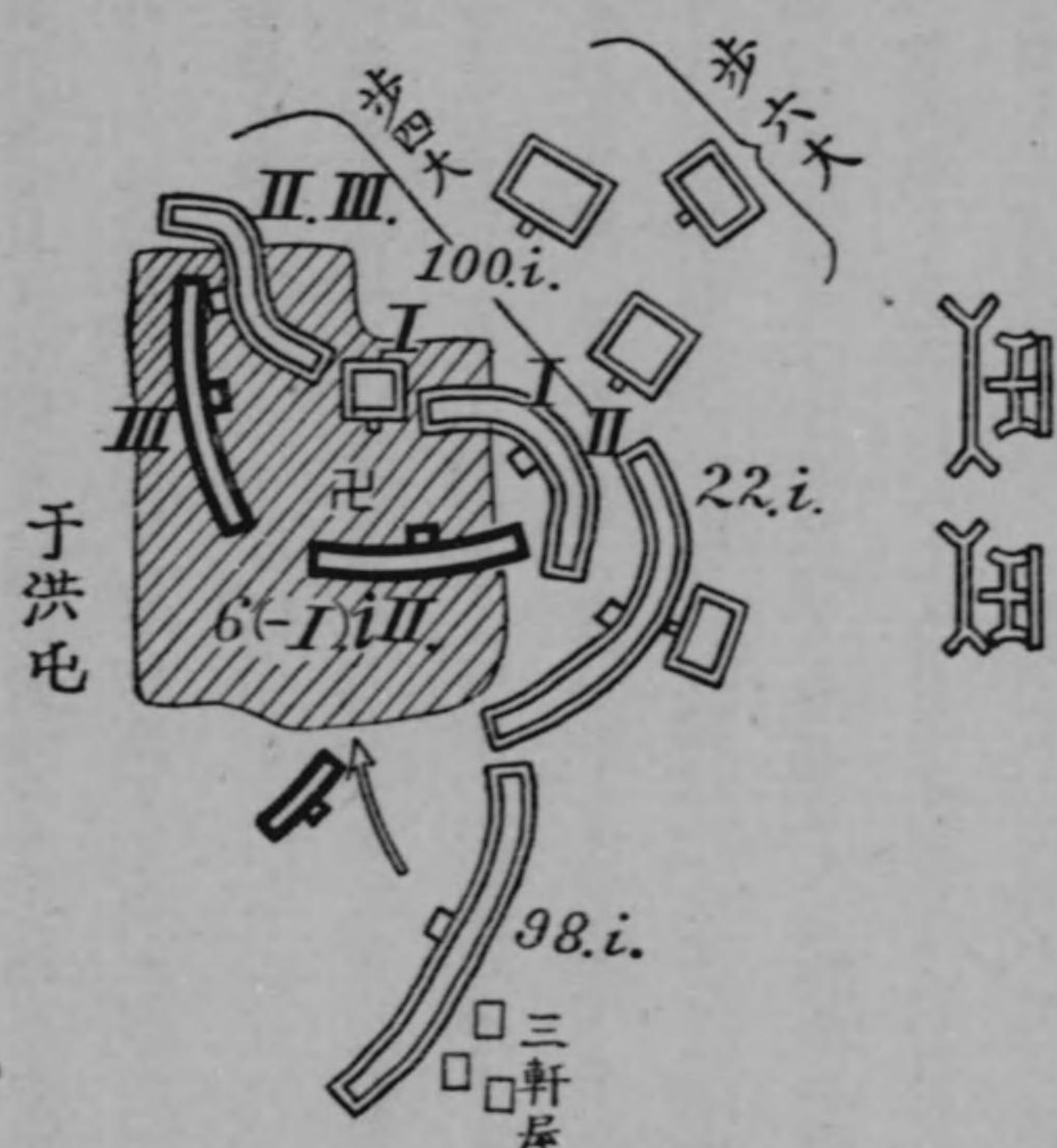
7、師團長の處置

十四時頃左翼隊の情況を知り師團豫備たる歩十八聯隊(第二大隊欠)を急行増援せしめ次で十五時頃野砲兵第十三聯隊の來援するや直ちに急進せしめ其の内第二大隊を李官堡附近に陣地占領直ちに射撃を開始せしめ左翼隊の急を救ひ更に増加せられたる後備歩兵五十一の一大隊と歩三十四聯隊の二中隊を急遽李官堡に出し救援せしむ。

8、戦況益々悲惨なり

干洪屯の村落内戦況

三月七日正午—夕刻



今や干洪屯は歩六聯隊〇千の兵員中僅かに生存するもの三百有餘而も三面の包圍を受け此の彈丸黒子大の干洪屯の一角を確保し敵の大軍を此の一點に支持し逐次に増加せし我が救援隊も戰況挽回の力なく聯、大、中隊長悉く枕を併べて殞れしも頑として退かず我が第三軍の繞回運動の樞軸となりて毅然として戦線を死守し日没夕闇迫り鬼哭愁々たる戰場に近く敵と相對して夜を徹

する命を受く。

夜半〇時に至り師團は軍命に依り一時歩兵の攻撃企圖を中止するに決し干洪屯の部隊は战友の傷きたるを勞りつゝも最も秘密迅速に李官堡に後退せしむ。

本日午後より夜に至る間の凄慘悲愴なる健闘苦戦は吾人の想像外にして本戦闘に參與せし岡本少將の懷舊録より採りし所なり。

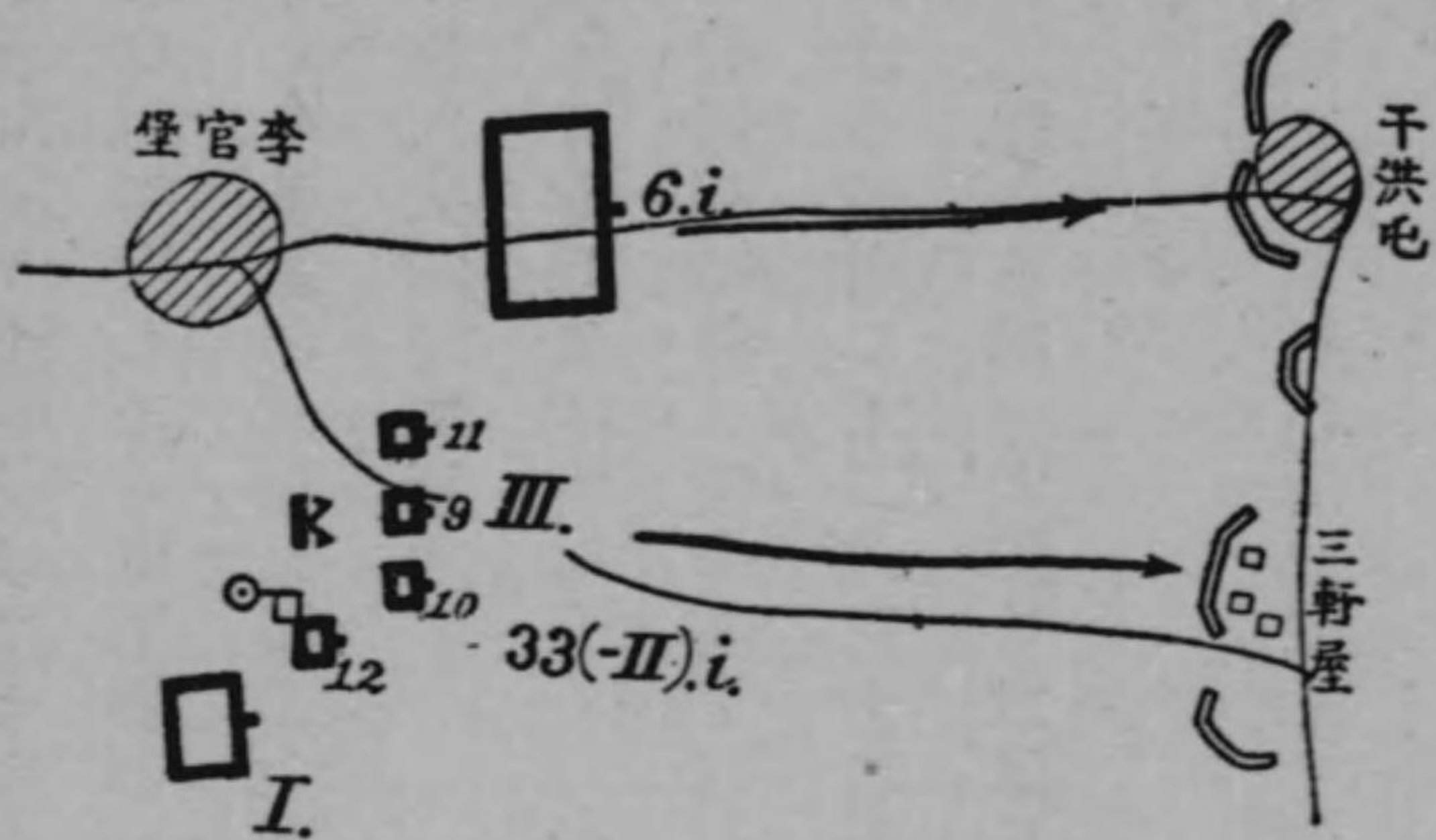
二、歩兵三十三聯隊(吉岡部隊)の苦戦

1、三月七日二時聯隊は李官堡東端に集合(第二大隊欠)概ね上記隊形を以て四時三軒屋に向ひ前進を始む。

敵陣地迄約二キロ米暗黒の平野は一物なく地表悉く凍りて所々に粉雪の堆るのみ零下十度の寒冷に靜肅行進を續く。

敵前約四百米附近に至り敵監視兵の射撃を受けしも一意前進を繼續し更に約二百米に達せし頃俄然敵の急激なる射撃を受け銃火の閃き一連に暗を破り彈丸雨飛するも損害少し。

2、此の時突如強大なる敵は暗黒中を我が右側に向ひ逆襲し來る。



聯隊は一時停止して豫備隊を三軒屋方向に轉ぜしめんとする刹那敵の集團は俄然我が正面及右側に向ひ逆襲し來る豫備隊の第一中隊は奮然此の敵に白兵を以て突進し格闘の後敵を堡壘内に撃退せし多數の死傷を出し大隊長田崎少佐も戦死す。

3、第三大隊の強襲

聯隊は右側に逆襲を受くるや直ちに之に對處し第一線たる第三大隊をして三軒屋に向ひ敵情不明の儘強襲に移る喊聲高く闇を破り敵陣に突入す吉岡聯隊長も殆んど同時に突入し一撃の下に敵指揮官を斬殺して二、三十名を投降せしむ。

第二線たる第一大隊も大隊長代理の指揮にて第三大隊の右側に出で三軒屋の西南側を目標に猛進して突入す。

時に天漸く紅色を呈せしも霧愈々深く未だ人顔を判別し得ず唯劍戟の音と氣聲の相搏つを聽くのみ。

4、敵の猛射と逆襲

各隊が三軒屋を占領し東端に進出せし頃天漸く明け展望稍々開けて敵狀を見れば干洪屯の東方約千三百米に陣地を布ける優勢なる敵砲兵は俄かに我に向ひ射撃を開始すると同時敗走中の敵も再び踏み止まりて我に射撃す。

聯隊は據るべき地物なく唯姿勢を低くして敵砲弾に暴露するのみ之が爲死傷續出す。

5、左翼隊長は此の情況を知り同聯隊の第二大隊を右翼に増加せしむ當時我が右側は優勢なる敵に脅威を受け其の危険を感じし時なれば此の大隊をして右側前の敵の角面堡に向ひ攻撃せしむ。

増加大隊は半大隊を角面堡に半大隊を大隊長率ひて三軒屋に到着せしむ此の頃敵砲兵は射撃を集中して幹部續々殞れ遂に一時防止するに決し工事をなさんとすれば地は凍りて掘れず僅かに敵の棄せし土囊を利用して掩護に努めしが昨日來軍の攻撃は第五、第八師團何れも豫期の成果を得ず只だ僅かに此の南部第五旅團のみが僅かに一小堡壘と雖も奪取せしは其の勇敢なる攻撃成果たると共に敵は之が奪回に努め全力を集中して左翼隊の正面に歩、砲火を浴びせて逆襲し來り従つて旅團の形勢は漸次不利に傾き戰況愈々悲惨を極む。

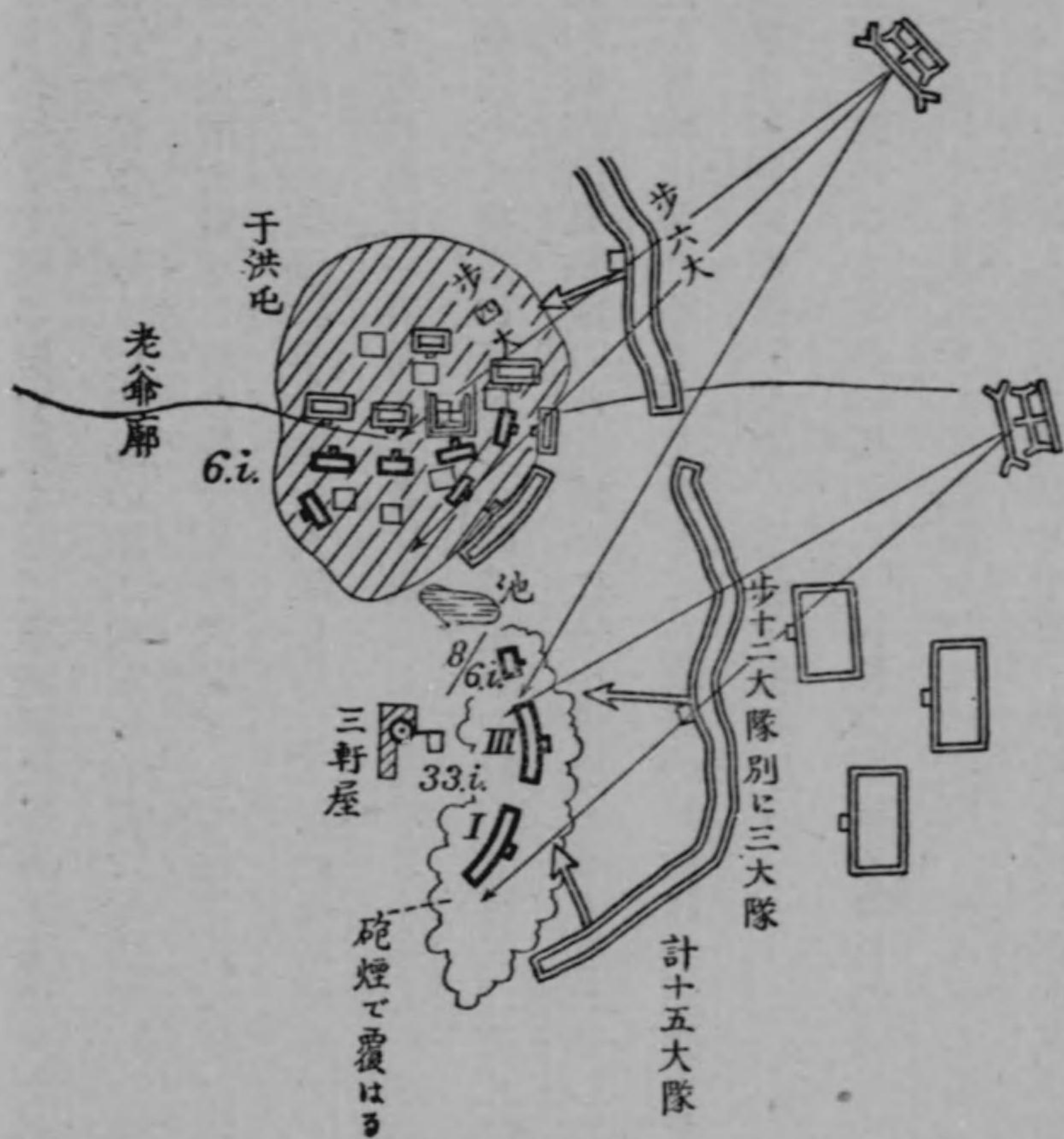
武内、吉岡兩聯隊長は我が砲兵の援助の下に極力前線の維持に努め十一時過ぎ濃霧全く散じ遠望すれば遠く奉天方向より約五千米の正面を以て敵逆襲し來り其の第一線は數線よりなる後續部隊を伴ひ其の砲兵益々増加し猛射を浴びせ千波、萬波或は群がり或は散じ一進一止前進し來り今や三軒屋、干洪屯の我が兩聯隊は怒濤の海汀に押揚ぐるが如き戰況となり之を邀へて我が軍は殊守奮戦死傷刻々に増し彈藥將に缺乏を訴へしも將卒最後の白兵を擁してひたすら戦機の推移を待つ外なき情況となる。

6、三軒屋の吉岡聯隊全滅す

十三時頃我が將兵は食なく彈丸なく然も水なく眞に饑渴と列寒に加へ敵の銃砲彈は集中せられて黑白の濛煙は三軒屋の空を掩ひて煙幕を被りたるが如く然も見渡す限りの敵は黒潮の如く我が前

干 洪 屯、三 軒 屋 附 近 の 戦 闘

三 月 七 日 十 二 時 三 十 分



面に迫り將士の疲勞困憊殆んど極端に達し獨り身中に燃ゆる奉公の至誠獻身的精神のみ熾烈にして唯之によりて死直前の苦難を忍び得るのみ。

十三時三十分頃俄かに敵の砲撃は中止され爆煙稍收まり見れば全正面五千に亘る敵は數線に散開して其の最前線は我が前方四、五百米に近接し三軒屋の我が部隊は全く包圍せらる。

吉岡聯隊長最後の決意を示し軍旗は干洪屯に移して再起を圖り苟も足腰の動き得るものは全部射線に配し數十倍の敵に對し決死の勇士激戰奮闘せしも遂に其の一角は突破せられ敵兵進入す聯隊長以下刀を揮ひて白兵戰となり忽ち修羅の巷と化し聯隊長遂に叱咤奮戰中負傷せしも屈せず一歩も退かず指揮中再び咽喉を貫通せられて壯烈なる偉績を残して斃れ部下の將兵殆んど枕を併べて戰死し殘兵僅かに二百六十餘人十四時三十分頃には今曉來終日奮戰せし吉岡聯隊は遂に全滅して三軒屋は再び敵に委するに至る。

三、砲兵隊の戦闘

朝來濃霧のため正確の射撃をなし得ざりしも敵の砲火により方向を定め音響測量に依り距離を概定し八時頃より熊家岡子南方及牛心屯南方孤立林にある敵砲兵併に干洪屯北部に向ひ射撃を開始せしも觀測十分ならず效力を發揚し得ざる情況なりしも主として6.iの戦況に應じ協力し且同村東北方面より前進する敵歩兵を射撃す。

軍司令官の決心

四、軍司令官は第五、第八師團の攻撃成功せず第三師團の攻撃を大に進捗せしめんと努めしも優勢なる敵の大逆襲を受け歩六聯隊の残存部隊が僅かに干洪屯の南半部を死守するに過ぎざるを知り軍を郎家堡、吾良堡、寧官屯、李官堡の線に亘り堅固に陣地を占領し隊勢を整へ然る後攻勢を採るに決し其の夜第三師團の第一線部隊たる歩六を隱密秘匿迅速に同地を撤退せしめたり。

第三師團は八、九兩日敵と近く相對戦し十日敵の退却に尾撃して奉天北方地區に進出し奉天會戦の終局を告げたり。

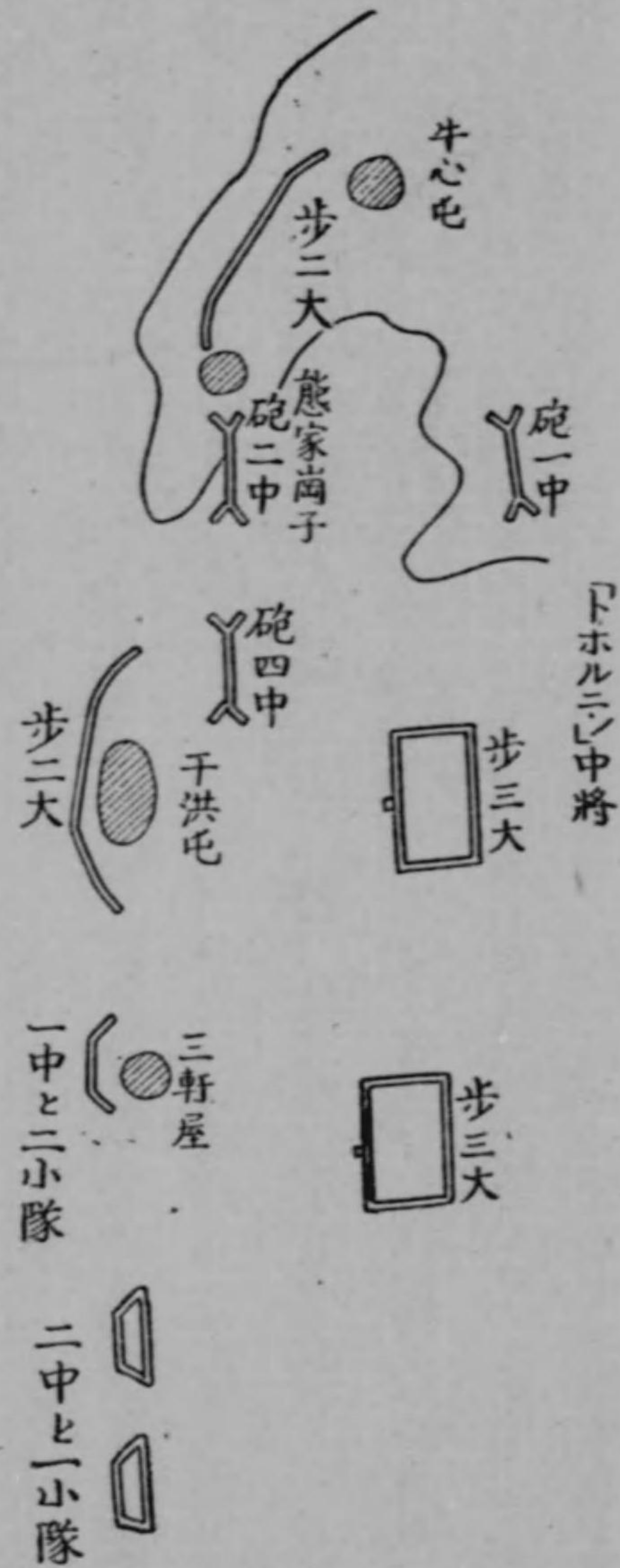
五、我が軍の損害

歩兵第五旅團の損害四千以上歩六は集成四中隊歩三三は集成二中隊とし殆んど全滅に近く工兵中隊の如きも僅かに三十餘名となれり。

其の四 露軍戦闘の概要

一、露軍の配備

露第二軍の第二十五師團は「トボルニン」中將の指揮を以て三月七日干洪屯附近を固守するに決し六日夜之に關する命令を下す其の配備左の如し。



二、露軍の防戦(三月七日)

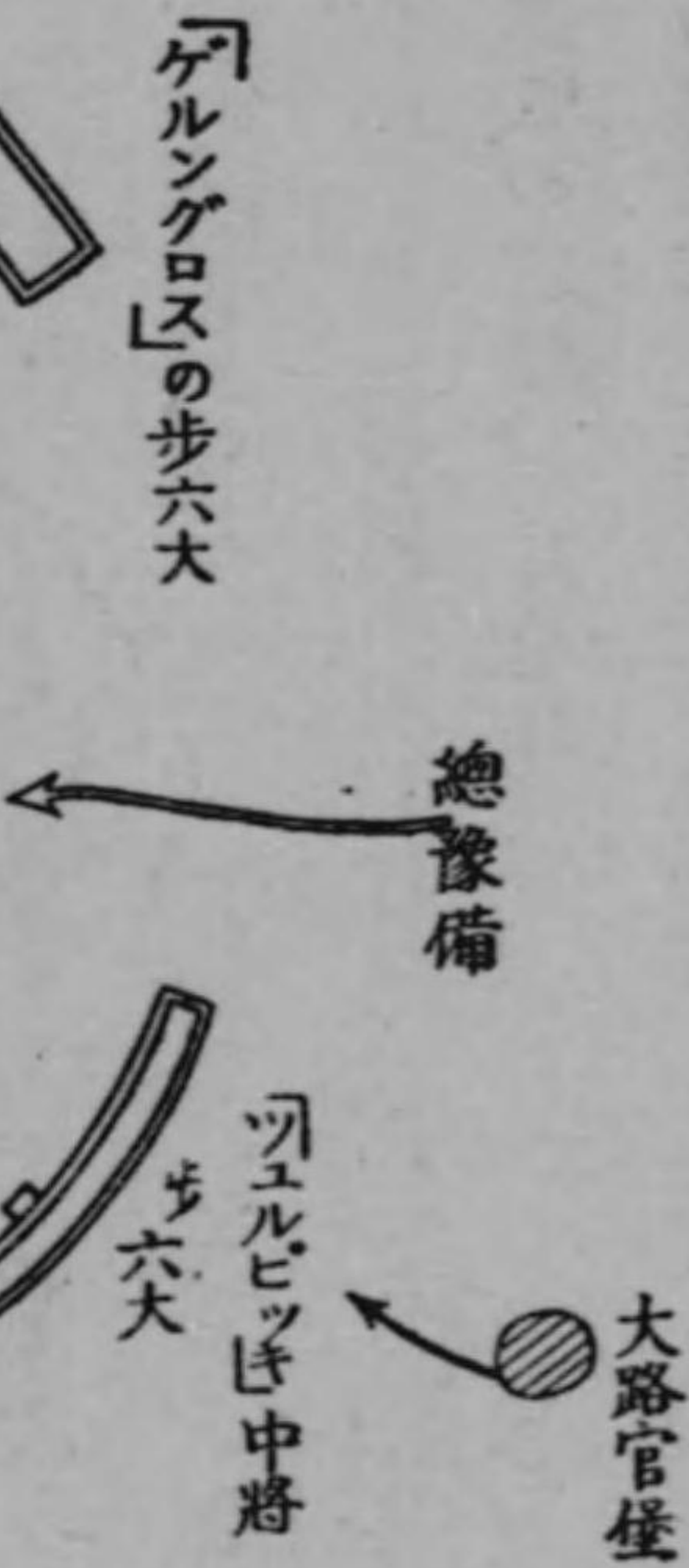
七日拂曉其の所命の配備に就く爲若干部隊の移動中潜伏斥候は優勢なる日本軍の來襲を報じ次で干洪屯南部及三軒屋に火戦起り豫備たる第九十八聯隊の二大隊は銃剣を揮つて突進し茲に猛烈なる白兵戦を惹起せり。

然るに同聯隊の將校全部と多數の下士官兵を失ひ其の三軒屋守備隊は殆んど全滅し干洪屯を守備せる歩兵は數回逆襲せしも大部は同村北部に一部は南方堡壘に退避せり。

「トボルニン」中將は日本軍の攻撃猛烈にして三軒屋突破せられ干洪屯又危急なるを知り牛心屯にある第九師團長に増援を請ひ且軍司令官にも報告して増援を請求す。

三、干洪屯南方地區に在る「ツェルビツキー」中將は第二軍司令官「カウルバルス」大將の命に依り八時頃歩四大隊、次で歩六大隊及砲兵二中隊を干洪屯に派遣せり。而して同中將は其の左翼にある「ゲルシ、エリマン」中將に増援を求めて歩四大隊砲兵三中隊を得たり。

十四時頃第二軍司令官は干洪屯の戦況良好に向へるを認め參謀を「ツェルビツキー」中將の下に派し朝來同中將より具申せし如く今や攻撃前進を起すに適當なる旨を傳達せしに同中將は之を不可能なりと考へあり。



是より先總司令官「クロバトキン」大將は干洪屯危急の報を得第二軍司令官に命ずるに自ら同村に赴き之を恢復すべきことを以てし且總豫備隊の歩三大隊砲兵一中隊を同方面に差遣せり。

四、第二軍司令官の處置

第二軍司令官は先づ大路官堡にある歩兵一旅團砲兵三中隊を派遣し尋で「トボルニン」中將の報告に依りて第二十五師團全く退却に就きたるを

聞き更に「ゲルングロス」「ツェルビツキー」「ゲルシ、エルマン」三中將に増援を派遣すべく命令して自ら干洪屯に急行せしに實況は「トボルニン」中將の報告の如く目下切迫せず第二十五師團をして十一時—十三時の情況左記要圖の如し。

大路官堡より前進せし部隊は十四時頃三軒屋を占領しある日本軍の前面約二、三百米に達し一部は突撃に移り遂に日本軍を驅逐して三軒屋を占領せしが干洪屯より側射せられ同地に停止せり。此の間東方及東北方より前進せし部隊は遂に干洪屯の大部を恢復したりしも東南一部は家屋堅牢にして抜く能はず夜に入り日本軍撤退せり。

其の五 第三師團の干洪屯附近攻撃の價值

一、第三師團の此の攻撃は第三軍たる乃木軍の繞回運動を容易ならしむ。

本日の攻撃は其の成功半にして而も斯の如き壯烈なる攻撃も遂に一時撤退するを得ざるに至りしは遺憾なるかの感を與へしが決して然らず此の果敢なる攻撃は實に約四倍強の露軍を牽制し直接には左にある第九師團造化屯の攻撃奏效の基を開き間接には第三軍全般の行動を容易ならしめたり。されば大山總司令官は第三師團長に感狀を授け吉岡聯隊長は全軍に布告して其の功績の偉大なるを認めたり。

其の六 本戰鬪より得たる教訓と原則の對照

一、師團長の威力を以てする搜索に就て

作令(一の八二、一〇九、一一〇、同二の四三)の原則に

「或は所要の兵力を以て敵を攻撃する等の處置を講じ……」状況に依り歩兵部隊若しくは諸兵連合の支隊を派遣し搜索に任せしむることあり此の部隊は敵の監視部隊又は前進部隊等を驅逐して其の背後の状況を搜索する爲屢、戰鬪を行ふを要することあり」

「敵に近接せる場合に於て各種の手段を以てするも尙ほ所望の敵情を明かにするを得ざるときは搜索の爲攻撃を行ふを要すること少からず……高級指揮官の統一指揮の下に之を行ひ……」搜索は……特に威力を用ふるを要すること少からず……」

本戰鬪に於て師團長の採りたる搜索手段は威力を以て殊に歩砲兵の相當強大なる部隊を配置し不慮の本戰を惹起し得るも師團としては直ちに敵情の判明と共に攻撃に著手し得る如く配置し然かも夜遅く李官堡附近に到達し直ちに軍命に依り堅固に陣地を占領しある敵を攻撃せんとするには當然攻撃計畫立案上よりするも本日(の)如く威力を以て敵を強制的に現出せしむるを最も適當なる方法にして且速かに搜索し得る手段なり。

但し我が砲兵の協力が其の陣地の關係上十分に協同し得ざりしは遺憾なるも實際問題としては概ね豫期の目的を達成せり。

二、兩翼隊長の採りたる搜索處置

イ、此の種搜索目的の重點を選定すること。

兩翼隊長が搜索せんとする目的は成るべく敵の薄弱部を看破すると共に敵陣地の強度、施設殊に障碍物の状況、歩、砲の配置、側防機能の位置を偵知して我が攻撃部署を決定するにありされば此の見地に基き必要なる方面に搜索重點を使用するの著意を要す。

ロ、搜索隊の兵力、編組(作令一〇七)

敵をして攻撃を受くる感想を與へ且状況に依りては攻撃實行部隊たり得る實力を具備し適時敵と離脱し得せしむるを要す。

近代戰に在りては状況に依り異なるも通常輕快なる戰車(裝甲車)を主體とし所要に應じ歩、砲、工、通信、修理機關等を屬す。

本搜索の實施は兩翼隊共歩兵一大隊に砲兵を協力せしめ歩兵は廣正面に散開して前進し敵陣地前約千米附近に達し或る程度敵に眞の攻撃にあらずやの感を抱かしめ敵をして其の陣地に就かしめ我を射撃して其の第一線の配置を現はし搜索をして概ね其の目的を達成せしめたり天候、陣地の

關係上左翼隊方面に我が砲兵の協力十分ならざりしは搜索隊として動作上稍困難なりしならん。
 ハ、砲兵隊の用途

搜索目的を十分達成せんとせば歩、砲の協同を發揮するは勿論殊に威力に依り戦闘を行ふ場合に於ては十分なる協力を必要とし砲兵自身も其の情報機關を遺憾なく發揚せしめ其の蒐集に努めざるべからず、殊に搜索隊の戰場離脱の場合には砲兵の掩護射撃を要する場合多きを通常とす。

本搜索に於ては歩、砲各、其の任務を受け配屬等の關係なきを以て歩兵指揮官としても直接協同の實を得ざりしは已むを得ざるも砲兵としては如何にせん濃霧の爲觀測を妨げられ十分威力を發揮し得ざりしは遺憾なり。

ニ、主力の待機姿勢に就て(作令二一〇)

主力は機を失せず其の結果を利用し得るの準備に在ること肝要である本日は單に搜索のみにて攻撃は明拂曉と決定しあるも情況に依りては意外に敵の弱體を發見し豫想外に戰機を巧に捉へ得ることなしとせず所謂神速に好機に乘じ戰果を擴大し得ることあるを以て主力の待機姿勢は單に集合せしむるのみにては十分と謂ひ難く寧ろ積極的に攻撃態勢の準備に置き命令一下直ちに攻撃前進に移り得る如くなしあるを要す。

ホ、高級指揮官の特に爲すべき手段(作令四二)

1、候察方法

各隊長を集め展望を利用し深甚の注意を以て搜索戰の結末を視察せしめ敵の兵力、配置時として企圖の暴露を觀破するを要す。

2、搜索隊との連絡

通信機關、記號等凡ゆる方法を設く。

三、左翼隊長の攻撃部署に就て

師團當面の敵は約一師團にして而も陣地を構成し其の兩翼には角面堡を設け障礙物を設置しあり。之に對し師團の攻撃重點は干洪屯に指向せられたり。

左翼隊長南部少將は兩聯隊(各一大隊欠)を併立して三軒屋、干洪屯を夫々攻撃目標として強襲せしめたるが時機は拂曉而も殆んど夜闇を利用し強襲的なるを以て或は其の攻撃部署として至當ならんも稍、重點に欠くる感なしとせず、果せる哉兩聯隊共一旦其の攻撃目標を奪取せしも如何にせん優勢且頑強なる敵の抵抗に我が兵力減耗し衆寡敵せず常に兵力の寡少に苦しむたるを知る左翼隊長としては敵兵力判斷上寧ろ干洪屯に向ふ歩兵第六聯隊を完全なる聯隊とし尙ほ東北方に出したる牽制部隊も左翼隊の豫備隊より出し勉めて重點を干洪屯に初めより保持し一舉に全村落を奪取せしならば或は爾後の戦闘本日より比較的容易に對戦し得たるにあらざるやの感あり。

四、敵前至近の距離に於ける方向變換の危険

歩三三の第二線部隊が大隊の方向を左方に轉ぜんとするや敵は突如前面併に右側面より逆襲し來り爲に第一中隊は直ちに猛烈なる射撃と手榴彈を以て之を邀へ遂に彼我白兵戰となり格闘の後之を撃退せりと雖之が爲大隊長戰死し將兵多數の死傷者を生じ部隊は一時非常に混淆せり。

又歩六の第二大隊が進路を稍、右に誤り急角度の方向轉換して干洪屯の東南部に突入する際其の指揮良しきを得たるため大隊は概ね豫期の如く指導し得られしも後方に續行せし聯隊豫備は遂に連絡を失し豫期せざる三軒屋の敵に突入するが如し。

要するに敵前至近の距離に在りて方向の轉換をなすは周到なる注意と深甚なる考慮を以て萬遺漏なきを期するにあらざれば危険なることあり。

五、支那家屋の防禦力について(攻防に關する著意)

支那家屋にして四周土壁をめぐらし然も煉瓦壁等にて堅固になしあるものは外部に對し立派なる掩體となり爆破するか挺及大槌にて破壊するにあらざれば容易に進入し得ざるを通常とす。

されば一度村落内に突入し敵が家屋防禦を爲すを豫期せば之に對し所要の材料と攻撃部署をなさざるべからず。

我が軍が過去に於て屢、遭遇し現に本戦闘に於ても體驗せし如く戦闘指導上特殊の著意を要す例へ

ば

イ、輕機を主體とする白兵を附したる戦闘群の編成。

ロ、土囊、拳銃、手榴彈、擲彈筒、十字鋏、挺、大槌、綱、發煙彈、瓦斯彈、防楯成し得ればゴム底足袋等の準備。

ハ、各戦闘群毎に彈藥、糧秣、水等の準備をなし各獨立性を大ならしむ。

ニ、電話は故障多し寧ろ旗、信號を必ず併用すること。

ホ、重要な連絡は必ず三―四名を出す。

ヘ、服裝は輕裝十字鋏は腰に圓匙は腹部に差しゴム足袋又は支那靴を使とす。

攻撃要領

イ、歩兵砲、自動重火器、要すれば野、山砲を第一線に配屬す。

ロ、戰車の進出と敵戰車に對する對戰車砲の準備。

ハ、戦闘群の村落内進出には道路の兩側に添ひ各兵は直ちに射撃し得る準備にあること。

ニ、家屋内より不意に射撃を受けたる場合は必ず附近の圍壁又は家屋を利用して應射し妄りに伏臥せざることを。

ホ、家屋内に突入する方法。

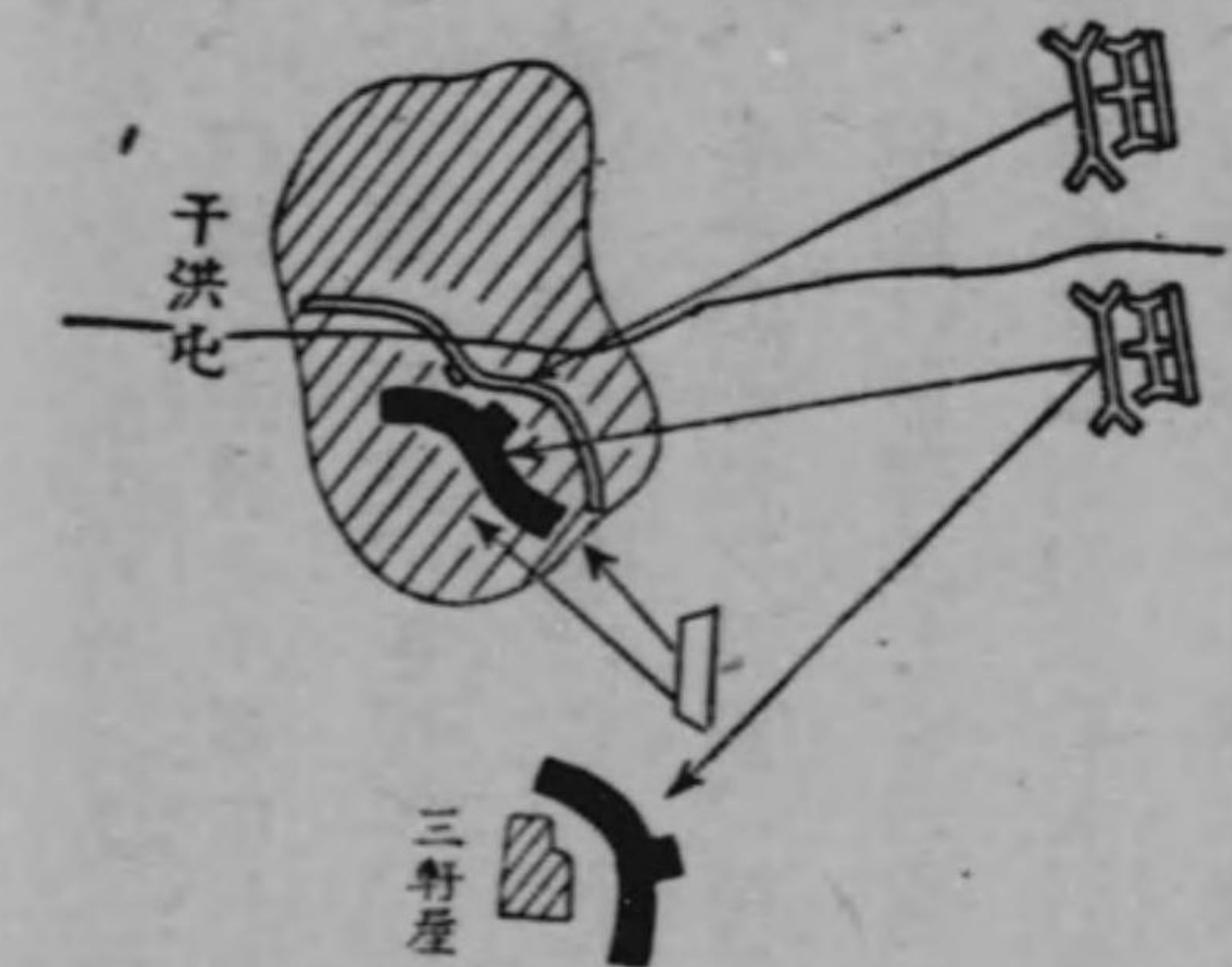
土囊、防楯、破壊器具を携行し手榴彈を投げ其の爆裂の瞬時を利用して突入す手榴彈なき時は小銃、輕機にて交叉射撃を行ひ門内を制壓し爾後引き續き敵を威嚇しつゝ突入す。家屋の周圍に配兵して敵の脱走刺殺に任せしむ。

へ、屋内掃掃は階下より逐次階上に及ぶ。

各室に侵入するには扉を開くと同時に身を隠し身構へしつゝ注意して後に突入す。

ト、屋上に重、輕機を据ゑんとする時は成るべく高き所を可とす銃脚位置は土囊を利用す。

六、歩、砲の協同に就て(作令一二二—一二三)



歩六聯隊が干洪屯西南部を占領し得たるも敵は頑強に抵抗し全村落を奪取するを得ざりしは種々の事情もあるならんが要は干洪屯の東側にある砲兵二中隊は我が砲兵から全く射撃し得ざる遮蔽度内にありて然かも此の中隊の敵砲十六門は思ふ存分歩六聯隊の將兵に對し斜射と云ふよりは寧ろ側射を浴びせかると共に右翼角面堡に對する我が攻撃容易に進捗せざる爲に是又側射、背側を受くる態勢となり十四時頃となるや敵は果して大舉して逆襲に轉じたのである。

砲兵情報機關の進歩したる現代に於ては斯の如き場合の敵砲兵の制

壓は飛行機、氣球其の他凡ゆる方法を盡くして其の撲滅に努むべきも如何にせん準備十分ならざりしと今日の如く科學兵器の無き時とて已む得ざりしならん。

七、獨斷について

「凡そ兵戰の事たる獨斷を要するもの頗る多し而して獨斷は上官の意圖を明察し大局を判斷して状況の變化に應じ自ら其の目的を達し得べき最良の方法を選び」(作令綱領五)

戰場彈雨の裡に立つて毅然として能く戰鬥に堪へ得る所以のものは命令や號令や服従だ軍紀だと云ふ拘束規定に左右された結果のみでなく自重獨立只管情況の變化に應じて上長の意圖に遵ひ最善の努力を盡くさんとする責任觀念即ち平素の訓練より生ずる知能と崇高なる殉國の大節より發する各人の獨斷專行に外ならぬのである。

八、靜肅近迫中の部隊の行進歩度の保持に就て

歩六の第二大隊の干洪屯の敵陣地に肅々として近迫中敵の急射撃を受くるや斥候先づ歩度を早め續いて第一線小隊又之に慣つて歩度を速め約百米を距てて續行しある第二線小隊との距離自然に延伸し従つて大、中隊、聯隊の豫備は相當縱長大となり爾後の行動上支障を來す虞あるに至り大隊は一時敵前約二百米に達せし時停止して整理せざるべからざるに至る。

此の時敵火線の正面も大に増大し敵火は著しく猛烈となれり幸ひにも天尙ほ黎明に近き頃とて損害

は多からざりしも一舉に突入せんとする夜襲的強襲としては一の過失なり。畢竟最前線の中、小隊長能く之の呼吸を知り斷乎として一小部隊の行動に誘致せられざる如く注意するを要す。

九、命令徹底せず各自射撃の開始

左側に位置する牽制中隊の射撃を開始するや一時停止せし部隊は敵から猛射せられ伏臥しあるのと左側に銃撃を聽きし爲か自然に隊長の意圖に反して射撃を開始し爲に敵は我が第一線を火光に依つて確認し射撃は愈々正確となり死傷續出するに至れり。

要するに夜は未だ明けず敵は眼前至近の距離にあり加ふるに熾烈なる銃火に浴しある際左方面の射撃開始は自然心理的に射撃を誘發せしもの如く訓練精到なる軍隊ならば斷じて斯の如き失態なきも如何にせん當時の日本軍は僅か三箇月の短期補充兵殆んど中隊の大部を占め精練なる下士官兵は殆んど減耗して其の十分の一にも達せざりし結果ならんか。

一〇、隱密秘行すべき夜襲的攻撃に一種の掛聲を發して亂射せらる。

敵の猛火を冒して前進中何人か元氣付けに發唱したるヨイサ／＼の掛聲は一度起るや其の音調低しと雖も忽ち全線に傳播して大隊長を大に焦慮せしめたりと云ふ之れも新募兵の參加したる一種の精神作用の反映ならん大に幹部として猛省を要する所以なり。

第三章 太白山、老左山の陣地攻撃

(明治三七、七、二六—二七日旅順要塞前進陣地)

其の一 第十一師團戰鬪前の情況

一、旅順前進陣地攻略の準備

三七、七、一五日滿洲軍總司令官大連に上陸し攻城諸部隊併に第三軍増加兵團たる第九師團、後備歩兵第一旅團等も七日中には上陸を畢る可き豫定にして第三軍參謀長伊地知少將は兒玉總參謀長と大連に會し第三軍は二十五日より敵の前進陣地を攻略し三十日迄に攻圍陣地を占領すべきこととなれり。

當時敵の前進陣地併に我が軍の配置と其の攻撃計畫の概要左記要圖の如し。

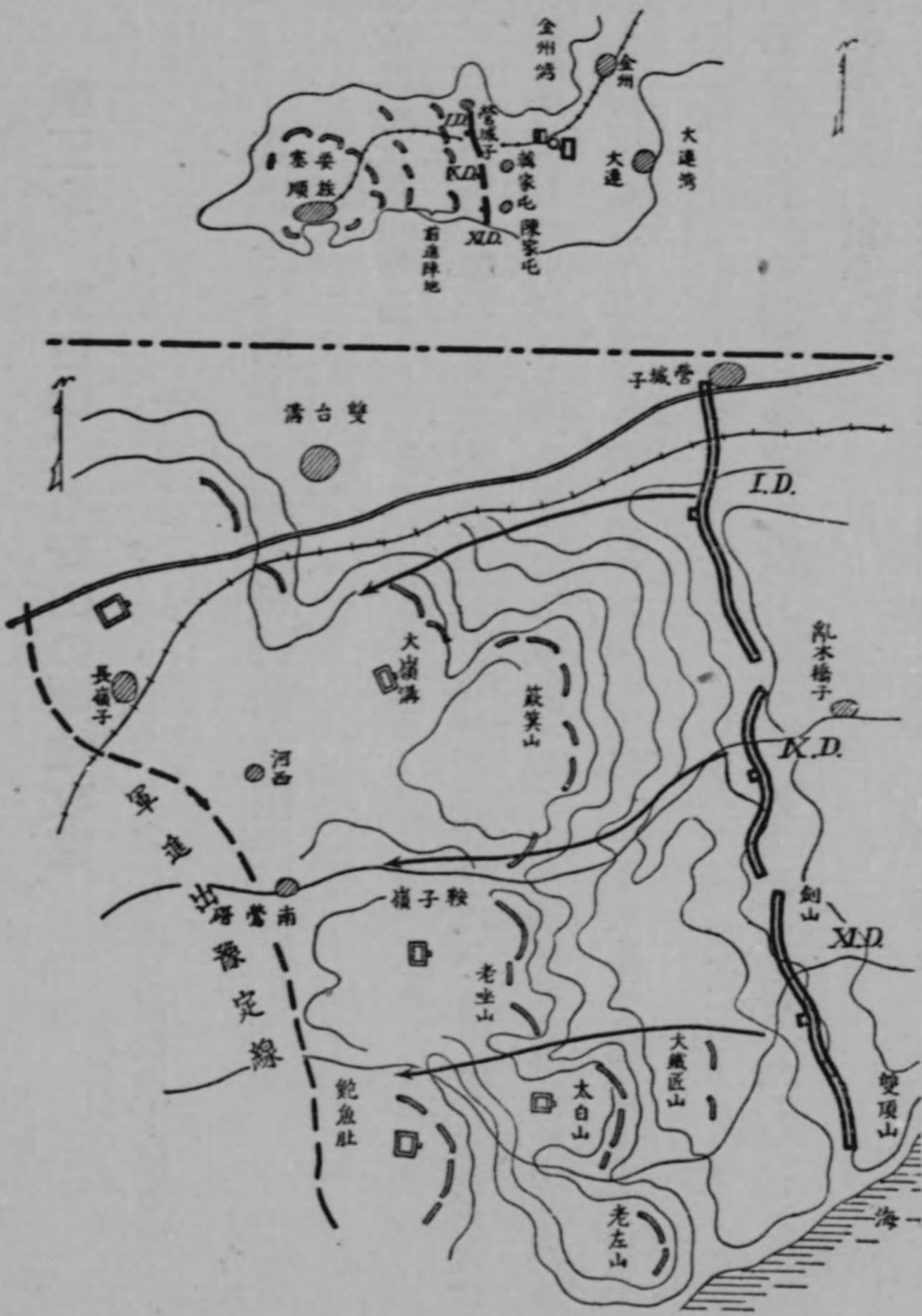
前進陣地攻撃計畫の概要

- 一、時期 第九師團戰鬪部隊約半部と砲兵第二旅團の一部上陸後にして七月二十三、四日頃の豫定
- 二、部署 第一師團(砲兵旅團の一部)は右翼雙臺溝方面

第九師團の半部(後備歩第一旅團、重砲、臼砲)中央鞍子嶺方面

第十一師團(野重砲一部陸戰重砲)左翼太白山方面
軍總豫備後備步第四旅團(一聯隊欠)は第一師團の左翼後

圖係關般一地陣進前塞要順旅



圖要置配領占地陣進前敵

三、實施

第一日午後第九、第十一師團は亂木橋子の西方及大鐵匠山の高地線に前進して同地附近を確實に占領し此の掩護に依り各方面の諸重砲を前方の陣地に就かしむ。

第二日敵砲兵を射撃して沈黙せしめ後總攻撃前進に移る。

第一師團は適時前進して營城子附近に至る。

敵陣地攻略後第一師團は長嶺子西方高地より河西北方高地に互る線に進出

第九師團は第一師團の左翼より南鶯哥石附近に互る線に

第十一師團は第九師團の左翼より鮑魚肚附近に互る線に何れも進出

第三日以後の運動は敵情に因り更に企圖す(以上要圖參照)。

四前進陣地に在る敵兵の推定總兵力

歩兵十八大隊、徒歩獵兵二十一隊、乘馬獵兵四隊、騎兵一中隊

野砲七十二門、海軍上陸砲四門、十五珊臼砲四門、M.G. 三十

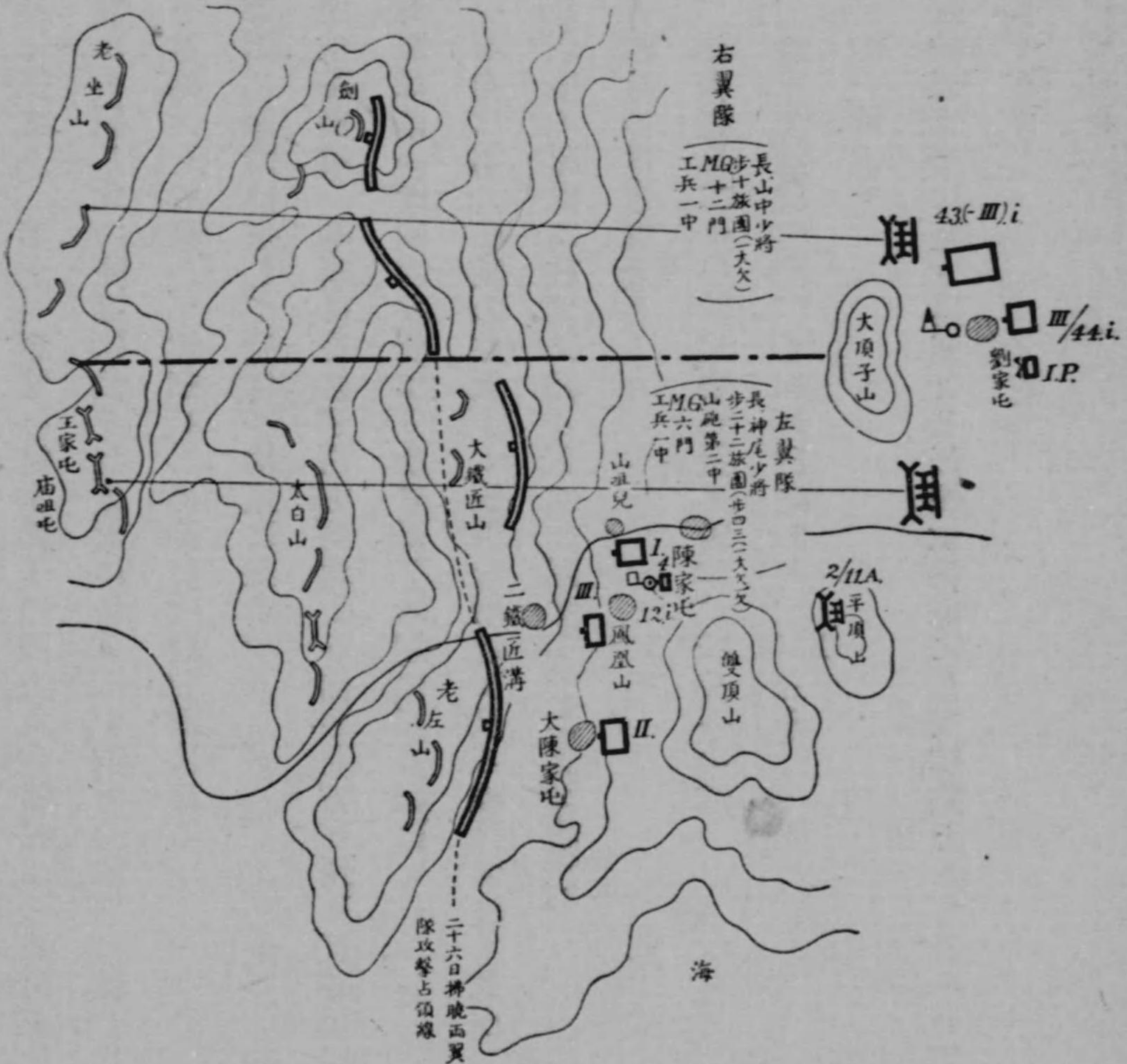
總兵力下士、兵約一萬六千

防禦工事は延長約五千米に互り連互せる強硬散兵壕にし支撐點として若干の閉鎖堡併に各陣地には概して障礙物を有す。

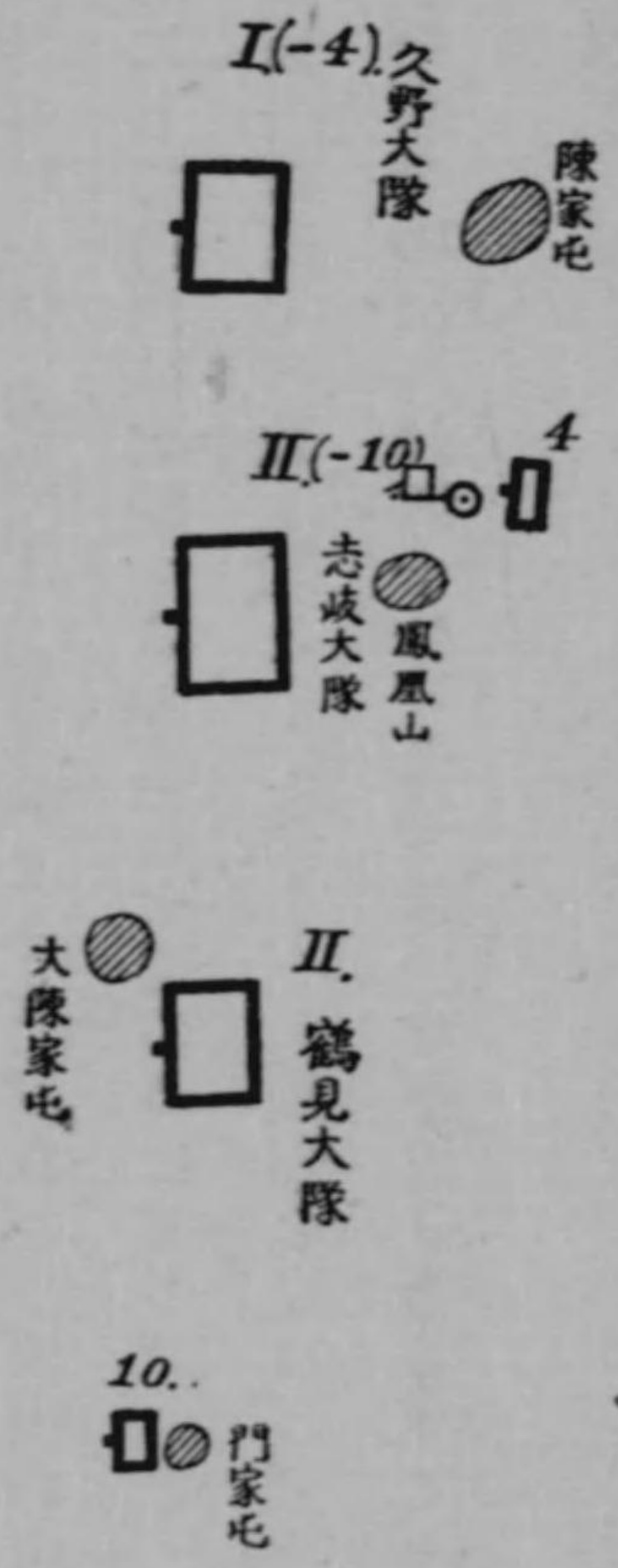
二、第十一師團の攻撃部署

第十師團左翼隊攻撃計畫部署要圖

七月二十三日



二十五日の夜右翼隊は歩四四聯隊をして劍山を右翼とし左歩二十二聯隊に連繫し大鐵匠山に互る線を占領し左翼隊の攻撃を援助すべく區署す。
 左翼隊は明拂曉大鐵匠山より老左山附近に互る敵を攻撃する爲歩兵第十二聯隊を三時三十分迄に陳家屯附近に集合せしめ天明と共に平頂山上の我が砲兵中隊の射撃と共に大鐵匠山、老左山の敵を攻撃する如く準備せしむ。
 同聯隊は勇躍夜暗を利用し三時三十分迄に左の如く集合す(要圖參照)。



其二 左翼隊(神尾旅團)の攻撃戰鬪

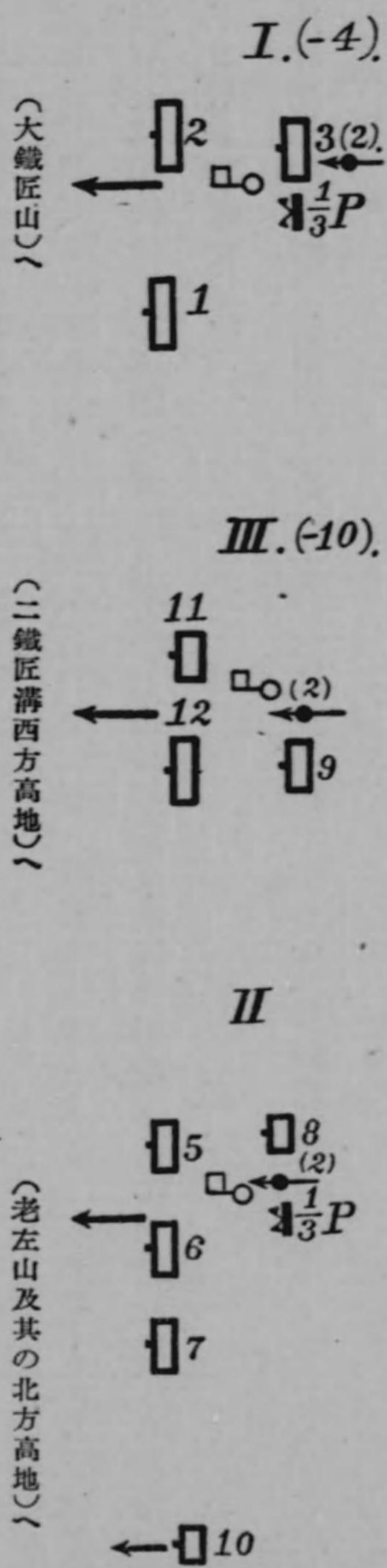
一、歩兵第十二聯隊の攻撃

第一日(大鐵匠山、老左山の攻撃)七月二十六日

是日拂曉より濃霧四邊を鎖し天明くるも尙ほ敵陣を見るを得ず唯處々に少數の銃聲を聞くのみ七時四十分頃霧漸く霽れ平頂山上の山砲中隊は六門の砲口を揃へて一齊に大鐵匠山及老左山附近の敵陣地に向ひ射撃を開始し我が野重砲及陸隊重砲又一齊に砲火を開始し山上濛々として白煙を以て覆ふ壯烈なる砲戦は開始せらる。

此の時敵砲兵の巨弾(多分十五榴彈砲ならん)は我が平頂山の山砲に向ひ猛射を集中し轟音地裂凄まじく忽ちにして山砲は沈黙するの已むを得ざるに至る。

然るに前面一帯高地の敵は闕として聲なく又隻影を現はさず乃ち新山聯隊長は直ちに部下各大隊に攻撃前進を命ず時に八時四十分、各大隊の攻撃前進態勢併に部署左の如し。



(大鐵匠山)

(二鐵匠溝西方高地)

(老左山及其の北方高地)

二、歩兵第一大隊の戦闘

大隊正面の敵は高地稜線上に點々と陣地を構築し簡易なる鹿柴障柵を設け陣地前に所々地雷の埋設しあるを知るも兵力は不明にして陣地縦深内も搜索し得ず従つて其の縦深、側防機能等は確かならず。

敵陣地前の地形

二條の稜線東方に向つて流れ其の間は深谷にして斜面の攀登又容易ならず。

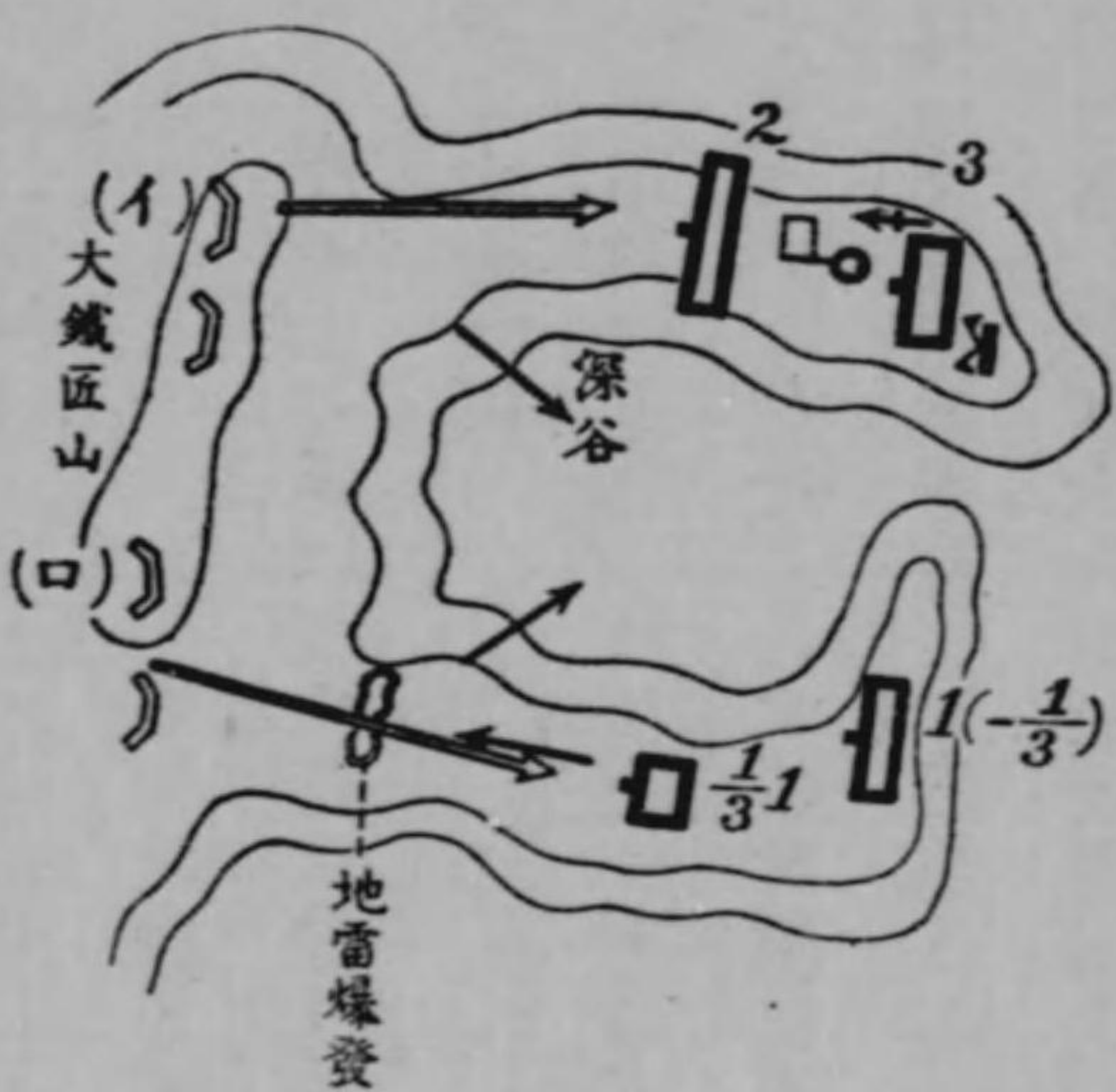
大隊は其の攻撃目標たる上記要圖の敵陣地に對し右稜線より大隊長の指揮する大隊主力を以て第二中隊を第一線とし(イ)の敵に向ひ攻撃せしめ第一中隊をして左稜線より(ロ)の敵を攻撃せしむ。

此の稜線は斜面急峻なる上に步道なく兩側斜面は峻嶮僅かに一列側面縦隊にて辛うじて行進し得るに過ぎず。

左第一中隊の戦闘

第一中隊は中隊主力を以て稜線の一部に在りて援護射撃に任じ第三小隊をして(ロ)の敵陣地に向ひ攻撃せしむ。

第三小隊長は小隊を一列縦隊とし距離を短縮して急斜板を昇り初むるや俄然敵は射撃を開始す我が



砲兵及中隊主力の掩護射撃の下に一意前進を激勵しつゝ殆んど匍匐前進の已むなきに至り敵陣地前約百米に至るや轟然として地雷は小隊の進路上に爆裂し土砂石礫天に飛散して凄烈なる光景を呈し小隊長以下思はず地上に伏臥せしも幸ひに負傷するもの一名に過ぎず直ちに立ちて敵陣地に先頭到達し將に突入せんとするや踵續し來れる兵僅かに六名なりしも斷乎之を指揮して突撃格闘し二名の負傷を生ぜしのみにて之を占領す小隊の殘餘は續いて來著し辛うじて當面の敵と相對峙す。

大隊主力の戰鬪

第一線中隊は進路の關係上一列縱隊にて前進中敵の猛射を受けしも屈せず前進を繼續せしが死傷者多く爲めに應射せんとする射撃位置なく唯だ一本の細徑道のみにて如何ともするを得ざりしが大隊長は一意前進を督勵して近迫し遂に敵陣に突入し之を占領するや第三中隊、M.G.も到達し直ちに第一線に増加し前面太白山上及退却中の敵に對し急射撃を行ひ大鐵匠山一帶の敵陣地を奪取せり。

三、第三大隊の戰鬪

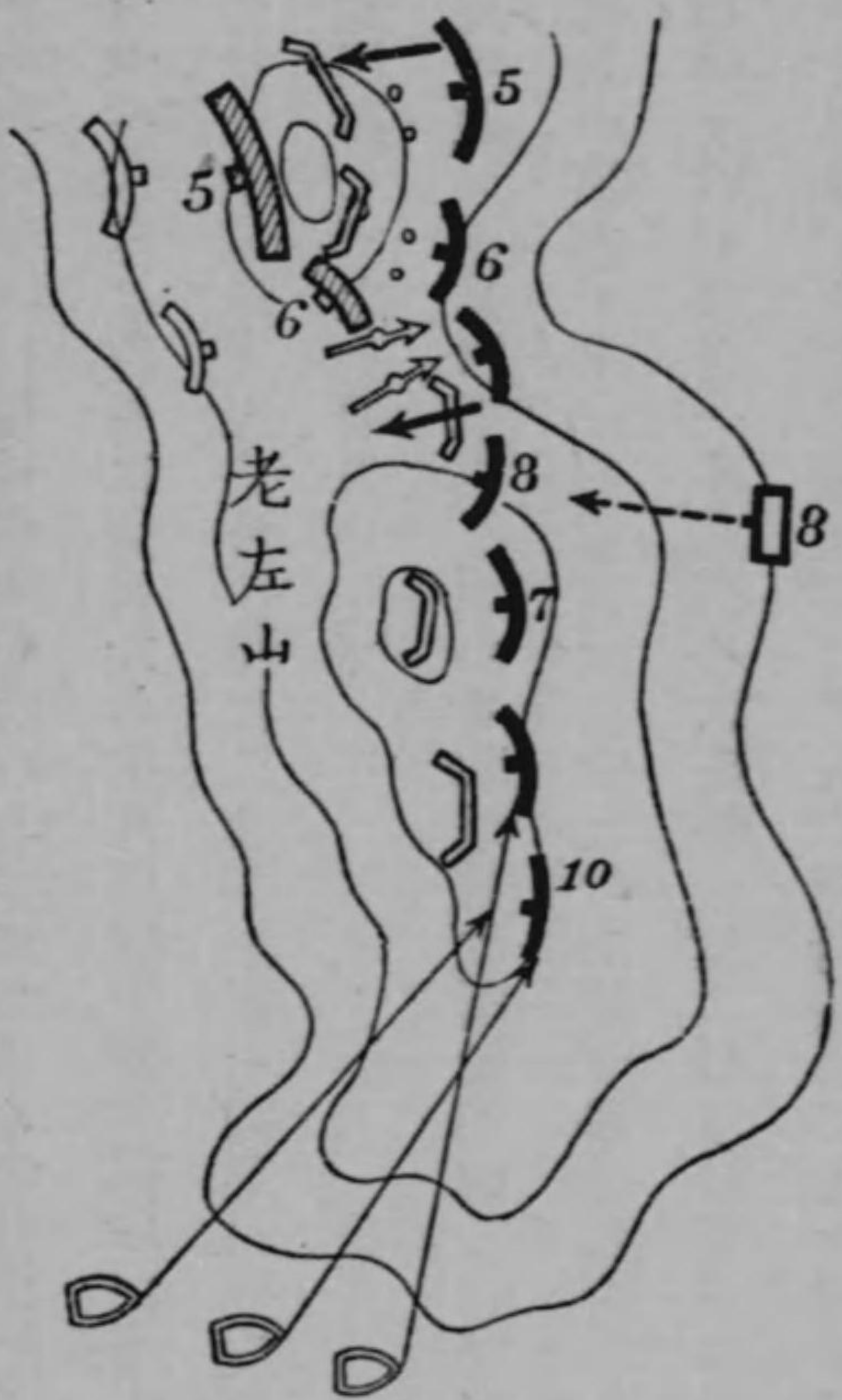
第三大隊長志崎少佐は第十一、第十二中隊を第一線とし二鐵匠西側高地の敵に向ひ攻撃前進せしめ豫備たる第九中隊及M.G.二門を其の掩助射撃に任ず此の頃敵は右側第一大隊の攻撃殊に其の第一中隊の第三小隊が敵陣地の中央突角の最高地を奪取せしため第三大隊正面の敵は其の側背を脅威せられ逐次退却を始め加ふるに第一線兩中隊は陣地前に迫り射撃を開始するや一部の監視兵を残し主陣地

たる太白山一帶の高地に退却せり。

四、第二大隊の老左山の攻撃と大隊長負傷

第二大隊は三中隊を第一線とし黃泥川を渡り老左山及其の北方高地に向ひ一意前進中敵は射撃を開始す敵陣地は老左山北方鞍部に堅固なる掩蓋を有する散兵壕あり障礙物を設け附近一帶の陣地之に連りて敵火熾盛となり殊に鞍地よりM.G.射撃を始む。

第五、第六中隊は敵のM.G.を有する陣地に對し射撃を開始し遂に之に突入して占領せんとするも敵火猛烈にして容易に近接し得ず此の時大隊長敵彈の爲殞る。



第四篇 陣地攻撃

敵の地雷各所に爆發すると共に敵の旅順艦隊「レトウインザン」以下十隻出動して側背に十字火を受けて大隊の左翼各中隊は死傷續出す。
第一線各中隊は一進一止敵に近迫し
第五中隊は將にM.G.陣地に突撃せんとするや陣地前の地雷爆裂し引き續き
第六中隊正面にも又爆裂し加ふるに

鞍部附近の敵 M.G. は熾に側射を行ひ我が死傷多く(將校以下百十七名)戦線膠著して前進頗る困難となり大隊長代理は直ちに豫備たる第八中隊を鞍部附近に増加して前進を促したるも敵の銃砲火の集注を受け且敵艦隊老左山沖に現はれ我が左翼を砲撃し情況轉た苦難なり(間もなく我が日進、春日の兩艦出動して之を撃退せり)。

當面の敵又頑強に抵抗し而かも陣地前は斷崖峻峻にして容易に近接し得ず之に於て第一線中隊は我が砲兵の協力を求むるも力及ばず已むを得ず歩兵獨力にて谷、稜線を利用し殆んど匍匐して近接し手榴彈を投じて各一小局部毎に突撃し遂に日没に至り辛うじて老左山附近の敵を一部撃退するを得たりしも全山未だ占領するに至らず相對峙して夜を徹す。

五、太白山の夜襲

イ、太白山附近敵陣地の價值

最高地 203 を中心に一帯の山頂併に各鞍部を占領しあり各谷及斜面を瞰制し山脚には警戒兵位置しあり陣地正面約千五、六百米に互り所々に障礙(主として鹿柴)を設けあるを認む。

ロ、晝間第一大隊の攻撃

歩十二の第一大隊は十四時太白山北部一帯の敵陣地攻撃を開始するや敵との距離約五、六百米にして第三、第一、第四中隊を第一線とし直ちに射撃を開始す敵は豫め準備しある爲か射撃正確熾



晝間攻撃隊形

夜襲隊形

烈にして第四中隊の如きは稍、稜線を越へて散開せし爲忽ち中隊長以下小隊長二下士兵約七、八十の損害を生じ第一、第三の兩中隊も死傷相當多く遂に第四中隊は一時後退して豫備として控置するの已む得ざる情況となる時に十七時。

ハ、夜襲の決行

左翼隊長神尾少將は晝間攻撃容易に進捗せざるのみならず敵又頑強に抵抗し我が死傷大なるを鑑み夜襲を決行して敵陣地一帯を奪取するに決左の攻撃部署を命ず。

- 右夜襲隊 内野少佐の率ゆる歩四三の第二大隊
- 中央夜襲隊 久野少佐の率ゆる歩十二の第一大隊
- 左夜襲隊 志岐少佐の率ゆる歩十二の第三大隊

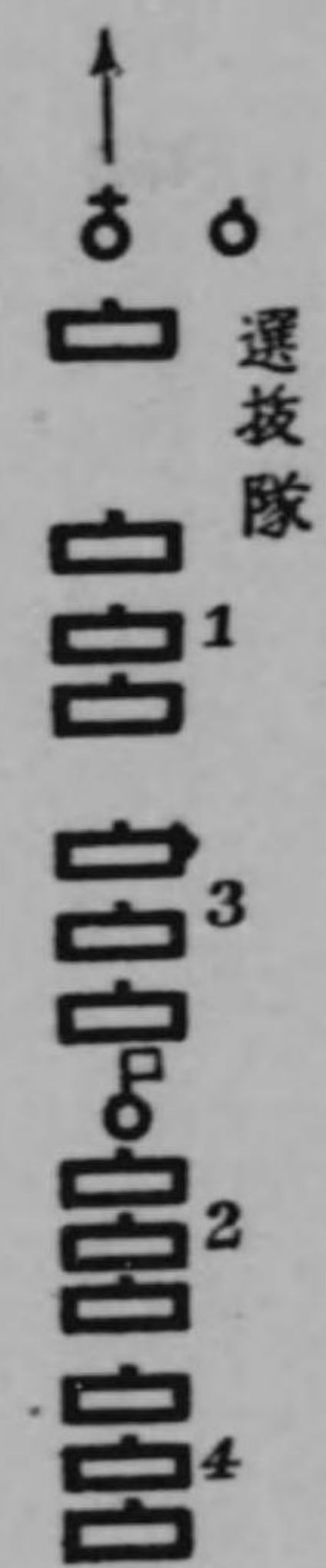
二、夜襲の状況

日没と共に戦場は一時銃聲止み各夜襲隊は夫々搜索隊を出して極力敵陣地併に進路の偵察標示を

行ひ彼我の斥候は所々に衝突して夜間の靜寂を破り銃聲溪谷に響き敵は時々探照燈を以て前地を照らして至嚴の警戒をなす。

二十一時頃右夜襲隊は行動を開始す。

中央夜襲隊は概ね左の隊形を以て選抜隊を先頭とし第一、第三、第二、第四中隊の順序に嶮崖を



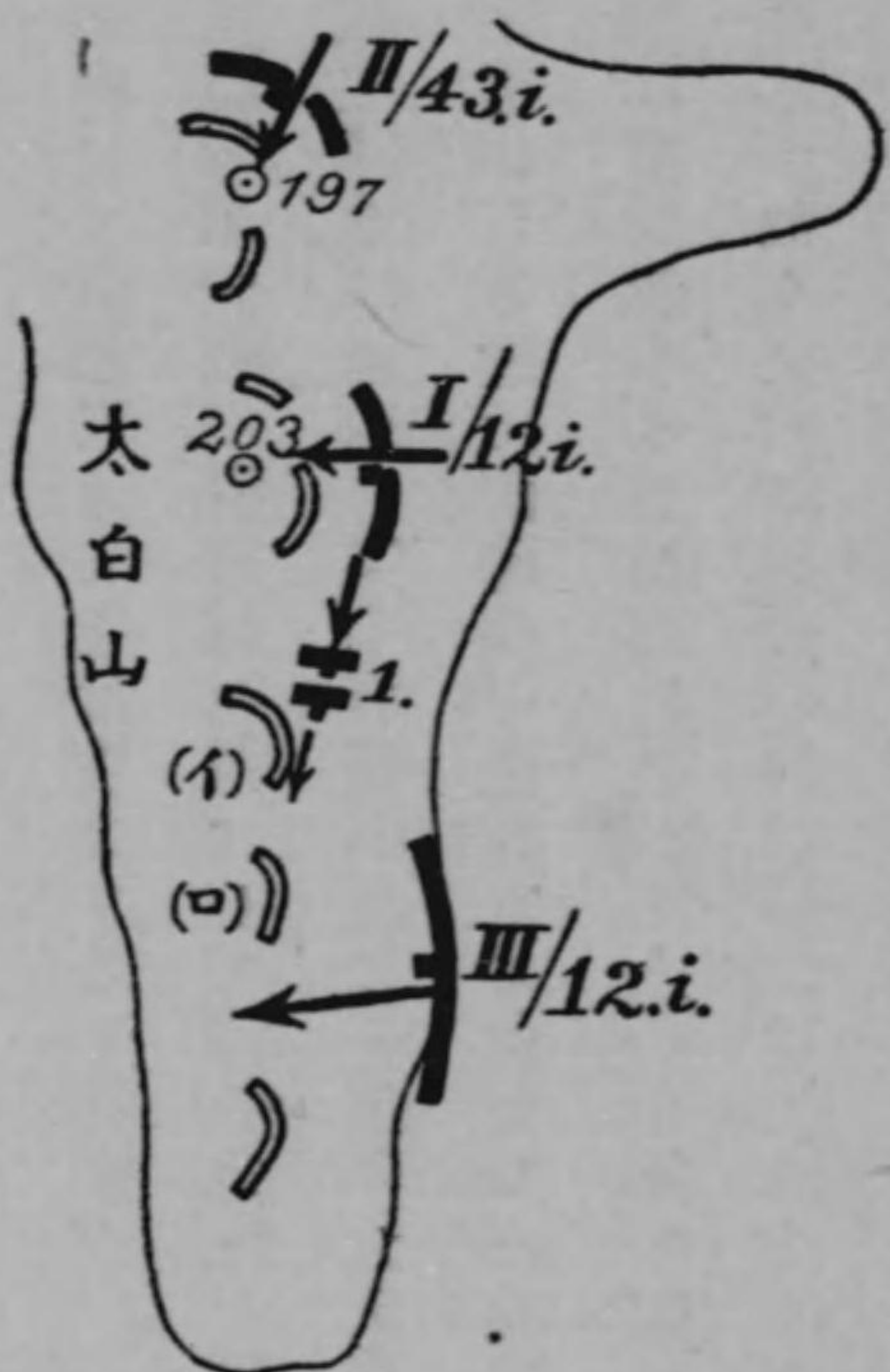
攀ぢ谿間の小徑を辿り敵より射撃を受けつゝ應射せず前進す此の時月は東天に上りて朧氣に四邊を認むるに至る。

右方¹⁹⁷高地に向ひし内野大隊の喊聲を揚げて突

入するを聞くや久野大隊は一意突進し敵陣に近迫す敵は全火力を發揚して猛射し陣地前を照明して我が軍を照らし月光と相俟ちて正確なる射撃を受けしも遂に勇躍して敵陣に突入同時敵は左側方向より逆襲し來りしも接戦格闘の後²⁰³高地附近の敵陣を奪取す。

ホ、急轉向して敵陣地を急襲す

大隊の先頭中隊たる竹内中隊長は敵陣地を奪取するや瞬間に左側方面より猛射を受くると共に速かに左側敵陣地を攻略するにあらざれば現陣地の保持困難なることを認め大隊長に報告すると共に獨斷第三小隊を先頭に急轉向して直ちに突進せしむ。



中隊は先づ(イ)陣地に勇躍突入し之を奪取し更に(ロ)陣地に向はんとするや敵兵頑強に抵抗し彼我の距離約十米山徑上とて辛じて小隊は横隊の儘自然敵前至近の距離に停止し耳を剪く銃聲と火光は壯烈を極め小隊長叱咤激勵前進を促すも前進し得ず中隊長突如小隊前面に飛び出で続けと敵陣に突入すれば中隊其の勇に鼓舞せられて踵續し月光を浴びつゝ白兵戦と

なり彼我相重りて斃れ又は傷つきて遂に敵を撃退して占領す時に二十三時二十分大隊は思はず君ケ代を吹奏し萬歳を絶叫せり月は中天に皎々たり。

同時第三大隊も左側老左山西側の敵及び草樹溝東側の敵と相對峙し終夜奮闘し拂曉と共に第一大隊の左方面に突進して之を占領す。

其三 本戦闘より得たる教訓と原則の對照

一、師團の攻撃準備について

「敵陣地の状態特に強度は攻撃計畫に大なる影響を與ふ故に敵陣地及其の前後に於ける地形の偵察は状況の許す限り……」

搜索は攻略を企圖する敵陣地の全縦深に互り極力細密に行ふものにして主陣地帯の位置は之を確知すること緊要なり……」(作令一〇九)。

本戦闘に於て師團が敵陣地に到達してより約二週日に互り連日將校斥候を派遣し敵情、地形の偵察に努めしも如何にせん山又山の山嶽地帯にして小徑の外は急峻なる斜面又は斷崖の深谷とて斥候の行動自由ならざりしも凡有ゆる努力により漸く主陣地帯と其の前進陣地たる劍山—大鐵匠山—老左山の敵陣地の敵情は確知するを得しも其の主陣地たる老坐山—座山勾—太白山の陣地は概定し得たるのみにて詳細なることは搜索するを得ず。

夜間將校斥候敵の警戒線を潛入して深谷急坂を攀り終夜各所を彷徨して道に迷ひ方向を失し偶然にも敵主陣地に逢著し其の背後斜面に一連の大天幕に露營し在るを認めし等各部隊は辛慘苦心して搜索に従ひしも遂に敵砲兵の確實なる位置殊に重砲の種類等を知るを得ず。

攻撃に當り忽ち十五榴彈に我が山上の山砲中隊は撲滅的打撃を受け歩兵の攻撃を援助するを得ざるに至るが如く又敵陣地前の地雷の埋設は略々推定せしも其の位置不明の爲發掘するを得ず爲めに將た突入せんとする至近の距離に爆裂して我が軍の志氣を挫折せしめたるが如きは細密なる搜索十分

ならざりしは遺憾なり。

殊に全く豫期せざりし敵艦隊の出動と山上に對する艦砲の仰角度が實際近距離にては射撃し得ざるものとの觀念を裏切り火尖一度艦砲に閃めけば巨彈忽ち山上の我が軍の附近に炸裂して人馬共に跳躍して斃るるの慘狀を呈するに至つては將來戦に於て海岸に作戰する軍隊としては大に顧慮するのと肝要なり。

二、左翼隊長の攻撃準備位置に配置の方法に就て

作令一一二に準じ歩兵の爲には展開區域、攻撃目標、戦闘地域、展開完了又は攻撃前進の時機等を明示すべく教へられあるも本戦闘に於て右翼隊の左翼隊に攻撃援助の爲め相互に連絡十分ならず殊に將に攻撃開始せんとする際我が砲兵は沈黙し各部隊の戦闘地域は示されあるも山地とて稜線の關係上諸隊自然に混淆して明確を失し爾後の戦闘遂行上稍々適確なる行動を期し得ざるに至れり。攻撃前進の時機につて

拂曉と共に各隊は攻撃前進すべきに係らず濃霧の爲我が砲兵の射撃不可能なる理由を以て歩兵部隊が前進を開進せざりしは一見不思議の感あるも左翼隊長としては成るべく霧晴れ歩、砲協同の下に攻撃を實行せしめんとする抑制上の處置なりしならんも寧ろ積極的に濃霧を利用し敵眼敵火に遮蔽し一舉に警戒兼前進陣地を奪取するを得策とせしならん之れ作令一二六に「……我が企圖を秘匿

し敵の不意に乘じ突撃すること極めて緊要なり」又同三二九「山地は通視困難、氣象の影響大なるを以て奇襲の實施を容易ならしむること多し」とある所以なるべし。

三、攻撃實施に就て

イ、砲兵威力の差は我が砲兵を以てする障碍物、側防機能、陣地設備の破壊、敵砲兵の制壓等は遺憾ながら達成し得ず寧ろ此の際は山砲を直接歩兵指揮官に配屬して歩兵重火器的に使用し得たらんには地形の關係上今少し有利に歩、砲の協同を達成し得しならん。

ロ、第一線歩兵攻撃開始後に於ける行動は此の地形に於ては如何にせん稜線の外全く通路なく従つて前進隊勢も一列側面の縦隊に依る外別に方法なきも勉めて地勢を偵察して少しでも前進を援助し得る地域には段階的に占領して射撃援助をなしつゝ逐次推進せしむるを肝要とするのみならず萬難を排して敵の豫期せざる斜坂を一小部隊宛に分進せしめ縦へ稜線部隊敵火の爲前進阻止せらるるも各、峻峻なる攀登部隊は一意至難なる地形を克伏して隱密に敵に近接し成るべく死角を利用し一舉に敵陣地の支撐點、緊要なる鞍部等を奪取するを肝要とす此の手段に於て十分と謂ふを得ざるも亦已む得ざる狀況なりしならん。

ハ、側防機能たるM.G.に側射せられたる場合の處置

左大隊が老左山北方鞍部のM.G.の爲側射せられ多數の死傷を生じ大隊長は直ちに第八中隊を増加し

極力其の撲滅に任せしめたるは當時の裝備としては至當ならんも寧ろ少數の選拔隊を以て手榴彈に依る肉迫攻撃班を臨時編成し鞍部上の高地に隱蔽して進出せしめ一舉にM.G.を爆撃せしむるを一法ならん之れ作令一三四「敵の側防機能の詳細なる配置……等は我が歩兵敵の歩兵火網内に入りたる後始めて確認し得ること多きを以て歩兵は豫め對應の準備を盡くすと共に速かに之が発見に勉め機を失せず之を處理し……」の主趣に合致する所以なるべし。

ニ、突撃は小隊長の斷乎たる決意に依り決行し決して躊躇すべからず。

本戦鬪に於て第一中隊の第三小隊長は敵陣地前至近の距離に到達し一舉將に突入せんとする瞬間地雷は爆發し土砂石礫雨下し爲に一時と雖も小隊長以下地上に俯伏して停止せし爲いざ突入せんとすれば部下僅かに六名より踵續せず地雷の爲連絡を失したる爲なり幸ひにも小隊長は斷乎として僅かに六名の小數を指揮し敵陣に突入し十餘名の敵と格闘し遂に占領するを得たるも若し此の際遲疑逡巡せんか此の小隊は敵火の爲全滅せしやも計り難し戦機は凡て之れ神速果敢なる決意と不屈の精神疾風迅雷敵をして之に對應せしめざるにあり。

ホ、陣地攻撃に當り最初の射撃位置は慎重に觀察する要あり。

太白山の敵主陣地を攻撃するに當り第四中隊はイの位置に射撃を開始するや敵彈雨注して忽ち中隊長以下約中隊半數の死傷を生じたり之れ地線を越へて全身を暴露し敵が準備しある火網内に猪

進したる結果と謂はざる可らず。

第一、第三中隊は(ロ)の位置にて射撃を開始せしが尙ほかつ相當の死傷者を出し苦戦せしを以て見るも地勢の觀察は一瞬に適當なる選定眼を平素より訓練する要あり。

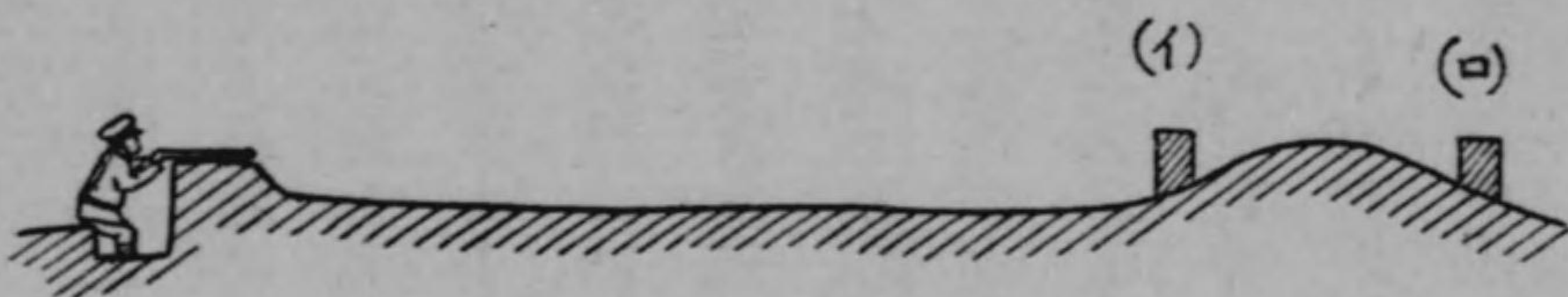
へ、夜間攻撃に就て

攻撃部署は何れも實行確實なる單一方法にして夜間の攻撃としては適當ならんも地形錯雜峻嶮にして左右の連繫殆んどなし得ざる本日の場合に在りては現代ならば無線通信、視號、信號等を各種併用し相互に連繫を密にすると共に成るべく獨立性を附與するを要す。

ト、攻撃隊形に就て

本戦闘は前進地形峻嶮なるも距離短きと稜線山背比較的廣き等の關係上初めより白兵威力を發揚する如く中隊縱隊にて前進せり。

然れども運動は之が爲稍困難にして隊伍亂れ易く又前後左右の撞著ありしも敵は已に來襲を豫期し十分の準備を整へ然かも月明瞭なるも通視し得て不意且つ一舉に突入するか又一部を迂回せしめて側背より火點を奪取する等の企圖をなし得ざりし狀況なり。



なり。

チ、中隊長所命の目標を奪取し直に左に轉向して敵堡壘を奪取したるは眞に沈著果斷の獨斷なり。

第一中隊長竹内大尉は所命の目標奪取せる直後斜左陣地より猛射を受け(喊聲と銃聲を目標として)直ちに奪取せざれば再び逆襲せらるるを豫期し迅速果敢に第三小隊長に命じて先づ前進を命じ自ら中隊主力を掲げ直ちに續行敵の準備整はざるに乘じ一舉に突入したるは機宜に適したる行動にして之が爲左第三大隊は豫定の高地に進出するを得太白山一帯の敵を驅逐するを得たり。

步操二一七「至近の距離に於て熾盛なる敵火を受くるに當り直ちに突進すべきや若くは地形を利用し或は匍匐して更に近迫し突入すべきやは狀況に依る」とあるは大に味ふべきことにして實際問題として敵前至近の距離に一旦停止せば自然的亂雜なる各個射撃となり號令容易に徹底せず遂には混亂し強烈なる逆襲でも受くれば或は敗退するに至ることなしと保し難し況んや新募未熟の補充兵の多く參加しある場合は指揮官として大に猛省を要する大なりとす。

第四章 上海附近の陣地攻撃

附 廟巷附近の戦闘に於ける障碍爆破(昭七、二、二二日)

其の一 上海附近陣地戰經過の概要

一、上海事變の原因と陸軍派遣

昭和六年九月滿洲事變の勃發以來口に筆に排日侮日の言説が煽動せられ加ふるに極端なる示威運動が行はれ在留邦人に對する壓迫は日に激化し遂に邦人托鉢僧の殺害となり日、支間の嶮惡なる空氣は日に増し惡化し我が海軍陸戰隊は居留民保護の爲其の警備擔任區域に就かんとするや閘北附近の支那第十九路軍は突如發砲挑戰し此に日支間に戰鬪は開始せられ爾來我が陸戰隊は約十數倍の支軍と相對峙し連日連夜不眠不休の苦鬪を續け二月初頭廟議一決して陸軍を上海に派遣するに決し第九師團を主體とする部隊と別に第十二師團より急速に混成約一旅團の兵力を派遣せり。

混成旅團は二月六日第二艦隊に搭乘し佐世保を發し七日吳淞附近に上陸す。

第九師團は二月九日宇品出航其の第一梯團は十三日夕吳淞砲臺を掩護艦隊の制壓射撃の下に吳淞鎮附近に主力は上海に到達す。

此の間約十七日間我が陸軍隊は能く其の任務を全ふし我が陸軍の上陸を掩護し完全に陸海軍の協同作戰は完遂せり。

二、上海附近の地形と敵情の概要

イ、地形、上海附近は揚子江の吐出せる砂質粘土より成り一帶の平原にして江南運河、吳淞クラーク、黃浦江、併に大小各湖間を連絡する無數の溝渠縱横に通ずる運河地帯なり。

従つて水上運航の便は頗る大なるも陸上交通路至つて少く殊に遠距離を連絡する交通路は曳舟道を除く外絶無なり此等の水路は徒歩兵と雖も徒渉不可能従つて軍隊の行動は多大の掣肘を受け戰鬪の進捗亦迅速を期し難し。

上海附近の都市は煉瓦より成る城壁を有し攀登不可能なると共に野砲彈に對する抵抗力甚大なり村落は殆んど圍壁を有しあらざるも往々水濠を廻らし一般に村落全部の圍繞物なきも村落内に同族相集團して圍壁を設け一種の複廊をなし防者に對し大なる抵抗力を附與す。

ロ、敵情

第九師團上陸當時上海附近の支那軍は主として第十九路軍にして蔡廷楷之を指揮し其の兵力大體左の如し。

第六十師	一萬一千人	山砲八
第六十一師	一萬二千五百人	山砲十
第七十八師	一萬人	山砲六
計	兵三萬三千五百人、	MG.七十二、
		山砲二四、
		迫撃砲四〇

支那第九路軍配備要圖

(二月十八日夕)



ハ、上海附近の敵陣地状態

二月十二日以前より各陣地は構築せられ當初より江灣鎮、廟巷鎮を第一線陣地とし各村落を據點として夫々堅固なる鐵條網を繞らし側防機關銃坐を設け一連不斷の陣地集帯を作為し近代的設計に依る堅固なる野戰陣地たり。

従つて散兵壕は多く掘擴にして壕幅狭く深さ大にして所々に掩蓋を設け機關銃掩體は概して掩蓋を有し鐵板、煉瓦にて構築し多くは銃眼射撃の設備をなし外壕は一般に自然水壕を利用し之に有刺鐵線を網狀に連結しあり。

三、日本軍の攻撃部署

イ、二月二十日の戦況

不遜の支那軍は我が軍の要求を納れざるのみならず却て敵對行爲に出で遂に日本軍は左の攻撃部署を以て攻撃前進を開始す。

- 1、混成第二十四旅團、吳淞西南方地區を経て江灣鎮西北地區の敵陣地を攻撃す。
- 2、第九師團の右翼隊(歩兵約六大隊、山砲一大隊基幹)東方より江灣鎮附近の敵を攻撃す。
- 3、同中央隊(歩兵約四大隊、山砲一大隊基幹)江灣鎮南方地區の敵を攻撃す、
- 4、左翼隊(海軍陸戰隊基幹)閘北の現陣地を守備し當面の敵を監視す。

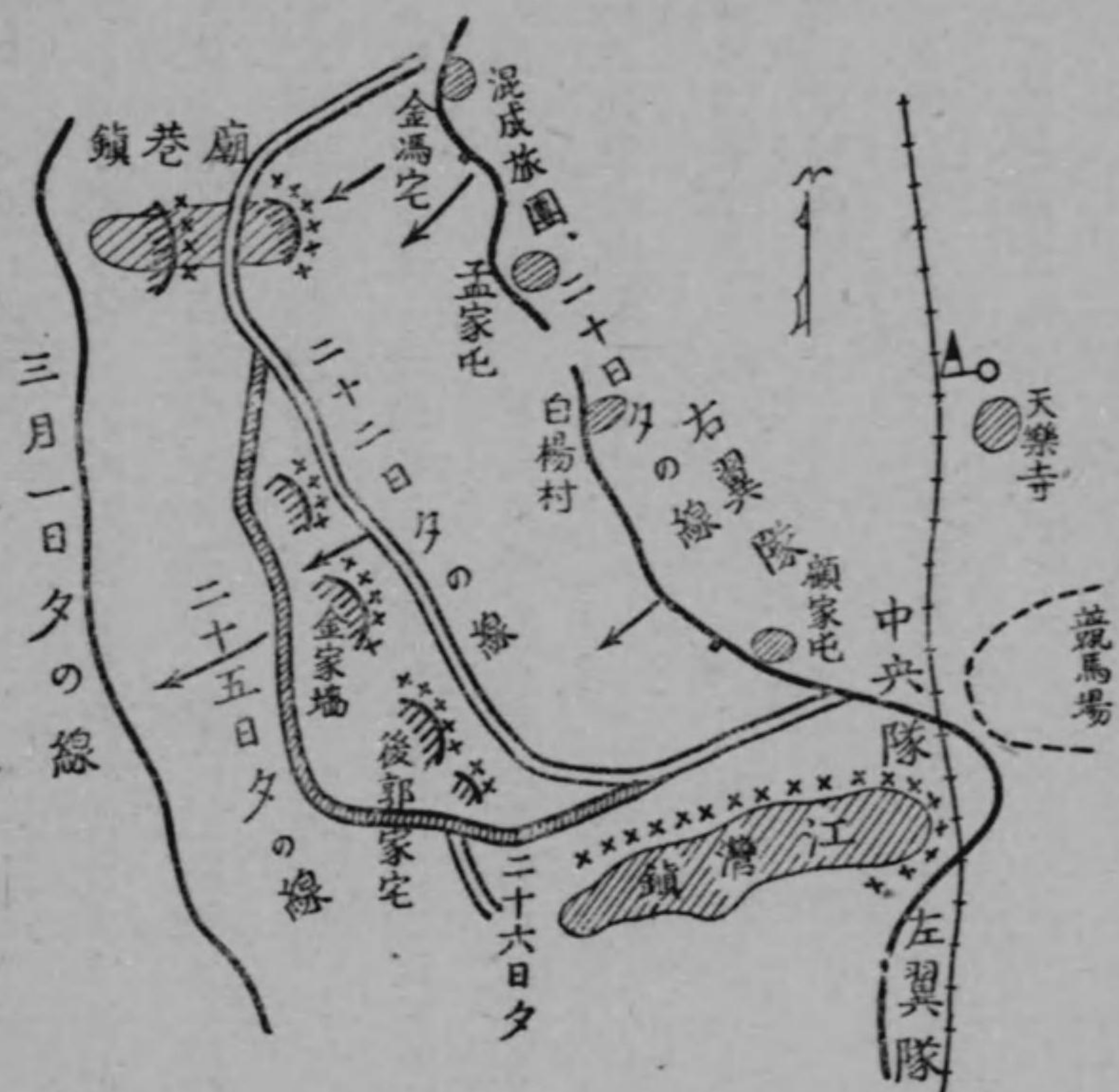
5、砲兵隊、飛行隊、戦闘の初期主として右翼隊に協力す。
 6、日本軍の進出攻略

各部隊は十時頃江灣鎮競馬場南北の線に達し續いて右翼隊は江灣鎮東端附近に堅固なる陣地に據れる二、三千の敵を撃破し夕刻には右翼混成旅團、師團主力は概して上記要圖の線に進出し新に敵の第二、第三線陣地の位置を確認し之に對する部署を變更し翌二十二日攻撃を續行するに決す。

ハ、二月二十二日戦況

攻撃は昨夜の攻撃部署變更に依り拂曉より實行せられ主として砲兵火力を敵陣地の重點に集中し逐次に之を粉碎しつゝ奪取主義をとり右翼の混成旅團は六時四十分天下に名を揚げ

日本軍作戦經過要圖



たる廟巷鎮の爆彈三勇士等の壯烈なる奮闘に依り其の陣地の一角を奪取し續いて漸次其の以南後郢宅の北方に互る敵陣地を突破したるが戰場附近に便衣隊の出沒頻にして之が掃蕩を要すると地形水濼多く道路少く運動頗る困難なるに依り戦果の擴張意の如くならず夕刻要圖の線に進出し敗退したる敵は近く前方部落に停止し依然抵抗を繼續す。

夜半約三大隊の敵猛然として混成旅團の右側背南孫宅及其の東方地區に向ひ夜襲し來りしが我が軍は多大の損害を與へて之を撃退す。

ニ、二十三日以後の戦況と日本軍司令官の著任

敵の陣地は村落併に個々の家屋及水濼を利用し且陣地の要點には障礙物を設けて堅固に編成せられあると我が兵力に鑑み師團は全線に互り同時に之を力攻することを避け十分なる準備を整へ周密なる計畫の下に敵陣地の要點に對し戦力特に空中爆撃と重砲の火力とを集中して之を破壊攻略し逐次戦果を擴張する如く戦闘指導の方針を立て二十三、二十四日は概ね前夜來の位置に在りて攻撃を準備す。

二十五日軍は再び總攻撃を開始し爆撃と重砲火を敵陣地の要點に集中續いて歩兵の突撃と併用逐次敵の第二線陣地を攻略す敗退せる敵は二十三圓附近に集結中大場鎮より東進せる督戦隊（退却する友軍を督勵又は懲戒嚴罰する隊）と衝突し且此の間我が爆撃及砲撃を受け多大の損害を蒙り

しも督戦隊の阻止に依り再び陣地回復の爲反轉して東進し我が占領地前の諸部落に現出せしも志氣沮喪し江灣鎮の敵もさすがに頑強なりしが遂に我が猛撃に堪へず十六時頃より退却す。

我が軍の増兵と軍司令官の新任

曩きに第九師團上陸當時は敵は第十九路軍のみなりしが戦闘の結果警衛軍第五師(約三萬)が新に増加し兵力頓に増大せし事明かとなり現在兵力のみにては戦況膠著に陥るの虞あり速かに處理するを有利と認められ陸軍大將白川義則を軍司令官に任命第十一、第十四師團を増遣し上海派遣軍を編成せられたり。

斯くて軍は大舉再攻にかゝり三月四日概して嘉定—真如の線に態勢を整理し上海附近の敵を一掃せり。

我が軍の損害、戦死二四〇、戦傷一、六〇〇

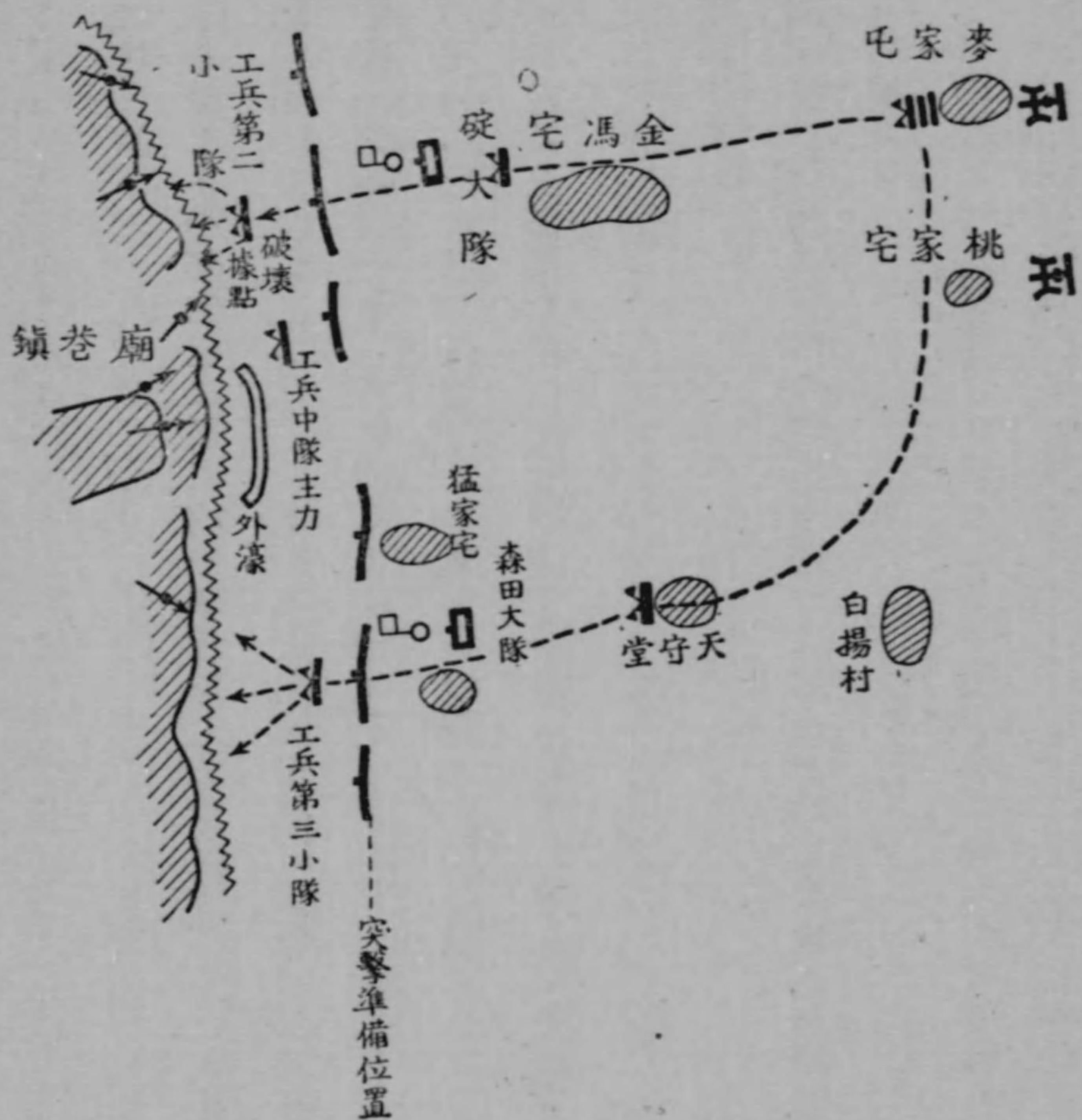
其の二 廟巷鎮附近の障碍爆破

一、下元混成旅團の廟巷附近敵陣地攻撃

二月二十二日拂曉五時三十分を期し廟巷附近敵陣地を奪取するに決したる下元旅團長は前日たる二十一日十六時四十分工兵中隊長に命ずるに工兵の一部を以て左翼森田歩兵大隊方面に主力を以て中

央主攻撃方面たる碓歩兵大隊の正面に於て各、敵陣地鐵條網に突撃路の開設を以てす。此の敵鐵條網は主として有刺鐵線を以て構築せる高鐵條網にして深さ二列杭にして約四米あり。

廟巷鎮附近鐵條網破壞要圖
二月二十二日拂曉



森田大隊正面には處々鹿砦を併用しあり。
工兵中隊長の處置

松下中隊長は命を受くるや麥家屯に於て第一小隊長大島少尉、第二小隊長東島少尉及器材係を集め急造破壊筒に依り第一小隊(二分隊欠)をして森田大隊正面に三條、第二小隊(二分隊欠)をして碓大隊正面に五條の突撃路開設を命じ諸準備をなさしむると共に十八時部下一同を集め中隊命令を下達すると共に訓示を與へ此の壯行榮譽は日本軍工兵の誇りなりと激勵一死以て其の任を盡さんことを命じ陣中僅かに得たる支那酒を酌み交し訣別す各自は背囊入組品の整理をなし後事を战友に托して出發す。

兩工兵小隊の爆破作業

兩小隊は第一線兩歩兵大隊の突撃陣地に分進し大隊長と協定を終り五時前後未完成の突撃陣地又は破壊據點に至り待機す。

當夜は陰曆十七日の月は曉霧に覆はれ勝ちなるも數十米は明らかに透視し得る程度なり。敵陣地は旬日餘を費し構築せられ鐵條網を以て廻らし殊に碓大隊正面廟巷の陣地は此の方面の支撐點らしく外濠をも備へ陣地前方は濃密なる銃砲の火網を編成し夜來の警戒至嚴にして絶へず銃砲火を以て間斷なく火制しありて容易に近接し得ず。

左翼方面第一小隊の爆破

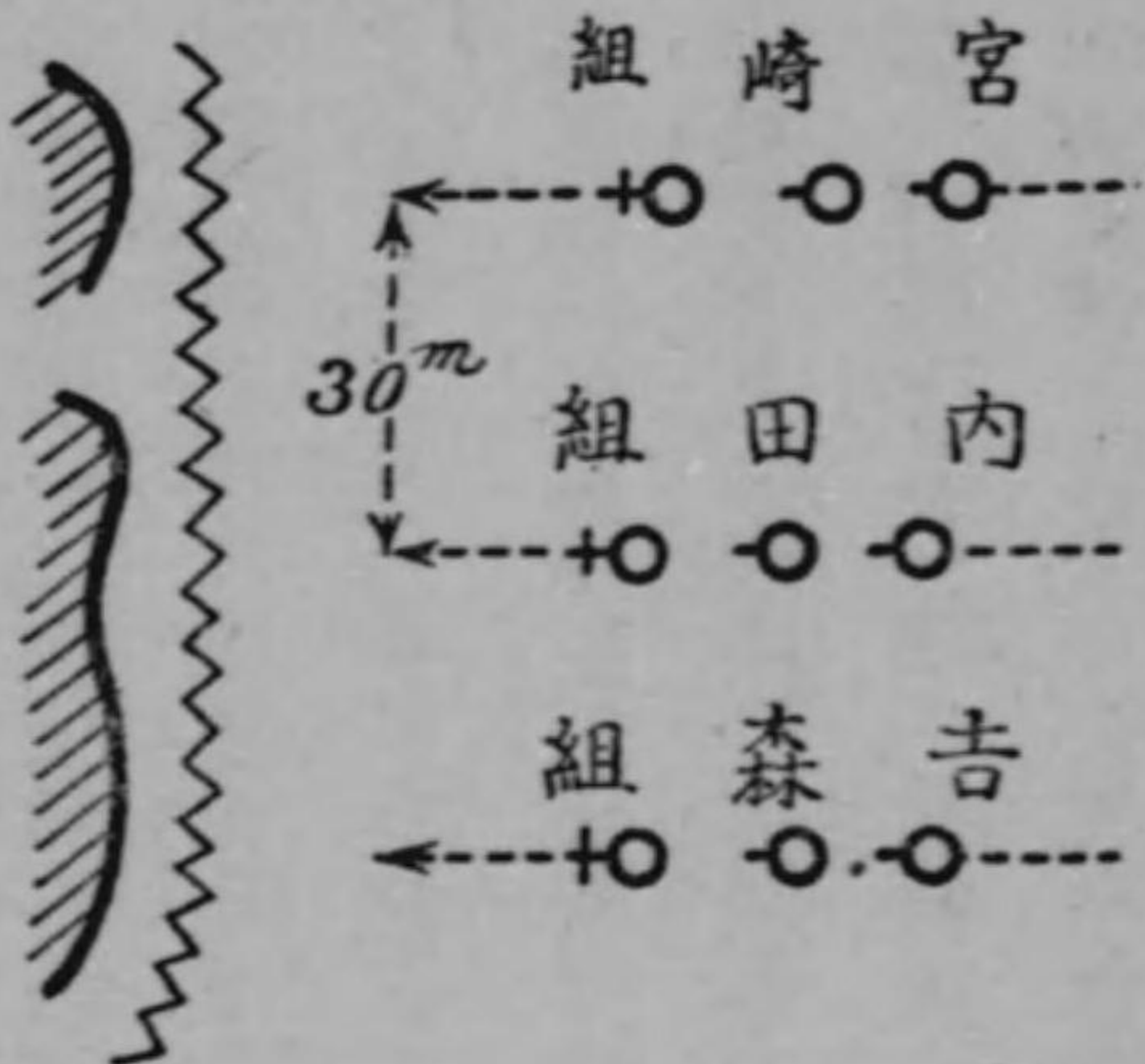
第一小隊は五時頃朝霧稍濃く閉せるを以て好機に乘じ小隊長は先づ隱密破壊を命ず宮崎上等兵の第一組、内田伍長の第二組、吉森上等兵の第三組は各約三十米の間隔を以て匍匐前進す。

敵は依然猛射を繼續するも我が爆破班は幸に發覺せられず遂に鐵條網の線に達し第一、第三の二組後退すると見るや轟然たる爆音は戰場を震駭すると共に兩所共鐵條網の飛散するを認めしも内田伍長の組は未だ點火を終らず一度は其の風靡力に打ち倒され全身土砂を浴びしも再び起き上りて點火し數秒を遅れて一大爆音と共に茲に完全に各幅約十米の突撃路を開設し得たり思はず歡喜の餘り萬歳を絶叫す續いて森田大隊は突撃を敢行し廟巷南方の敵陣地を奪取す。

右小隊(所謂三勇士)の爆破

右小隊長は五時第一班長馬田軍曹の指揮する第一、第二、第三組をして煙幕を構成し出發せしめたるに煙漸次稀薄となるや敵前約數十米の地點なるを以て遂に發覺する所となり約四ヶ所よりM.G.火の猛烈なる銃火を浴びせられ馬田班長は斷然強行破壊を決意し鐵條網に突進す。

第一組は先づ一名殞れ一名負傷し残りの持田一等兵單身破壊筒を携持し突進せるも此れ又傷き殞る



第二組も一名殞れ一名は前盒に彈丸當りて携持彈藥爆破して破壊筒上に打ち倒れ第三組又悉く殞る斯くて三組共此の壯圖空しく企圖は挫折に終れり。

茲に於て小隊長は豫備班長内田伍長に作江一等兵の第一組及北村一等兵の第二組に直ちに強行破壊を命ず。

此の時内田伍長は破壊筒を鐵條網に挿入したる後點火するの暇なきを思ひ最後の手段たる爆藥を抱きて鐵條網と共に粉碎するの悲壯なる覺悟を以て破壊筒に點火を命じたる後敢然勇躍鐵條網に突入す。

然るに第二組は辛うじて若干後退するを得たるも第一組(作江伊之助、北川丞、江下武二)は三名共に鐵條網と共に爆死粉碎せらるるに至れり是が爲幅約十米の突擊路二條を開設せられたり。

猶第一班長として部下三組悉く失敗せるを遺憾とし自ら敵兵に手榴彈十數發を投擲し其の怯む隙に單身鐵條缺を以て一突擊路を開き以て三突擊路を開設し碓大隊に突擊の動機を與へ遂に堅壘廟巷の一角を占領し旅團の攻撃を成功せしめたり。

其三 本戰鬪より得たる教訓と原則の對照

一、上海附近の作戰指導について

用兵作戰の見地より上海附近の戰鬪經過を觀察するに最初第九師團、下元混成旅團を以て第十九路軍が旬日以上に互り數線の陣地を堅固に構築し加ふるに特殊の地形たる錯雜混淆の各種水流に行動の自由を束縛せられ従つて敵は韌強の性質を強化したるが我が軍は斷乎として攻撃を開始せり。

然かもかゝる地區に於て純然たる正面攻撃を決行したるは敵を擊退後努めて上海市街に其の敗殘兵を侵入せしめざる爲にして攻撃作戰上自由に攻撃重點を指向し又は迂回して其の側背より攻略する等を得ざる狀況なりしならん。

敵軍の増強に伴ひ戰線の膠著を虞れ一舉に擊滅する爲我が軍の増強大せられたるは當然なるが偶然にも第十一師團の一部隊及其の他の若干部隊が吳淞に上陸したるは第九師團の力攻に依り萎縮しありし敵をして日本軍増援の大部隊(少くも二、三師團)この方面より上陸するとの錯覺を與へ全支那軍の注意を此の方面に注がしめたる間に我が第十一師團主力は敵の虛を衝いて揚子江本流沿岸を遠く迂回して敵の側背に上陸を敢行したのである。

此の錯覺がそも敵敗因の一大原因をなして居るのである之あればこそ我が軍は敵に比し三分の一の寡兵で擊破することが出来たのである。

かくて正面攻撃は南翔の陣地を陥れ側面を衝く第十一師團は補給其の他で困難を極めつゝ嘉定に進出し敵の死傷は少くも四萬を下らぬ程の打撃を與へたのである。

畢竟するに我が軍が堅忍不拔克く困苦缺乏に堪へ難局を打開し戦捷の一途に邁進した所以である。

二、困難なる状況に於ける堅固なる陣地攻撃

地形の障碍多く守るに易く攻むるに難き特殊の状態に加へて兵力の懸隔甚だしく飲料水の缺乏、現地物資及人夫利用の不可能、便衣隊の跳梁其の後方連絡の困難等あらゆる不利の状態に於て然かも堅固なる陣地を攻略するには本戦闘の如く十分の準備と周到なる計畫の下に特別の考慮を拂ひ先づ空爆、重砲火の集中に依る敵重要物の破壊を實施し漸次陣地戦に於ける要領に近似せしむるは至當なる作戰指導と謂はざるべからず(作令一二七參照)。

三、工兵の障碍爆破について

歩操五〇一、同五〇七、作令一三六の何れも工兵が突撃實施前に障碍物破壊を實施する使用上の原則を示されあるは本戦闘に於て眞に尊き犠牲的精神の發揮による肉弾を以て突撃路を開設し以て歩兵大隊の突撃を完遂せしめたる偉大なる效果の教訓なり。

勿諸大隊長としては重火器を以て密に協同せしめ本日の如く煙を利用し或は砲兵の掩護下に作業せしめ敵特に機關銃に對し適切なる掩護の方法を講ずるを要す。

四、肉弾三勇士の心境について

上海攻略戦中の最大なる殊勳者として一世の同情敬慕を蒐めたる其の原因は何か。

之れ三勇士の崇高なる忠君愛國の至誠より發したる軍人精神の精華の發露にして軍隊志氣の表徴なればなり勿論各方面共古今を通じ此の意氣と精神に決して一步も譲らぬ壯烈なる勇士の行爲は幾多枚擧に遑なき忠烈を彰はしあるは吾人の確認する所なりと雖も此の三士の行動が特に公衆の讚嘆を受け國民精神指導として小學教科書にまで採用せられし所以は概ね左の事項に因るものと惟はる。

- 1、決死中の決死である。
- 2、自我を滅じ他の行動を完ふせんとする美しき決意。
- 3、勇敢驀進然かも堅忍不屈の壯烈なりしこと。
- 4、行動が純眞崇高なりしこと。
- 5、單なる一兵により遂行されたること。

斯く列示して見れば日本軍人として當然誰でも其の覺悟と修養はなしある筈にて別に新らしく述べ立つる程にて無きが如きも眞に死に臨み超然として爆筒を抱へ點火しつゝ鐵條網に向ひ突進し而かも先頭の一名負傷し一度顛倒せるに係らず點火は刻々として燃へ一刻の猶豫を許さず相扶けて再び勇進したるが如きは畢竟高潔無垢なる軍人精神の端的なる發露にして一に之を國軍に包藏する精神的威力に歸せねばならぬ換言すれば是即ち皇軍不朽の底力にして何物も突破せねば止まざる眞隨なり。

第五章 夜間攻撃

其の一 第十師團の三塊石附近の夜襲（三七、一〇、二一日）

一、一般の情況及夜襲の準備

遼陽占領後我が軍無事に苦しむこと約一ヶ月將士脾肉の嘆に耐へざりし時恰も好し敵は攻勢を取り來らんとし十月初旬早くも渾河の左岸に前進を始め其の兵力を我が右翼に集め以て我が右側背に出でんとする情況に在り。

於是我が滿洲軍は機先を制し其の未だ兵力を渾河左岸に集結せざるに先だち之を撃破するの目的を以て全軍の行動を始めたり之を沙河會戰の端緒とす。

野津元帥の率ゆる第四軍は十月十日第十師團（後備第十旅團を屬す）をして貴子山高地を占領せしむ第五師團は同日夜五里台子高地を占領す。

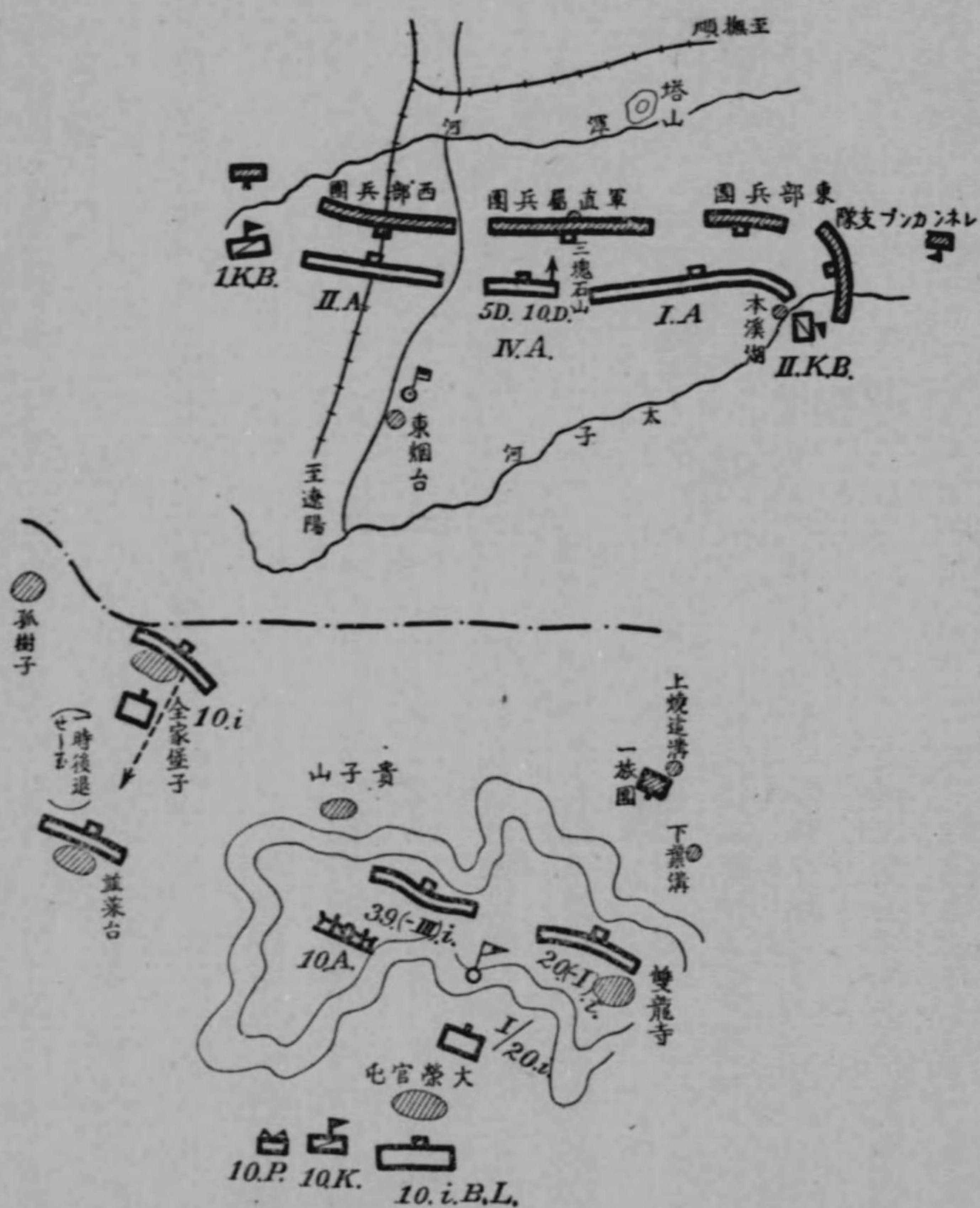
二、第十師團の行動

1、十月十一日師團は塔山（左圖参照）に向ひ攻撃前進すべき軍命令を受けまづ左の如く占領す。

爾後前進の爲には左隣接の第五師團が孤樹子以北に進出するに非ざれば其の左側の危険を顧慮し暫く現態勢にて同師團の進出を待つ此の時（八時三十分頃）左の敵情を知る。

沙河會戰日露兩軍位置要圖

十月一日夕に於ける



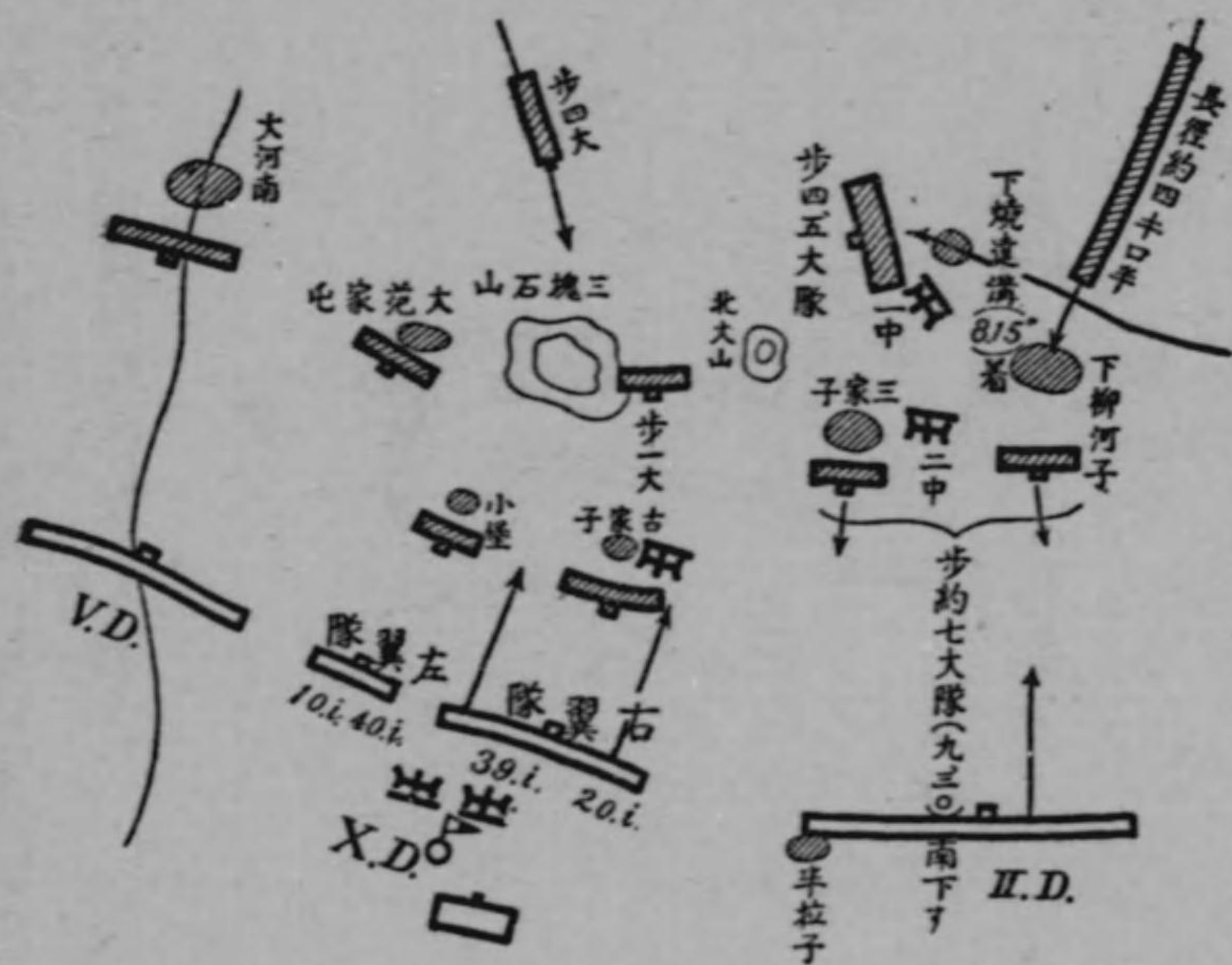
師團の右側三家子方面に數團の敵密集部隊現出し次で下葉溝西方高地に向ひ轉進し更に約一旅團の敵は上燒達溝西端に停止しあり。

是に於て師團は暫く前進を中止し左隣接第二師團の左翼旅團に協力し機を見て攻撃前進せんとし左翼隊を一時後退せしめ葦菜台に集結せしめ師團豫備は大榮官屯南側に集結す(要圖參照)。

2、敵の大舉攻勢に對し第一軍と協力して攻撃前進

第十師團併兩隣接師團方面敵情要圖

十月十一日正午に於ける



師團長は今や當面併に右側方面の敵頗る活潑なる上記要圖の如き諸情報に接すると共に右第二師團が決然其の當面の敵に向ひ攻撃前進するの通報に接し今は守勢に在るべき時に非ざるを知り、第一軍と連繫し主力を以て之に策應し攻撃せんとす。

正午迄の敵情(要圖參照)

1、右側方面

九時三十分頃敵歩兵約七大隊下柳河子、三家子の線を越へ南進し近衛、第二師團は此の敵に對し攻撃に轉せんとす。

敵歩兵四、五大隊下燒達溝附近の高地附近

に現出し其の砲兵二中隊は三家子東南に又一中隊は下燒達溝附近に在り。

□、左側方面

第五師團の戦闘未だ其の局を結ばず大、小范家屯及大河南の敵と交戦中。

ハ、師團當面

十一時頃歩四大隊を下らざる敵は三塊石山及大勾附近に向ひ前進し歩約一大隊は三塊石山及其の東南高地に互り朝來防禦工事中なり。

3、師團長の處置

即ち師團長は十四時十分右翼隊(歩二〇、歩三九聯隊)をして第二師團の左翼に連り古家子、小堡の線に向ひ攻撃前進せしめ野砲第十の一大隊、同十四聯隊の主力を以て此の攻撃援助せしむ。

左翼隊(歩十、歩四十聯隊)は概て現在地附近に位置せしむ。

騎兵隊は左翼に在つて警戒。

師團豫備は東後屯に前進せしむ。

三、歩兵第三十九聯隊の攻撃

右翼隊第一線たる歩三九聯隊は先づ小堡及其の以東の地區に向ひ前進せむと欲し第一大隊は小堡に第三大隊は右方に展開し第二大隊を豫備とし十五時第二師團の左翼旅團に連繫し貴子山東南高地脈

を越へて前進を開進す。

敵砲兵殊に斜右大回北端の約一中隊及三塊石山東北側の約二中隊は猛射を浴びせたるも各大隊は適置疎開して前進十六時頃小堡南側の小流の線に達す。

此の時三塊石山及其の東南高地附近に據る歩兵三大隊餘の敵兵射撃を開始(距離約八百—千米)我が砲兵は此の歩、砲兵を制壓し歩三九聯隊は敵火を冒して前進を繼續す。

地形の關係は行進方向を左に偏倚せしむ。

聯隊正面の地形は地隙の關係上直進するを得ず已むを得ず左方向に漸次偏して前進するや右第二師團との間に空隙を生ずるに至り右翼隊長は其の豫備たる歩二〇の第一大隊を此の中間地區に増加し同大隊は敵火を冒して一進一止し所命の線に達し右第二師團の攻撃を援助す時に十六時三十分。

歩三九聯隊は小堡及其の東方小流の線に達し三塊石山一帯と敵を攻撃中なるも敵兵力少くも我れに優も而かも瞰制せられ損害多く攻撃意の如く進捗せず。

師團左翼隊の一部も歩三九に連繫し攻撃前進中なりしも左第五師團の右翼孤樹子より以北に前進せざるに因り自然停止するに至る。

師團長の決心(十六時四十分)

師團長としては全軍當時の情況に稽へ必勝を期せし攻撃動作も敵陣地前數百米の地に達せしに過ぎ

ずして日没に迫り是夜師團の全力を擧げて三塊石山及其の東方地區に向ひ夜間攻撃を決行するに決し十六時四十分將に命令を下さんとする時軍司令官より左の通報を受く。

右の第一軍は夜に入るも攻撃を繼續する決心なり依て第十師團は第二師團に連繫し攻撃すべき訓令を受く。

四、師團全力を以てする夜間攻撃

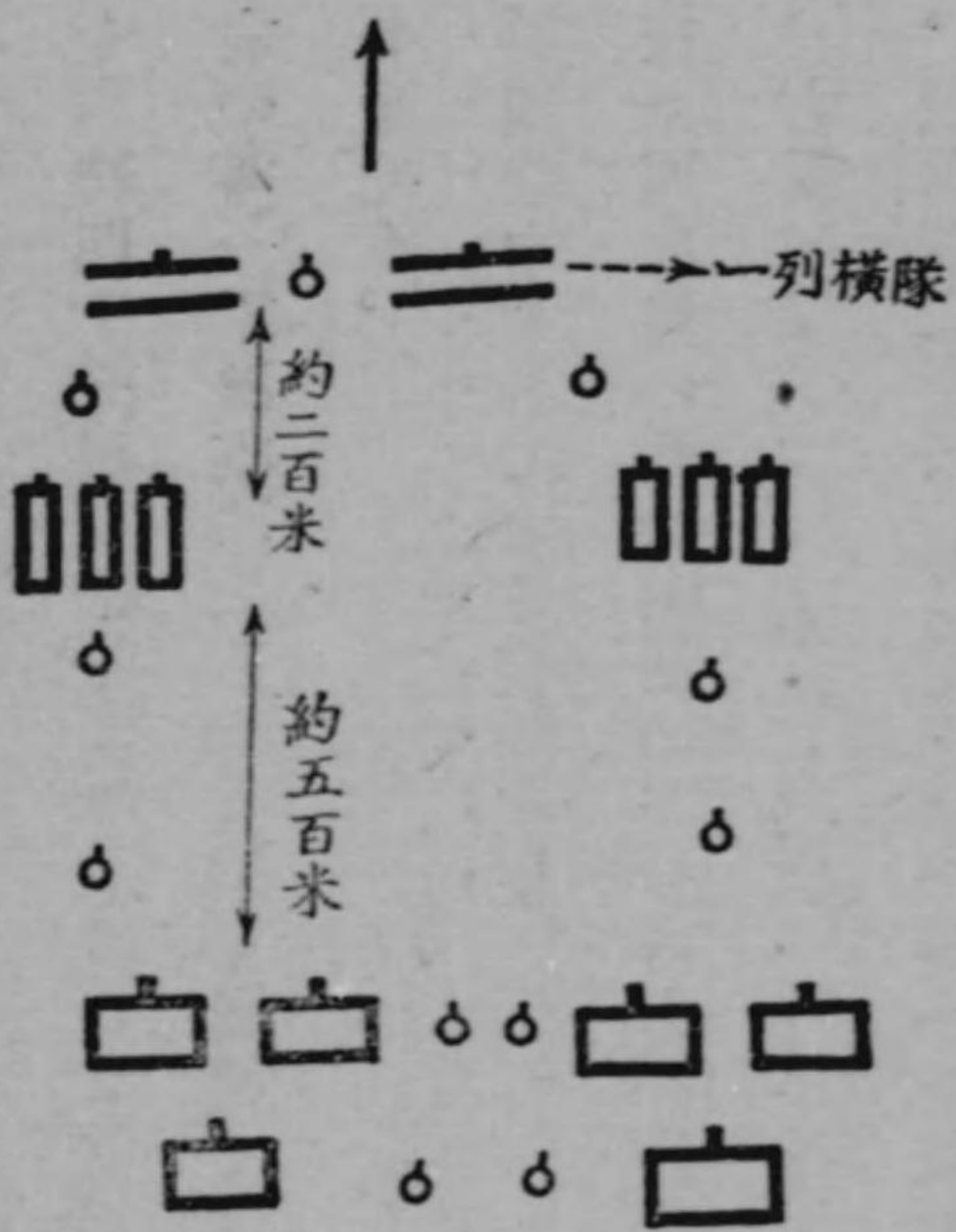
今夜々間攻撃の爲師團長の下せる命令の要旨

- 1、右翼隊(歩二〇、歩三九)は一時小堡以東の線を出發し北大山に向ひ夜襲すべし。
- 2、左翼隊(歩十、歩四十)は一時小堡以西の線を出發し先づ三塊石山を奪取したる後更に北大山に向ひ夜襲すべし特に左側を警戒すべし。
- 3、兩翼隊の境界は小堡西端—大回北方鞏部を連ぬる線とす。
- 4、後備歩十旅團は豫備隊一時貴子山東麓を發し兩翼隊の中央後を前進。
- 5、工兵大隊は豫備隊の直後前進。
- 6、砲兵隊は左の如く位置すべし。

イ、第十五の一大隊……貴子山東方附近にて明日天明後射撃し得る如く陣地占領。

ロ、砲旅司令部、砲十五(一大隊欠)、砲十(一大隊欠)、砲十四の第五中隊は貴子山南方谷地内。

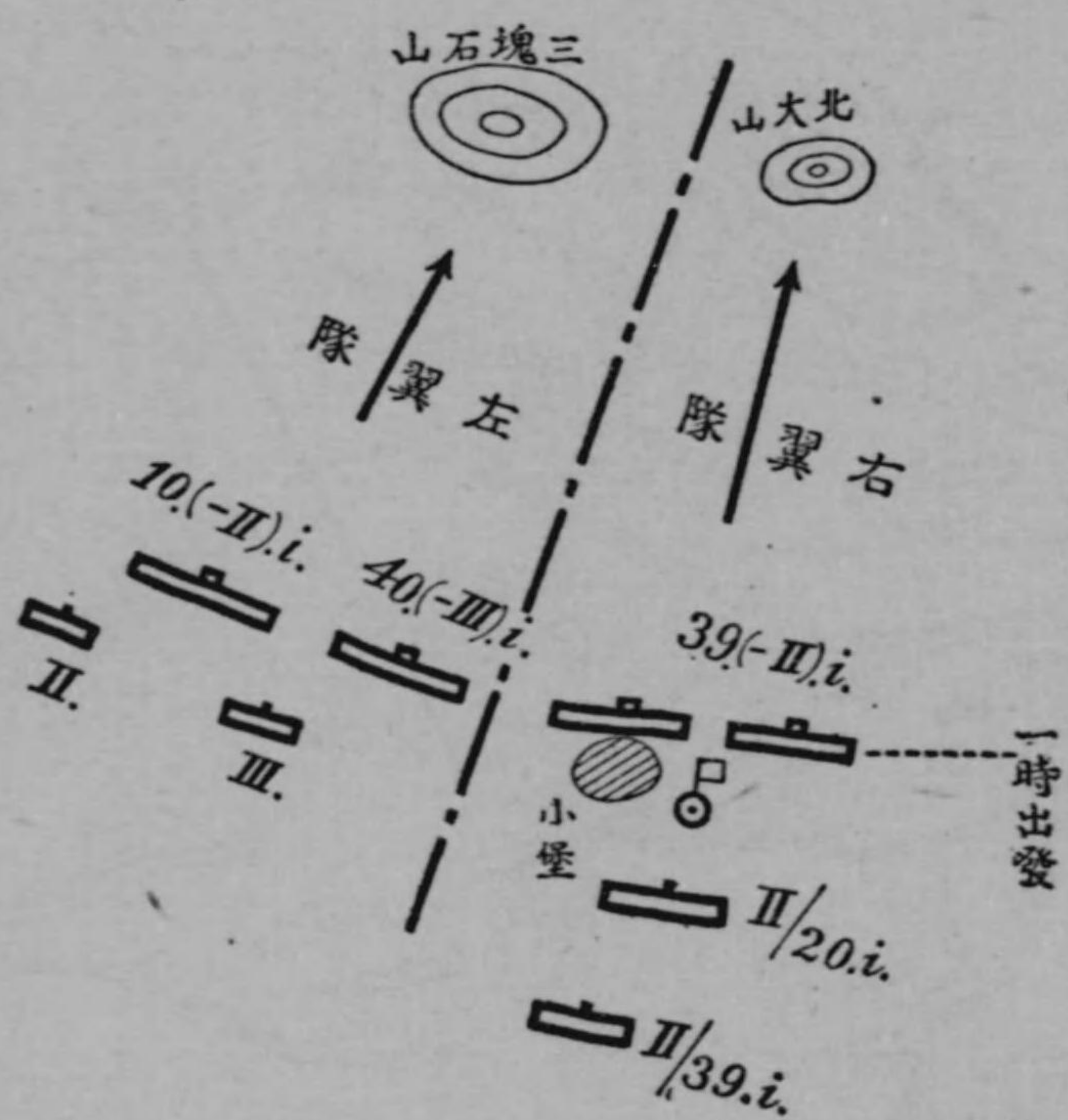
- ハ、砲十の第一大隊、砲十四(一大隊と第五中欠)……本日の陣地。
 - 7、騎兵隊は貴子山南方谷地内に位置すべし。
 - 8、師團長は一時貴子山に至り後豫備隊と共に行動。
- 夜襲に關する規定(各隊長集合會見の上決定せし合同意見とす)
- 1、第一線を二列横隊、第二線部隊縦隊横隊、豫備隊は聯隊を横接したる二線の縦隊横隊。
 - 2、各隊は左右の間隔を成るべく閉縮し其の各線の距離は第一、第二線間約二百米第二線と豫備隊との間約五百各隊は左右前後に密接せる連絡兵を配置。



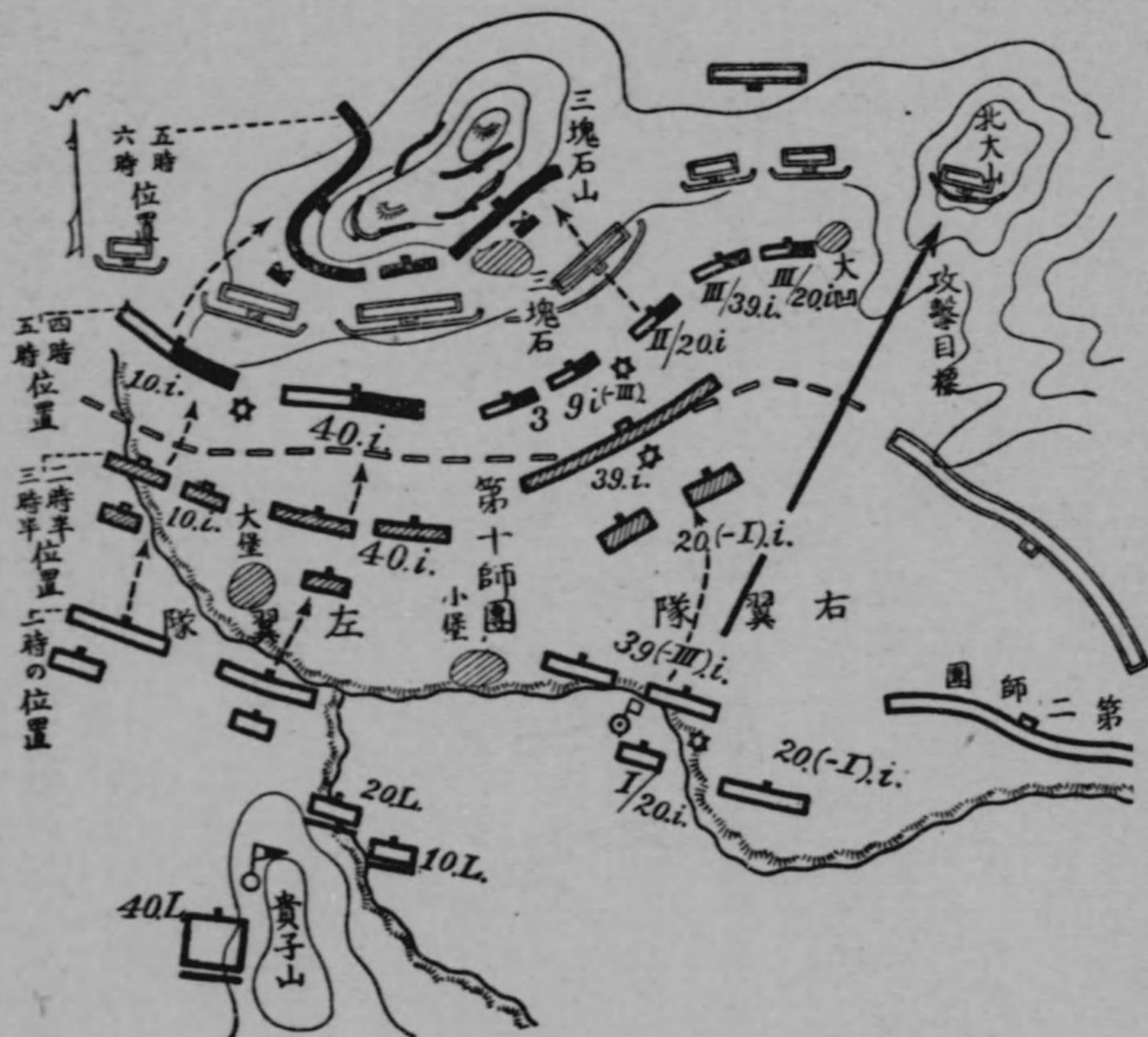
- 要するに右二項を要圖示すれば上の如し。
- 3、第一線は萬止むなき場合に於てのみ射撃するこ
とを得第二線及豫備隊は射撃を嚴禁す。
 - 4、師團全部外套を脱し左腕に白布を纏結す。
 - 5、各線共〇時三十分迄に前記の隊形を整へて指定
の距離を保持しあるべし。
 - 6、一時を期し貴子山東南高地の北端に烽火を擧ぐ
各隊は之を合圖に運動開始。

命令、規定は各隊長を貴子山附近に招致して下達せられしものにして其の招致せられしは十七時四十分にして下達を終りしは十八時三十分にして日既に没し四邊暮色暗憺たり。

兩翼隊の夜襲部署



五、夜襲の實施



1、左翼隊の夜襲(要圖参照)

歩兵第四十聯隊の攻撃

二十三日三十分頃迄に夜襲の諸準備を完了し歩四〇聯隊は小堡西北端にて歩三九と連繋して第

二、第一大隊第一線、各大隊は全中隊を横隊とし左の如く横接し
 第三大隊を豫備として中央後に横隊となして運動開始を待つ。
 然るに歩十聯隊の到着遅れし爲十二日一時四十分始めて進前を
 開始せり。

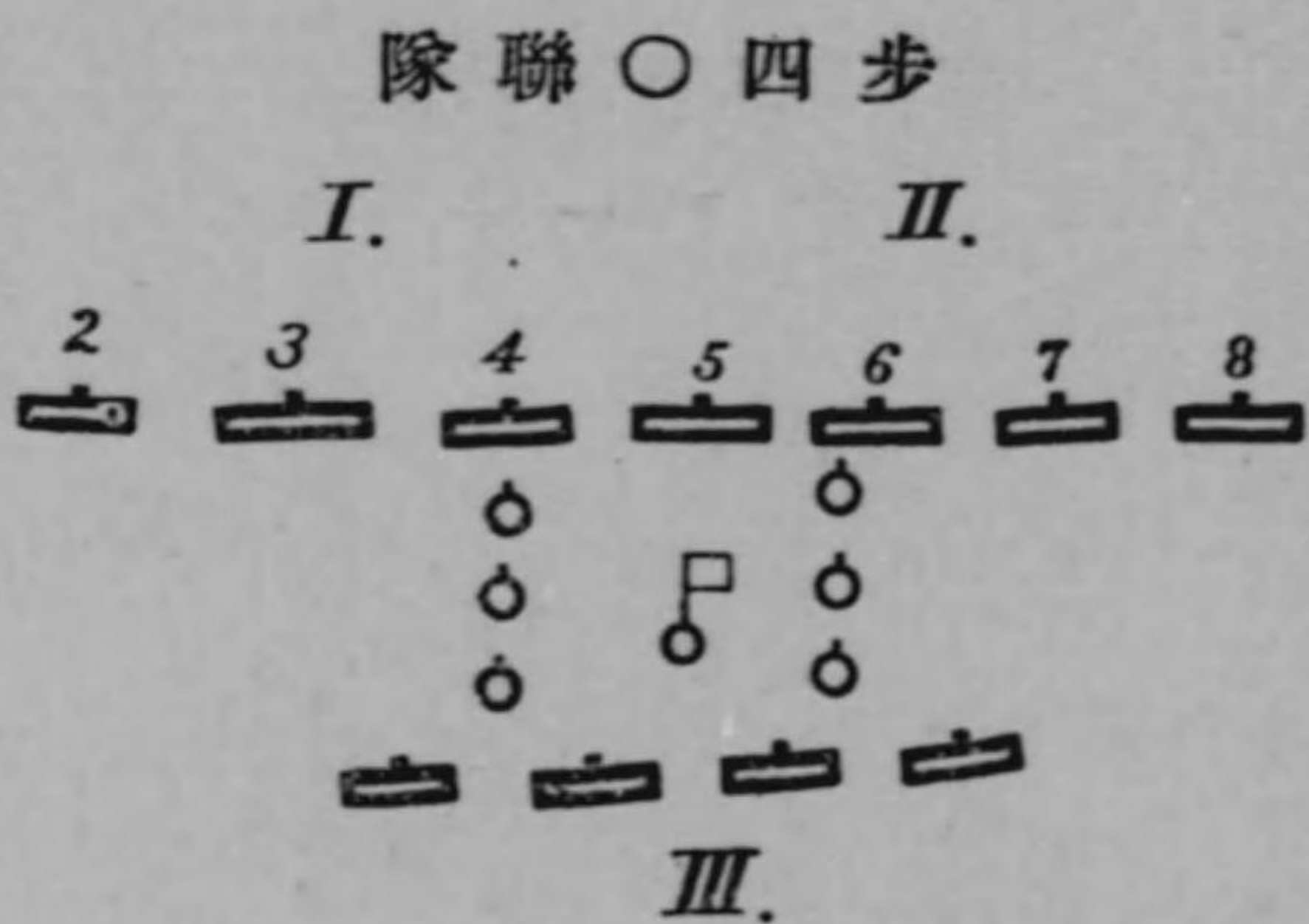
第二線たる第三大隊は第一線より十乃至二十米毎に連絡兵を配
 置し約三百米を隔てて第一線に跟随す。

第一線部隊の戦闘状況

第一線中隊は前進すること十數分にて三塊石山西南麓の敵前約
 三百米の線に達するや敵の射撃を受け是に直ちに應射す。

右第一線たる第二大隊は屈せず前進を繼續するや右側敵陣地より急に射撃を受け最右翼の第八
 中隊は右に方向を變換して此の敵と相對して停止す。

第七中隊及第八中隊の一小隊は三塊石村の敵前五十米に肉迫して熾に銃火を交へあり。



第五中隊は獨り突進して三塊石寺院の南側鞍部に直進し敵前十米に迫り大隊長に報告し敵は寡
 少なり突撃の好機逸すべからざるを以てせり。

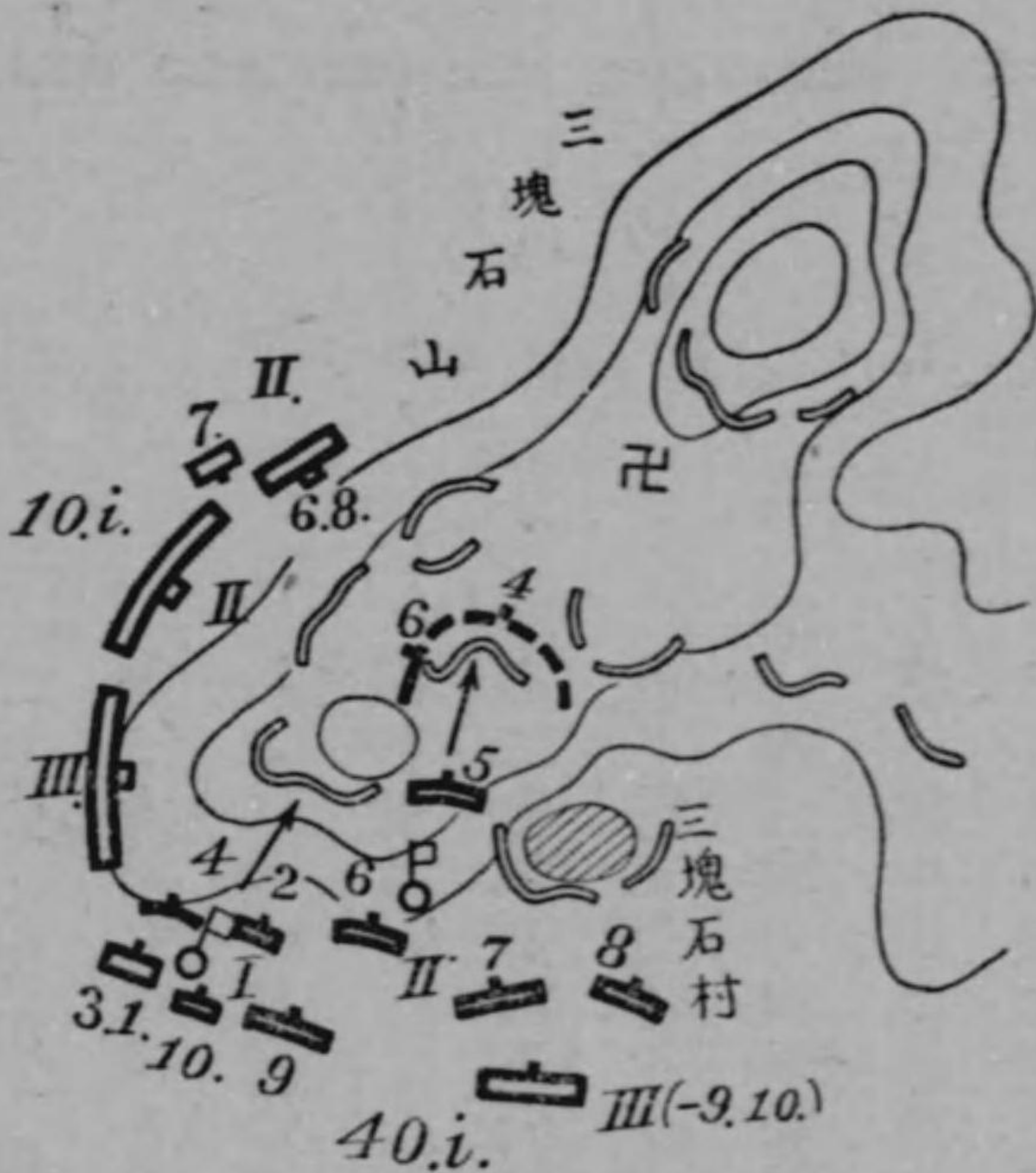
大隊長は第五中隊の後方第六中隊の附近にあり左第一大隊が依然として停止射撃を繼續せるを
 知り同大隊に此の情況を通報し第五中
 隊の線に進出を要求せしも容易に到達
 せず。

是に於て大隊長は機を失せんことを虞
 れ更に第六中隊を以て第五中隊を赴援
 し共に突撃に任せしむ。

當時三塊石村の敵兵頑として動かず殊
 に三塊石山の敵は嶮を待のみ頗る頑強
 に抵抗せしも第五中隊長は第六中隊の

左翼隊夜襲戰圖要圖

十日一夜



到着と共に直ちに突入して寺院鞍部の敵陣地を奪取す時に四時二十分。

然れ共敵は依然其の側巔頂を固守し頑強に抵抗す。

左第一線たる第一大隊

三塊石村南方斜面に數層に構築せる散兵壕より猛烈なる射撃を受けしも之を冒して漸次敵に近
 接し又所屬大隊長と連絡を失ひたる第二線大隊たる第三大隊の第九、第十中隊を併せ指揮し敵
 の第一線を奪取し第二、第四中隊は續いて山上に突撃す。

此の時に第五中、第六中隊は既に寺院の南の鞍部附近の敵陣地を奪取しありしたため敵は退路を
 失ひ進退谷まるも尙ほ山上の岩窟内に在りて依然抵抗を持續して射撃を中止せず山上は彼我混
 淆として萬字巴の如く交戦しあり。

第二線第三大隊夜暗の爲各中隊離散す
 夜暗の爲第一線と連絡を失ひ且各中隊多く離散して大隊長の手裡を脱し僅かに第十二中隊と第
 十一中隊の一部を掌握して直進し偶然にも第八、第七中隊と會し五時後歩二〇〇の來著と共に
 協力して三塊石村に突入せり。

歩兵第十聯隊の攻撃と隊伍混亂
 命令受領遅れたるため聯隊が所命の地點を出發遅れ従つて夜襲の準備も十分ならず此の命令の
 遅れたるは左翼隊長たる旅團長が聯隊長招致の爲に派遣せし傳騎途中道を誤り多くの時間を要
 したる爲なり。

聯隊は辛うじて大堡附近に達するや同地西方にて右より第三、第一大隊の順序に併列し各大隊

は全中隊を第一線とし横隊に併列し一時三十分前進を開始す。

村落内にて忽ち各隊撞著を起す

かくて聯隊は大堡村落を濾過するに際し暗黒と統制を缺き各中隊互に撞著混淆し隊伍爲に大に亂る。

右の如く歩第十聯隊(第二大隊欠)は既に發進の當初に於て隊伍の混亂を來し同村落進出後間もなく前面より敵火を受け聯隊長又重傷を受け殆んど統合せられざる狀況となり聯隊長代理は一時大堡東側の地隙内に停止して隊伍を整頓し第二大隊の來著を待つに決す。

第二大隊暗黒中に彷徨す

是より先き第二線たる第二大隊は二十三時四十分始めて聯隊命令を受領し各中隊長を招致して諸準備を命じ又前哨撤去に時間を要し十二日〇時二十分出發せしも夜暗の爲聯隊主力と連絡すること能はず因て三塊石山に向ひ直進中偶々水流を徒渉して斷崖を攀登するや忽ち三塊石山の關中に聳立すを望み同時に進路の南方に當り犬の吠ゆるを聞き同方面に我が友軍の行動しあるを豫想して南方に轉進し二時大堡北端附近に於て聯隊主力と連絡し其の左翼後に第二線と爲れり。

敵陣地と認めしは一の森林なり

當時第一線の前方に銃聲屢起り數多の輕傷者大堡に向ひ退却し來りしに依り聯隊長代理は躊躇せば三塊石山の奪取に參與し能はざるを恐れ第六、第八中隊を第一大隊の左翼に増加し突撃喇叭を吹奏し突撃に移れり。

然るに曩きに地隙内より三塊石山と認めしは誤りにして一の森林に過ぎず而して喇叭を吹き喊聲を揚げたる爲敵より猛烈なる彈雨を蒙り其の閃々たる火光正面に互り而かも其の中央部に當り數層の重疊せるを見始めてあれこそ慥かに三塊石山なるを覺り應射することなく火光を目標として四時同山麓の敵前二、三十米に達し猛烈なる射撃を開始し且第一大隊をして第三中隊の主力を以て同山西麓より敵を包圍せしむ。

第二線たる第二大隊の行動

第二大隊(第六、第八中隊欠)は目標の前方百米餘に達せしも各所に喊聲を聞き且山上は友軍の喊聲あるも我が聯隊の第一線の所在明らかならずしが故に一旦停止し連絡せんとする時大隊長は殞れ兩中隊長獨斷前進し第五中隊は第一線に増加第七中隊は左翼に増加せり。

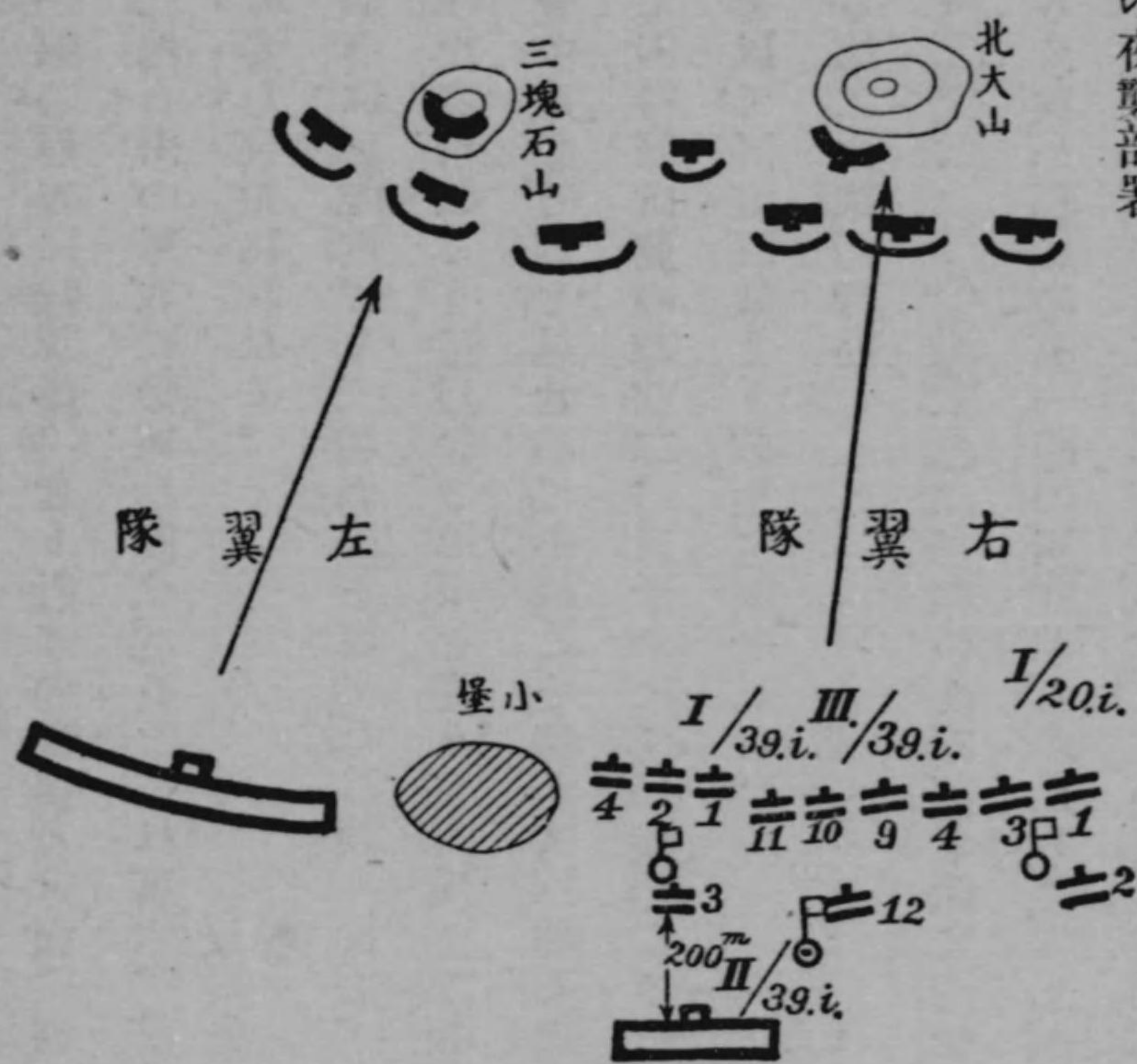
五時頃第一線諸隊は一齊に山上の敵に突撃を執行し敵の第一陣地を奪ひ尋で岩山の間を匍匐攀登せる一小隊は突如敵の背後に進出して岩窟を死守せる敵に突入し天明と共に三塊石山一帯は我が軍の有となるさすが勇敢なる敵は至る處に屍々累々として横はり降伏せしも將校以下僅か

に四十四。

□、右翼隊の奮戦

歩兵第三十九聯隊の激闘死戦

1、聯隊の夜襲部署



2、前進状況

一時出發するや然るに土地起伏し目標隠見し動もすれば各隊の連繫を失せんとするに因り屢々停止して隊伍を整頓し敵の抵抗を受くることなく小堡東北約一キロ米の高地の敵の舊陣地に達し尙北大山を目標に前進を繼續す。

此の時二時頃左側後三塊石山方向に急激なる砲銃聲及喊聲を聞き左翼隊が敵陣地に於て交戦せるものと判断し暫く停止して情況の推移を待つ中第一線たる第三大隊(十一中隊欠)は連繫を失し暗中索いれども不明なり。

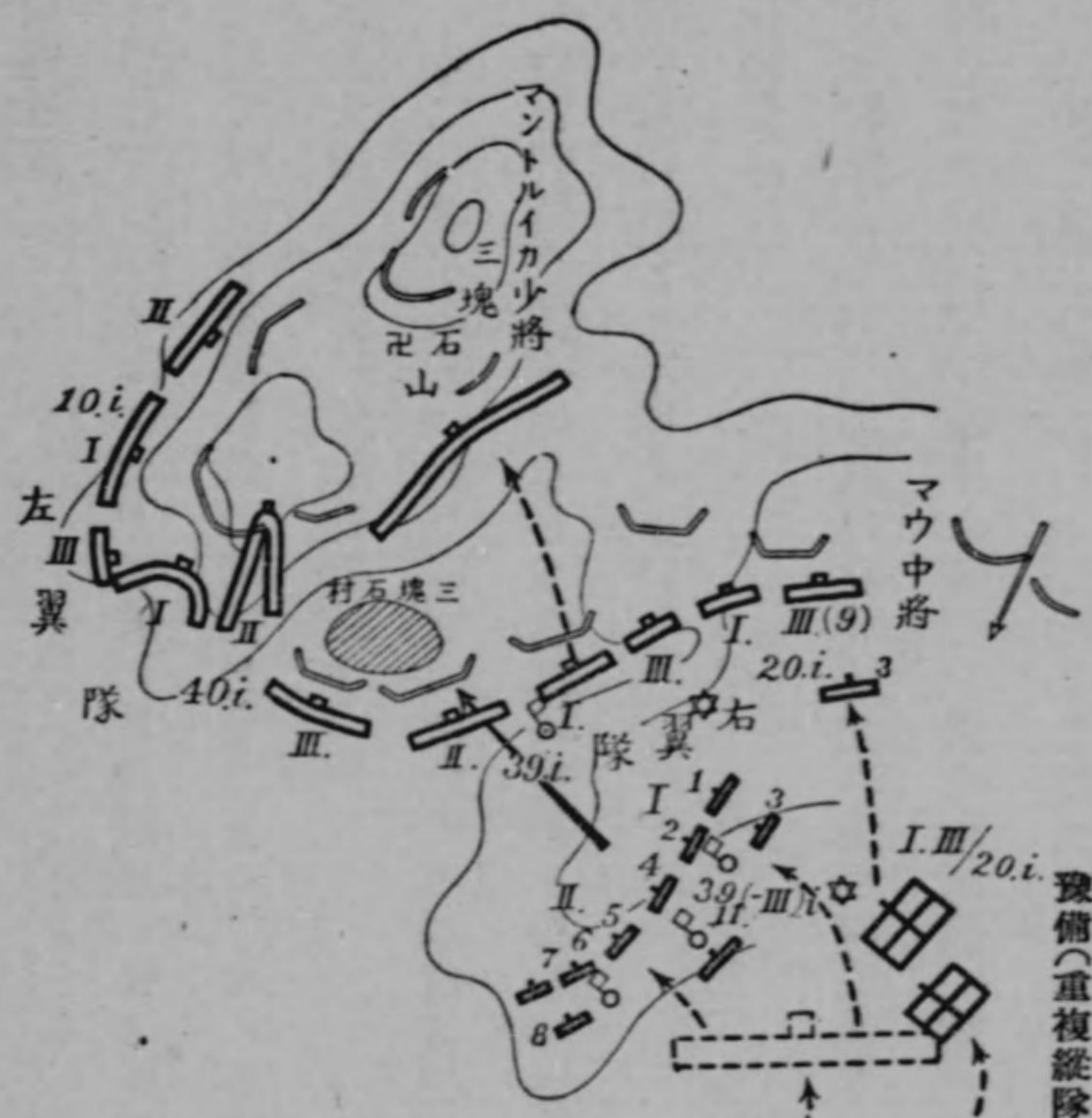
右翼隊長の決心

此の日右翼隊より第二師團の攻撃援助の爲派遣しありし歩二十聯隊の主力は夜半一時に至るも情況に變化なきを以て聯隊長は獨斷を以て所屬第十師團の夜襲に参加するに決し一部の連絡隊を残し主力を以て歩三九聯隊の右に増加し北大山に向ひ前進を開始す。

然るに三塊石山方面に激烈なる銃聲起り然かも漸次南方に移るを知り三時頃自ら第二大隊を率ひて依然第二師團を援助しつゝ第三、第一大隊をして三塊石山附近の敵を攻撃せしむることにせり兩大隊は連繫なく偶然にも敵の射撃に依り攻撃目標に對し協力して三塊石山を攻撃するに決す。右翼隊長は三時三塊石山の銃聲止まず左翼隊の攻撃未だ奏功せざるものと判断し北大山に向ふこ

とを斷念し協力して三塊石山附近の敵を撃攘するに決す之が爲北大山方向に對し右側を暴露する虞れ強大なる豫備を控置するの必要を感じ歩二〇聯隊の第一、第三大隊を豫備し歩兵第三九聯隊を第一線とし攻撃目標を三塊石山に示し直ちに攻撃前進せしむ。

歩三九聯隊長安村範雄は急に前進方向を左に轉換し概ね左記隊形を以て前進を開進す。



豫備(重複隊の二線)

備考

一、當時歩三九の第三大隊(11欠)は連絡を絶ち所在不明なり

壯烈なる夜襲

三時三十分新攻撃目標に對し方向を轉換し直ちに攻撃前進に移り四時頃歩三九聯隊は三塊石山東側併に部落より敵の猛火を受けしも應射せず躍進し敵前五、六百米に達するや當時友軍たる左翼隊は敵陣地に肉迫し居り夜暗同士討ちを顧慮し號音を吹奏し日本軍たるを表示するも依然として射撃するに因り愈々突撃を決行せんとす。

此の頃曩に連絡を失ひたる歩三九の第三大隊も來り會し第一大隊の右翼に連り益々敵に近接し猛烈なる射撃を開始し豫備たる歩二〇の第一大隊も又右に増加し全力を擧げて山上及部落を死守する敵を攻撃する我が軍死傷續出し東天漸く紅を呈し戦況意の如くならず。

安村三九聯隊長は速かに敵陣を突破するにあらざれば爾後の損害益々甚だしきと右翼方面よりの敵の逆襲を顧慮し右翼隊長に意見具申して斷乎突撃を行ふに決し全線擧つて突撃に移れり。

歩三九、歩二〇兩聯隊は村内に突入せしも敵兵各家屋、土壁に據り頑強に死守し安村聯隊長も遂に腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げ將卒志氣益々突進せり。

旅團長傷き遂に三九の第三大隊長旅團を指揮し依然として山上及山腹の敵は瞰射して止まず各中隊は相前後して峻崖を攀ちて肉迫し格闘の後遂に全山を奪取せり。

然るに敵兵は尙ほ村落の三、四の堅牢なる家屋を死守し我が兵を狙撃し斃るるもの多し我が部落

内に混淆し暫らく指揮の統一を缺き敵の恢復攻撃に對し危険の状態にあり。

於是旅團副官の進言に依り混成約二小隊を以て村内に闖入し家屋に火を放ちて守兵を驅逐し八時頃漸く其の大半を占領せしも全く我が有に歸せしは實に正午頃なりき。

本戦闘に於て歩三九聯隊は感狀を授與せらる。

此の戦闘に於て失ひしもの戰死將校以下三百十二名、負傷一千百七十八名に達せり。

其の二 本戦闘より得たる教訓と原則との對照

第十師團の夜襲は其の結果より見れば或は成功と謂ひ得べきも其の實質は經過の示す如く彼我兵力の差甚だしく又我が軍の志氣旺盛にして攻撃精神の潑刺たるに歸せざるを得ず。

徐ろに其の戰跡を観察する時は非難論議の事尠からず今其の重要なものに付き聊か述べんとす。

一、夜間攻撃計畫に就て

夜間攻撃の部署は巧妙複雑を避け實行の確實なるを要す而して軍隊をして攻撃地區の地形及敵陣地の状態に通曉し準備を周到ならしむるは攻撃奏功の爲必要缺くべからざる要件とす(作令一四八)。畢竟夜間行動の害とする錯誤を避けんとする爲なり而して此の事たる準備時間の僅小なる場合に於て殊に然りとす。

本夜襲の計畫は大體に於て單簡にして實行容易なるが如きも右翼隊をして右第二師團の攻撃に援助せしめつゝ尙ほ北大山を攻撃目標に指示するが如き又は北大山を兩翼隊にて包圍せしめんと企圖せしが如きは全く夜間攻撃の要領に合せざる感あり。

而して實行部隊たる兩翼隊はただ左右の連繫にのみ重きを置き特に進出すべき地線なり地點を明示せず。

此等の影響は右翼隊が前進途中三塊石山方向の銃聲激烈なるに自然誘引せられて本日^の如く方向を轉換して左翼隊の攻撃に協力せんが爲に自己の攻撃目標を放棄して此の結果を來せしにあらざるか作令一五〇「大部隊の攻撃に在りては各部隊に特に明確なる各個の目標を示し第一線各部隊の協同は……期し得る範圍に止まるものとす」即ち自己目標に一意邁進してこそ眞の協同が有る。

二、夜間攻撃隊形に就て

「夜間敵に近接する中隊は行動容易なる隊形にて……」(歩操二二三)。

「夜間攻撃の爲大隊は通常第一線と豫備隊とに區分す而して縦深深く敵陣地を奪取せんとするときは二線の攻撃部隊を設くること少からず此の場合に於ても所要に應じ豫備隊を設く」(歩操五四〇)。

然るに本夜襲隊形は悉く横隊を採用せり而して其の結果は戰況に述べたる如く歩十聯隊は大堡の村落内で既に隊伍混亂し各自撞著して一時停止して整頓するに非らざれば統一困難となり然も此の際

前方に屢、銃聲起り躊躇せば三塊石山の奪取に乘與する能はずとなし突撃に移れば豈計らんや三塊石山と思ひしは一森林なることを知り次で數百米間敵の射撃下を駈歩にて前進し爲に隊伍混亂甚しく始めの横隊は何時となく側面縦隊に變じ第二線豫備隊も亦其の過半は第一線の渦中に投じ實際山脚に達したる時は統一したる指揮を行ふ能はざるが如き狀を呈せり。

又右翼隊方面も波狀地を行進するに當り隊伍錯亂し甚だしく行進を澁滞せしめたり。

更に此の日敵前至近の距離にありて突撃に任せし歩十聯隊の第十一中隊の如きは聯隊の最右翼に位置せしが突撃の號音と共に大呼前進し當時聯隊の突撃目標ならざりし爲左第八中隊と連繫しつゝ敵前三、四百米を前進する間に左中隊と甚しく接近し横隊を以て前進せし中隊は遂に側面縦隊に變ずるの已むなきに至れり。

要するに此の日の夜襲隊形は横隊の不利なることを自覺せしめたり之れ陰曆三日の深夜に敵前二、千米内外より運動最も困難なる横隊を以て前進せし結果にして隊伍の動搖するは當然なり。

要するに夜間攻撃の隊形は一に狀況に依り差あるも敵に遠き間は運動容易なるものを愈、至近の距離に達せんとせば劍を多く用ひるに容易なる隊形を選択するを本旨とす。

茲に考慮すべきは夜間の攻撃は本戦例にもある如く勇敢なる幹部の指導に従つて爾他の者が續行することとなるが通常にして自然尖銳形三角となるが如き體驗を有す。

然しながら如何なる場合の突撃でも防者は必ず射撃を以て之に對抗し陣地前に射殺せんとするは通常なり故に密集的は損害多きが如きも突撃は瞬間的にして防者の心裡も決して平靜沈著して一發一殺の効果を期し得るものにあらず。

結局夫々勇者の突進に追隨し遅れじと踵續して突入するのが自然なれば其の隊形は一に指揮官の狀況判断に依り決定せらるべきものならんか。

三、各級指揮官の獨斷專行に就て

大部隊の夜襲としては準備に乏しく且晝間殆んど何等の施設もなく甚しきは出發直前の夜半に命令を受け盲滅法に突進し然も聯隊主力の位置さへ不明の儘行進を起したる大隊あり。

幸ひに三塊石山に三旅團が蒐集して攻略はしたものの各隊各個に行動せし形跡ありしも何れも任務に邁進し至誠攻撃的に解決せしは多とするも獨斷專行について見るに

- 1、歩十聯隊長代理は森林を山と見誤り突撃せし際既に第二線の一部を獨斷第一線に加へたり。
- 2、同聯隊第二大隊主力は第一線の三塊石山を攻撃する間情況不明の爲一時停止しありしが此の間大隊長戰死するや兩中隊長は獨斷にて第一線に加入せり。

- 3、右翼隊長は北大山に向ふべきに銃聲のみに依り左翼隊援助の爲獨斷攻撃目標を變じ方向轉進を行ひたり。

4、後備旅團は右翼隊の轉進を知り且三塊石山方面の銃聲激烈なるに依り斷然其の攻撃を援助するに決し五時二線の隊形を以て銃聲の方面に急進し喊聲を揚げつゝ山麓に向へり。

5、右翼隊に増加せられし後備歩十聯隊は狀況不明の故を以て一時停止し右翼隊が左に轉進せしを知りしも聯隊長は斷獨現地に止まり當面の敵を破り以て其の右翼を掩護するに決せり。

夜間は通視困難連繫又難事なり故に全般の狀況を達觀して適當に判斷して善所することは至難なるを通常とす故に各隊は自己の任務に邁進し眼前の狀況に眩惑せらるることなく如何に不期の戰況に遭遇するも毅然として計畫の遂行に努め臨機應變の手段を採るが如きは之を戒めざるべからず夜間一度發生せし混亂は決して短時間に修正するは困難にして殊に大部隊に於て然りとす。

四、夜間軍隊の行動と錯誤

夜間敵に近接するに方りては大隊長は自ら大隊の先頭に立ち一部隊を手裡に存し大隊の運動を統一指揮す(歩操五四五)。

夜間方向維持の爲には成るべく地物に依り其の方向を定め或は豫め前方若しくは後方に行進方向の基準を標示し……(歩操五四六)。

夜間の連絡は特に確實なる手段を用ひ且企圖秘匿の爲通信の濫用を戒め又本部及各中隊をし……(て歩操五四七)。

精銳にして夜間の行動に習熟せる軍隊は能く其の害を除きて利を收め……攻撃の奏功を期し得るものなり(作令一四六)。

本夜間攻撃に於て稍、企圖を秘匿する夜戦の主義に反するは

イ、過早の射撃

ロ、連絡の不十分

ハ、左翼隊の隊伍の撞著

ニ、號音の吹奏

夜間射撃は月明、積雪の場合は兎も角暗澹たる夜蔭に而も遠距離より敵に應射するが如きは其の效果の尠きは勿論なるが第一に一度敵前に停止して射撃を開始せば一舉に突撃に移らんとする氣勢を挫折することは明瞭なる過失なりされば習熟せる軍隊は決して裝填せず又指揮官は之を禁じ唯だ劍尖の刺突のみである。

第二の不利としては我が軍の位置を火光により敵に標示するの不利あり従つて敵の銃砲火の正確を招來す。

第三の不利は我が友軍の行動を掣肘して誘引するに至ること之れなり。

本夜間於て第十師團の三箇旅團が一小三塊石山に全部吸引せられしは全く左翼隊の射撃に歸せざ

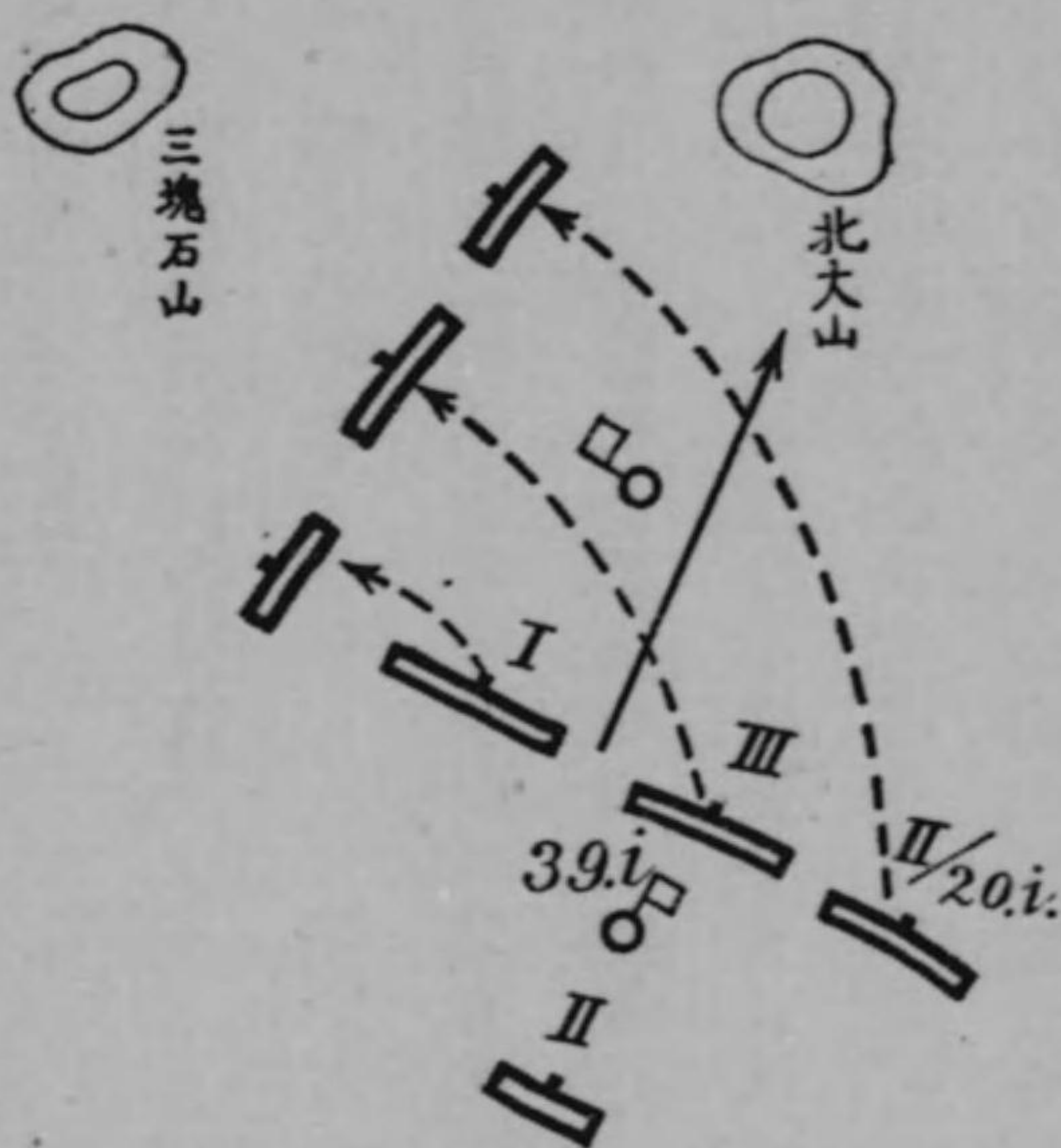
るを得ず。

聽覺銳敏となれる軍隊は自づと銃聲の方向に向くが如し。

例へば右翼隊は元來北大山に向ひし隊形と方向は斜右向で前進中の聯隊が急に九十度の方向轉換をなすに當り暗黒未知の地形にて約三十分間に手際よくなし遂げたるは一寸不思議の運用にて察するに北山に向ひ前進しつゝも自然左側の銃聲に誘引せられ行進方向を左に變じありしに非らざるか。

要するに夜間攻撃に射撃は禁物なり之歩操典二一〇「…裝填は之を禁ず…」とある所以なり。

連絡の不十分



其の原因は各梯隊距離の大なりと各中隊前進隊形の不適

當なりしは今更述ぶる由なきも要は夜間行動の不慣と上下一貫の脈絡精神の缺如せる結果とも謂ひ得べし。

殊に第一線の隊形は結局犬牙錯雜して後方部隊として連絡の方法なく横の連絡は隊形の紊亂と共に自然に絶へたる爲ならん。

突撃に射撃、喇叭吹奏、喊聲は全く我が企圖を暴露し敵をして有利に抗戦せしむるに過ぎず然し敵陣地を奪取後其の直後瞬間に發する自然の氣勢は實際上止めんと欲するも自然發するものなり。

五、夜間攻撃の準備

作令一五一、同一五三、歩操二〇九、同二一一、同五四一、同五四五、同五四六の各條項に夜間攻撃の準備に關し明示せられあり。

殊に大部隊に在りては十分の準備時間を得るに非らざれば殆んど其の目的を達成し得ざる事多し。殊に夜間の混亂より生ずる各種の障礙を豫め排除する爲必要の準備は是非共之を遂行せざるべからず。

攻撃目標、方向の維持、進路の標定、連繫の保持、靜肅行進、識別、奏功後の處置、瓦斯に對する警戒、鐵條網、側防機能の迅速なる破壊若しくは制壓、成し得れば戰車の使用法等の處置は多々あるべし。

然るに本戰闘參加の部隊は殆んど之に關する準備なく第一線各隊長が令下諸隊に命令を下達せしは日没後にして甚しきは夜半に及び單に出發の爲烽火の合圖(之位拙なる方法はなからん)識別の爲白布を纏ひしに過ぎず。

右翼歩三九聯隊は若干の準備と行動も概して順調なりしも左翼隊の如きは全く準備なく闇から闇に

戦ひ從つて行進滞し隊伍紊亂し甚しきは森林を敵の山と誤認して眞面目に突撃せるが如く毫も怪むに足らざるなり。
要するに大部隊を以てする夜襲の困難なると軍隊の習熟せると否とは大に吾人に教訓を與へしものなり。

第五篇 防禦

第一章 防禦に關する原則解説

其の一 防禦の新意義

一、防禦は如何なる場合になすものなるか

作令の精神より觀すれば防禦は我が軍の信念として濫りに行ふべきものにあらざる之を行ふは他に手段なく眞に止むを得ざる場合に限るものなり。

從來の防禦の原則は主として攻撃を企圖せる(攻撃防禦)防禦に就き記述せられあしが本作令に於ては前記の趣旨に即應し著しく優勢なる敵に對し辛うじて防禦の最小限度の目的を達成し得るに過ぎざるが如き極めて困難なる場合を標準として記述せられたり。

勿論從來の如き防禦(攻勢防禦)を行ふことをも否定せられたるにあらざるを以て作令一九〇に「攻勢を企圖する防禦」として明示せられあり(作令一六二)。

二、逆襲の意義

逆襲とは防禦に任ずる軍隊が其の陣地前に於て敵兵萎靡混亂せる場合に於て敵の攻撃威力を破推し

て之を撃滅し若しくは我が陣地内に侵入するか又は我が側背に侵入したる場合之を撃滅する爲に行ふ攻撃動作を謂ふ。

從來の攻勢を企圖する防禦が強大なる豫備隊に依り豫め企圖しある時機に斷乎として攻撃に轉ずるのとは時に局部的に於ける動作は似て居る事あるも根本の目的が違ひ逆襲は攻勢移轉の誘因をなすのでなく敵の攻撃を破摧撃滅するにあるを本旨とする。

逆襲の方法

逆襲動作は我が全火力(歩兵重火器、野、山、重、砲等)の援助の下に歩兵火力と突撃とを併用して行ふ攻撃動作である。

其の二 防禦主要原則の摘要

一、防禦の主眼

著しく優勢なる敵に對し地形の利用、工事の施設、戦闘準備の周到等物質的利益に依り兵力の劣勢を補ひ且火力、逆襲を併用して敵の攻撃を破摧するにありて攻勢を企圖しあらざる防禦の主眼を明らかに示されたり(作令一五八)。

二、陣地帯(主陣地帯とも稱す)

新防禦の根本方針が明確に示されたるため戦闘綱要(一五八)の精神とは其の趣を異にし防禦を行ふ凡ての陣地中最も重要な部分を主陣地帯と考ふるを至當とし該地帯の前方に於て敵の攻撃を破摧するを本旨とせられたり(作令一五九)。

三、防禦は主動的戦闘指導を緊要とす

防禦は兎角受動の姿勢に陥る缺點がありて行動の自由を失ふに至り易きもなり然しながら全然受動の態勢に陥るは絶對の禁物である。

苟も乗すべき好機を發見せば機を失せず之を利用し要すれば既に築設したる工事も之を棄つるに躊躇すべきにあらず。

我が軍が日露戰役又は今次事變に於て敵の攻勢に對し斷乎として其の陣地を棄て攻勢に出で敵を破摧したる戰例は乏しからず(作令一六〇)。

四、防者として特に搜索の緊要なる所以

攻、防何れにせよ搜索は必要なるも特に防者として速かに敵情を搜索し敵の前進方向、兵力區分を確認し且不意の脅威を受けざる爲には極めて緊要なる手段なり(作令一六一)。

其の三 防禦陣地及陣地占領

一、防禦陣地占領の順序と著意(作令一六三、同一六四)

防禦を爲すに決せば敵の遠近に應じて概ね左の處置をなす。

1、陣地占領掩護の處置(通常騎兵或は其の他の部隊にて前方要線占領搜索、警戒)

2、陣地の偵察 高級指揮官自ら行ふ外砲、工兵、其の他の機關をして所要の偵察(陣地偵察は主

として主陣地帯一般の状態特に豫情する敵の主攻撃方面併に我が主力を配置せんとする方面の地形、地區の區分、戰車、砲兵の用法、歩砲火力の配置、豫備隊の位置等)

3、築城材料の整備

4、諸隊の開進(敵眼、特に空中搜索に對し遮蔽)又は分進

5、防禦計畫の策定

戰闘指導の要領、主陣地帯の位置、陣地占領の爲軍隊の部署

要すれば部下指揮官の位置、觀測所の配當、搜索警戒の處置、隣接部隊との連繫、陣地前に在る部隊の行動、逆襲、防空、連絡、瓦斯防護、交通設備、陣地の構築、彈藥及諸資料の整備等(作令一六四)

最も其の精粗は狀況と部隊の大小に依り差異あり。

6、命令下達

二、主陣地帯の構成と其の著意(作令一六五)

主陣地帯は左記要素より成る

歩兵の抵抗地帯

主力砲兵の陣地

其の他の諸設備

陣地選定上の著意

イ、地形に適合せしむること(適當正面を有し歩、砲の火力を十分發揮し得ること、遮蔽を十分ならしむること即ち敵の火力發揚を困難ならしめ特に其の主要なる部分を成るべく敵の地上觀測及戰車の攻撃より免れ得る地域に選定すること)

ロ、歩兵の抵抗地帯と主力砲兵陣地との關係

要は我が歩、砲兵の火力を陣地帯の前方に最も有效適切に協調、發揮し得る如く配置するに在りて一定の準繩を以て示し得ざるも歩兵陣地の縱深、砲兵の任務等を參酌して適當に決定せらるべきものとす。

ハ、敵の戰車に對する顧慮

現代併に將來戰に於て敵戰車の攻撃に對する顧慮は重大なる意義を有す故に勉めて天然の障礙物（列國には水陸兼用戰車あり）を利用する如く抵抗地帯の位置を選定する著意必要なり。

二、敵歩、戰、砲の協同戰闘を困難ならしむる地形について

此れは近代戰に於て防禦陣地に具備すべき一要素となり特に優勢なる戰車の攻撃を豫期したる時は一層緊要である。

さて然らば如何なる地形が本目的達成上有利なるかと云へば具體的に述べ得ざるも要は對戰車壕、地雷地域及其の他の障礙物は敵の正面視察に遮蔽せられ爲し得れば空中よりも印影を與へざるが如く又我が砲兵陣地は地上、空中に對し遮蔽し得る等は其の一例ならん。

三、陣地に具備すべき性能（作令一六六）

イ、射界廣裕、時として偉大なる敵砲火を避くる爲短射界を以て満足せざるべからざることあり（地形上に於ても已むを得ず採用す）。

ロ、主陣地帯の地形

- 1、戰闘の支撐たるに適する地域を含むこと。
- 2、部隊の縱深配偶に適すること。
- 3、良好なる監視觀測所を有すること。

4、對戰車防禦に便にして瓦斯滯留の虞少きこと。

5、其の内部及背後の交通自在にして敵眼に遮蔽すること。

右の項目中(1)の戰闘の支撐たるに適する地域を含むことは作令の新に原則として示されたる所にして畢竟機に乗じて斷然逆襲に轉ずる爲には特に其の逆襲發起を促進すべき支撐地域を必要とする故なり。

6、陣地の翼に就て

現時正面戰闘の靱強性を増加すると共に攻者は側背に向ふ爲陣地の翼を包圍せんと企圖する傾向なり。

故に天然の掩護に托するかさもなくば部隊の配置と火力の利用、工事の施設に依り之を補ふ處置を講ずる必要大なりとす。

四、歩兵火力の配置要領

其の抵抗地帯の前方に於て各種歩兵火器を以て濃密なる火網を構成し且火網外の要點及陣地帯内部をも所要に應じ有効に火制し得る如く設備するに在り（作令一六七）。

而して抵抗地帯の前方に火力配置を定むるは歩兵大隊長にして火網の縱深は通常近距離（六、七百米）となす狀況によりては至近距離（二、三百米）に短縮することあり。

火網外の要點とは主として地形上敵が不利なる状態をなすか又は重火器が現出するか等を豫察して豫め歩兵重火器を以て制壓準備をなす。

陣地内部に對するは主として敵の爲陣地の一部を奪取せられたるとき其の奪取の逆襲に協力する爲と陣地各部の獨立性保持の爲にも緊要なり。

五、砲兵火力の配置要領

敵歩兵に對する砲兵の火力配置の要領は左の諸目的を達成する如くなすにあり。

イ、我が警戒陣地の前方に於ける敵歩兵の行動を妨害し特に我が警戒陣地を攻撃せんとする敵に對して射撃を行ひ以て警戒部隊の戦闘を支援せんとする爲。

ロ、敵が警戒陣地奪取後爲すべき攻撃準備を妨害する爲。

ハ、敵の攻撃準備後攻撃前進に移るや之を阻止する目的を以てするもの、此の火力は歩兵火網の直前及其の内部に最も濃厚ならしむることが肝要である。

六、陣地は若干の地區に分ち適應の部隊を配置す

防禦方針が決定すれば地形と指揮の便否を考慮して之を若干の地區に分ち各地區には歩兵を主とする適應の部隊を配置す(作令一六八)。

地區指揮官の處置(作令一八一)

イ、陣地の編成を完備し且搜索及警戒の處置を講ず。

ロ、地區占領部隊の區分。

歩兵を通常警戒部隊、第一線、豫備隊に區分す。

第一線部隊は歩兵の抵抗地帯に於ける防禦の主體をなす。

ハ、地區指揮官は警戒部隊に任務を與へ其の位置及行動を律す狀況に依りては第一線部隊をして警戒部隊を配置せしめ之を統一することあり。

七、警戒部隊の任務と其の配置要領(作令一六九、同一八一)

イ、警戒部隊は各地區毎に出す。

ロ、敵情の搜索と主陣地帯の掩蔽。

ハ、時に依り其の全部又は一部を以て敵の攻撃を遲滞せしむる等前進陣地占領部隊に準ずる任務を附課することあり。

ニ、警戒陣地は我が砲兵の支援し得る距離に設くるのを本旨とし時に依りては機關銃を以て支援し得る距離に接せしむることある。

成るべく良好に遮蔽し敵の搜索を妨害し我が搜索の據點たる如く選定す。

配置の要領

其の任務、兵力、地形等に依り變化すと雖も通常要點を占領し所要の工事を施し且常に主陣地帯との連絡施設をなす。

要するに一定の形式に陥ることなく、勉めて之を不規に、敵の搜索を困難ならしむるを有利とす。

八、戰車の使用に就て

戰車は通常逆襲用に使用す之が爲當初師團長の直轄として控置し使用方面決定せば成るべく速かに該方面の第一線部隊に配屬す。

戰車を逆襲に使用する要領は目標を示し神速短切なる攻撃を行はしむるに在り。

優勢なる戰車と對戦すべき場合我が戰車著しく劣勢なる場合に於ても友軍の對戰車火力との協調を適切にし敵戰車が其の支援火力と分離し或は兵力を分散せる等不利なる状態を捉へ之に乗ずることを得ば有利の戦闘を交ふることを得るものとす(作令一七〇)。

敵戰車に對する防禦要領

敵戰車は極力之を陣地前に破摧することを勉む然れども陣地内に於ても之に對應する處置を講じ置くこと。

之が爲對戰車防禦施設は概ね左の如し。

イ、陣地前縁附近のみならず陣地内の要點。

ロ、天然の障礙を利用し且巧に對戰車火炮の配置と不足人工障礙。

ハ、豫め隱蔽せる側防機能、係蹄地雷の秘匿設置。

ニ、砲兵を以てする對戰車の阻止射撃、敵戰車に隨伴する砲兵の制壓準備。

ホ、煙幕に依り遮蔽する敵戰車の射撃要領。

ヘ、我が歩兵重火器には勉めて偽裝をなす。

ト、砲兵、司令部の位置は特に選定し適置自衛の處置を講ず(以上作令一七六)

九、對瓦斯處置

イ、適置防護資材を分配し豫備資材及消毒部隊を適當の地點に配置す。

ロ、消毒部隊を最初より必要なる方面に配屬。

ハ、必要により各部隊の氣象、瓦斯勤務を統制す。

一〇、砲兵陣地と其の配備

防禦砲兵の主眼とする所は所望の如く火力を運用するにあり。

之が爲縱深に配置し其の任務に應じ遠戦、近戦何れにも適する如く最後の時機迄其の陣地を變更せざる如く歩兵と協同し十分なる威力を發揚するにあり。

最初主陣地帯の前方に一部の砲兵を配置して敵の近接運動及攻撃準備を妨害せしむることあり。

觀測所の選定

歩兵の抵抗地帯の後方にして所望の地域を觀測し得る地點に選ぶを最良とす。
 夜間、濃霧、塵煙等の爲觀測困難なる場合には要すれば主陣地帯の前方の要點に配置し歩兵の掩護を受く。

高射砲部隊の配置

敵飛行機の行動、戦況等を考慮し上空に對し掩護若しくは秘匿を最も必要とする部隊、場所、時機等を定め之に應じて配置を定む。

一、豫備隊

従來用ひられし總豫備隊、地區豫備隊等の名稱を廢止す。

二、廣正面防禦の要領

新に示されたる原則にして防禦の我が兵力著しく不十分なるべきに想到せば廣正面防禦を行ふの已むを得ざる場合少からざるは明らかにして要は作令一八九の第二項第二線に控置する兵力、第三項の據點の兵力、第四項の砲兵の用法併に第五項の警戒部隊に關する著意である。

イ、第一線部隊は獨立性ある據點編成にし其の間隔を大にし其の間は偽工事、地形に依り側防火にて突破を防止する。

ロ、第二線控置の兵力を勉めて大にし別に豫備隊を設けず果敢なる逆襲に依りて敵を敵攘するを本旨とす。

ハ、各據點の兵力は通常一大戰以上とし所要に應じ砲、工兵を加ふ。

ニ、主力砲兵をして陣地を占領せしむべきや或は其の一部若しくは大部を控置すべきやは一に狀況に依る。

ホ、警戒陣地は寧ろ之を設くることなく最小限の兵力に依り監視網を構成するを通常とする（以上作令一八九）。

一三、攻勢を企圖する防禦

従來行はれたる防禦の主形式で今日でも決して否定せられたるものにあらず要は任務を主とし一時守勢に立ち機を見て攻勢に轉ずるのである。

其の要領は第一線の兵力を地形の利用、火力の發揚に依り勉めて節約し豫備隊を強大且建制的に通常一翼後に控置す。

攻勢は其の企圖に依り豫め綿密なる攻撃要領に則り通常敵の翼側に向つて包圍的に實施す。

第二章 南山に於ける露軍の防禦戰（明治三七、五、二五—二六日）

其の一 戦闘前の狀況

一、旅順要塞の城外支隊たる「フォーク」支隊（長「フォーク」少將東狙兵第四師團を基幹とし合計歩兵十六大隊、野砲五十四門、要塞砲七十七門よりなる）は五月十五日十三里臺附近の戦闘後金州南方に退却し更に南山陣地に於て日本軍を拒止するに決し二十五日夜主力を以て南山陣地に集結し夫々一部隊を左の如く配置し日本軍の攻撃に備へしむ。

金州城 歩兵一中隊、獵兵一隊、八七ミリ砲四門

蘇家屯附近 歩一中隊

其の他大房身停車場、南關嶺、沙家溝、柳樹屯、苗花島子、大鹽島東方岬上、夏河子及南關嶺停車場附近に配置す。

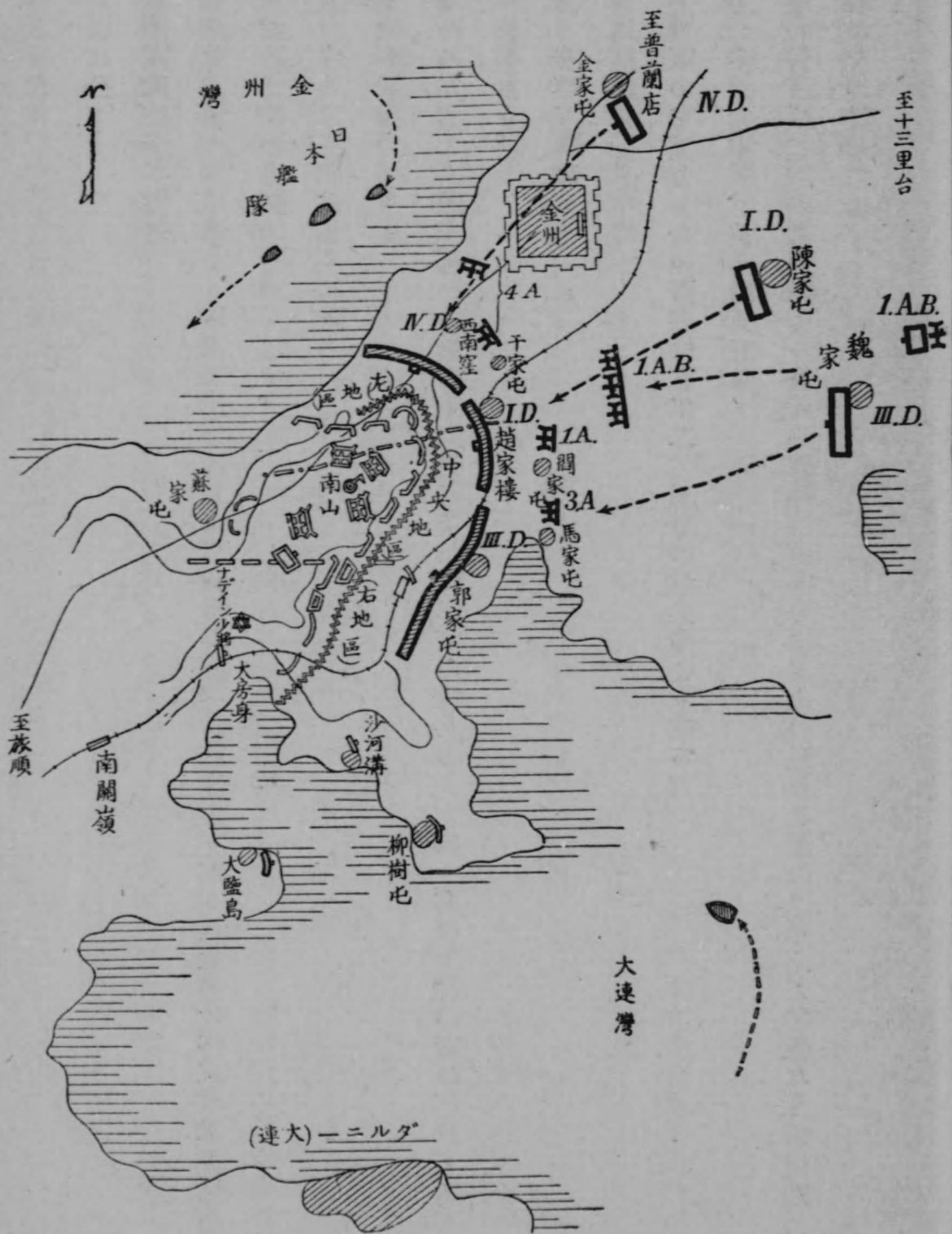
二、南山陣地の價值

南山陣地は日露開戦直後旅順要塞防備の最も重要な前進陣地として直ちに防禦工事に着手し約五十日の日子を費し殆んど半永久的野戦陣地として四月上旬に略完成し自ら稱して難攻主落と謂へる者にして如何に優勢なる日本軍の攻撃を以てしても少くも三箇月間は支持し得る確信を有せり。

三、防禦配備（殆んど建制を顧慮せず唯だ陣地に必要なる兵力を配置せしのみ）。

南山附近露軍防禦配備要圖

五月二十五六日



守備隊指揮官「トレチアフ」大佐(南山最高地堡壘に位置す)。
三地區に分つ。

右翼地區隊長「ス」大佐

鄧家屯北方第一角面堡より以南海岸迄にして二角面堡及び散兵壕より成り且大房身停車場附近に砲臺を設けて此の方面の援助をなす。

兵力 歩兵二中隊、徒歩兵隊

中央地區隊長「ベ」中佐

右地區の左翼より趙家樓西方第四眼鏡堡迄にして二重の散兵壕より成り其の上部の者は何れも角南堡及砲臺あり。

兵力 歩兵五中隊

左翼地區隊長「セ」中佐

中央地區の左翼より金州灣迄にして二、三重の散兵壕より成る。

兵力 歩兵六中隊、徒歩獵兵五隊

陣地の背面は二重の散兵壕より成り全陣地の直前殊に南山の東及北麓には殆んど間斷なく鐵條網及び地雷を埋設しあり。

豫備隊

歩兵三中隊戦闘開始間もなく一中隊

全指揮官「ナデイン」少將は戦闘間大房身停車場附近にあり。

日本軍の攻撃準備

五月二十五日三箇師團及び野砲兵旅團を以て金州西北金家屯附近より陳家屯附近を経て魏家屯附近に互る線に前進し甚だしき降雨を冒して頗りに攻撃準備中なり(以上要圖參照)。

其の二 戦闘の狀況

一、金州城日軍の夜襲を受け次で退却す。

五月二十五日夜豪雨沛然として至り加ふるに一時—三時頃迄雷鳴轟き凄烈の光景を呈するや日本軍の歩兵約一旅團金州城に向ひ進撃し來り一時頃將に金州城は包圍せられんと城兵克く戦ひて之を撃退せしも五時十分頃より日本軍の砲撃に會ひ露軍は遂に城を棄て六時頃南山陣地に退却せり。

二、砲戦の開始

五時頃夜來の雨は罷みしも曉霧尙ほ去らず砲戦は始まり七時頃に至り全砲兵の激烈なる決戦となり露軍砲兵は悉く砲臺上に露出しあるため電話線は戦闘開始後幾も無く切斷せられ各砲臺間の連絡杜

絶し指揮頗る困難となれり。

三、左翼地區の戦況

七時頃金州城日本軍の占領に歸せし以來露軍の砲火漸く衰へ殊に金州灣に現出せし日本軍砲艦の射撃を蒙り砲臺の一部は全彈藥を射耗し一部は破壊せられ一部は猛烈なる砲撃の爲七時三十分頃には漸次沈黙するに至れり。

是より先六時旅順より彈藥を満載せる一貨車大房身に著し砲彈を補充せんとせしも日軍の砲撃は其の運搬交通を阻止して爲し得ず遂に十時三十分旅順に向ひ退却す。

八時頃日軍攻撃前進を始め金州城南方無名川に達せしも露軍の猛烈なる小銃、機關銃火に由り一時停止せしも十時頃より約一師團の敵は其の攻撃愈々活潑となり曩きに沈靜したる露の砲兵は再び射撃を開始して猛烈を極め之と相俟ちて歩兵各種火器は熾烈となり遂に日本軍をして正午頃より十四時頃迄西南窪及干家屯の線上に停止せしめたり(要圖參照)。

四、中央地區の戦況

日本軍約一師團八時二十分頃より攻撃し來り我が陣地の東北面は盛んに砲火の集中を受け續いて第四眼鏡堡(干家屯西南方)は再三、再四の歩兵の突撃を受くるに至りしも其の先進せる三線の部隊に逐次至大の損害を與へ第四線部隊をして鐵道線路に停止せしめたり。

又第三眼鏡堡は南方より進出し來れる日軍之れ又再三突撃を繰り返せしも能く之を拒止し遂に正午頃攻撃を中止せしめたり。

五、右翼地區の戦況

日本軍約一師團は更に閑家屯、馬家屯に互る線に前進し十時頃柳家溝附近に進出するや大房身附近の砲兵中隊之を射撃し又此の頃砲艦「ポープル」大連灣に現出して約一時間に互り日軍の左翼を砲撃して火制し之を陣地前約八百五十米に拒止するを得たり。

然るに同艦は落潮の爲十一時頃退航せりと雖も日軍は依然十四時頃迄は攻撃を中止せり。

然れども守備隊指揮官「トレチアコフ」大佐は我が右翼を危険なりとし最後の豫備隊たる一中隊(一小隊欠)を此の方面に増加せし爲今や手裏に存するものは軍旗と共に一小隊に過ぎず。

南山陣地上の砲兵の退却

南山陣地の砲兵は日本軍砲兵の爲制壓せらるるに係らず朝來大房身西南諸高地にある野砲四十四門は射程過遠且「フォーク」少將之が陣地變換を命ぜざるに因り砲戦は唯だ南山陣地の砲兵のみ繼續し漸く大房停車場の南方高地上の砲兵のみ十四時迄緩除に射撃せり。

之が爲南山の砲兵は遂に十一時頃に至り火砲を破壊して退却す。

正午頃日本軍砲兵も亦沈黙し戰場は少時靜寂となり大舉して將に再興に決起せんとする日軍は嵐の

前の静けさを現はしたり。

然るに大房身停車場に在りし「ナデイン」少將は何を感違ひをなしたるか日本軍我が左翼方面より退却を始めしと誤認し之を旅順軍司令官ステツセル中將に報告せり。

六、左翼地區の危険

左翼地區第九角面堡西側散兵壕の第五中隊は日本軍艦の砲撃に依り十三時頃には散兵壕破壊し且下士、兵の約半數を失ひ後方の凹地に退却するに至りしも聯隊長は之を援助すべき豫備隊を有せず同時頃「フオーク」少將は「トレチャコフ」大佐より左翼危殆の報告に接し「ナデイン」少將をして歩兵二中隊を大房身停車場の西北側に増援せしむ。

之の處置は頗る不可解なるものにして左翼の危険を知らながら中央に増加し而も此等の中隊は十六時頃始めて到着せり。

七、日本軍の攻撃再興

十四時頃日本軍は全線に互り攻撃を再興し銳意前進を企てしも露軍の火力依然として熾烈を極め遂に十六時頃に至り左翼地區方面のものは千家屯、劉家屯、硯池河の線に、中央地區方面は鐵條網附近に到達して停止し右翼方面のもの亦攻撃を中止せり。

然るに左翼地區方面に於ける日本軍の攻撃は此が爲毫も挫折せず其の艦隊の掩助により死傷續出す

るを意とせず更に前進肉迫に努め遂に第九角面堡西側に於ける露軍の放棄せる散兵壕を占領し引きつづき突撃を敢行して陣内に突入し我が守兵逐次退却を始め茲に始めて南山陣地陥落の端緒を開けり。

次で第九角面堡も日本軍の有となり附近の各中隊相前後して退却に就くを觀るや守備隊指揮官「ト」大佐は新なる豫備一中隊を以て我が陣地に進入せる日本軍に向つて逆襲せしむると同時に自ら馬を馳つて第一線に至り叱咤督勵其の退却を制止するに努力せしも一人の力を以て雪崩を打つて退却する頽勢を挽回すること難く纔かに陣地の背後に部隊の整頓をなし得たるに過ぎず。

右の如く左翼地區敗るるや右地區の守兵は中央地區に通報することなく直ちに退却して左翼隊に合せしも中央地區の守兵は此等の情況を知らず却つて日本軍に逆襲し「ベ」中佐以下相次で死傷し殆んど全滅せり。

八、「フオーク」少將の處置適確堅忍ならず

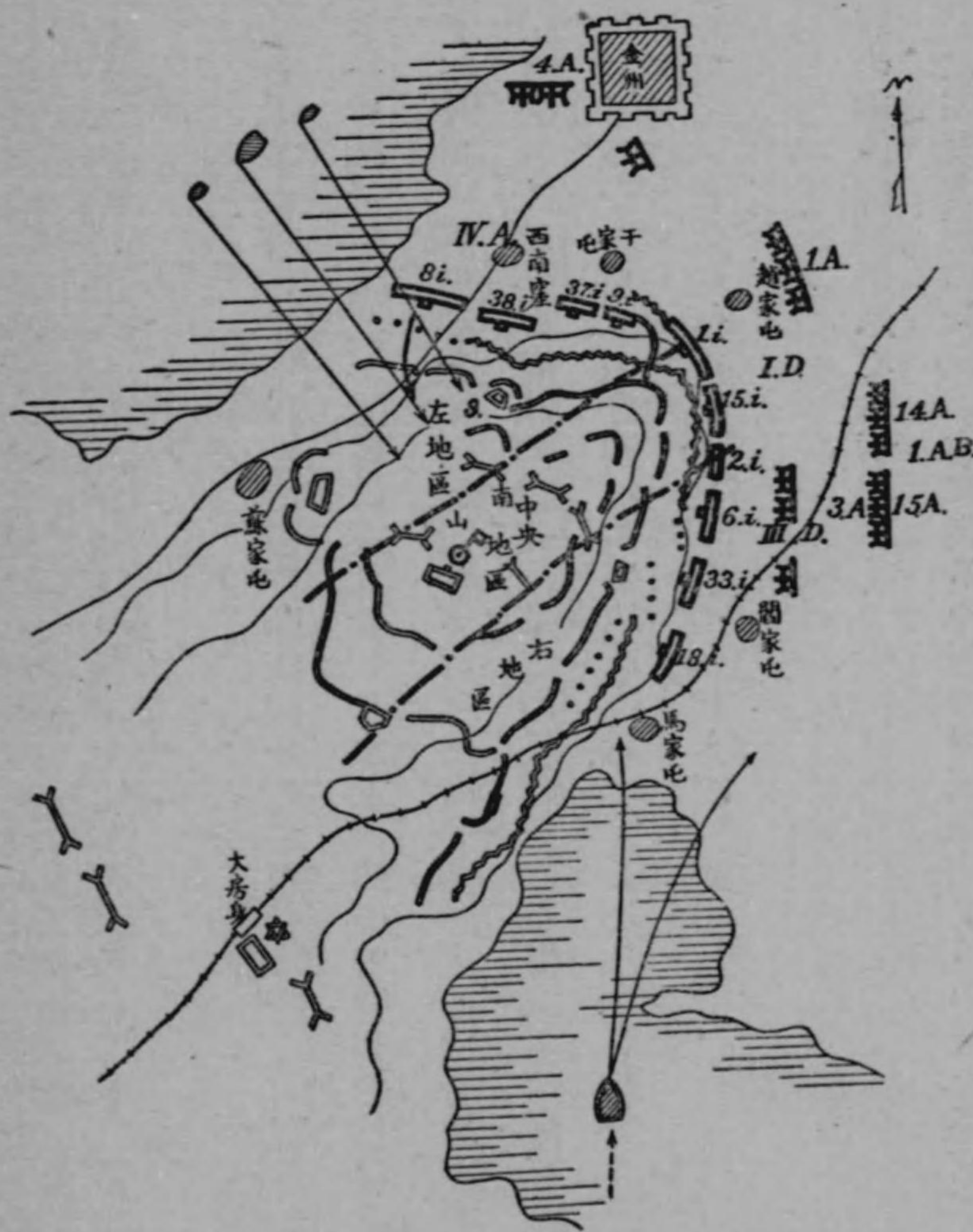
是より先「フ」少將は左翼方面の狀況危険に陥るや極力戦況挽回するの策を講ぜず却つて直ちに退却の決心をなし貯藏糧秣の搬送を命じ或は「ト」大佐に全火砲の破壊を命じ砲兵旅團を前南關嶺の總豫備隊に合せしめる等汲々として退却危備に没頭し南山守兵の退却を認むるや附近の部隊を以て大房身西北高地を占領して收容に任じ日本軍の追撃を受くることなく旅順に向ひ退却せり。

九、露軍の死傷

戰闘中約四百五十に過ぎざりしが退却に當り日本砲撃の追撃射撃により著大の損害を蒙り少校死傷十四、失踪十下士兵死傷失踪一千百十二名に達せり。

圖要署部擊攻軍日と備配禦防軍露山南

日六十二月五



其三 戰闘の結果竝に教訓と原則對照

一、戰闘の結果よりする觀察

南山陣地の堅固なりしと日本軍の此の種陣地の攻撃法の研究不十分なりし爲日軍の死傷四千餘の多きに達し然も猛烈果敢なる追撃を行はざりし爲露軍の死傷は僅かに千餘に過ぎざりしを以て却つて露軍の成功に終りしやの感なきにあらざるも此の堅固なる陣地は一日にして陥落し且露軍の急遽南方に退却せし爲二十八日には容易にダルニー(大連)は日本の手に歸し其の結果日本軍旅順要塞攻圍資材の重材料を此の地に揚陸せしむるに至り他面滿洲軍全體の爲多大の補給港として日本作戰を有利ならしめたる偉大なる效果あるものと謂はざるべからず。

二、陣地の選定に就て

作令一九一「一地を固守せんとする防禦に在りては成るべく敵の攻撃を阻碍し得べき地形を利用し且諸種の障礙を設置し各方面に對し陣地を設備し全力を盡くして之を死守するものとす而して苟も逆襲の好機を得ば斷然之を決行するを要す」。

然るに南山の陣地は前地廣豁にして遠き射界を有するの利ありと雖も其の正面狭小にして一旅團以上の兵力を配備するに適せず且陣地の形狀優勢なる敵に包圍せられ易く制海權敵に歸しある場合敵

艦隊の爲に縦射を受くるの虞充分あり此の點に關しては寧ろ南關嶺北方地區に陣地を選定するを遙に優れりとす。

三、陣地設備

最大の缺點とも認むべきは左翼方面に支撐たるべき堅固なる堡壘を設けざりしことと海上よりの砲撃に對する設備を忽にせしことは大に研究を要す蓋し一地固守の防禦に在りては前述原則の如く各方面共に堅固にし敵をして毫も乘ずるの間隙なからしむるを緊要とすればなり。

又砲兵陣地の掩護は爲し得る限り敵眼、敵火に遮蔽し所望の地域に其の火力の大部を指向し得る如くすべきを初めより高地稜線に掩體を構築し明瞭に砲兵陣地たることを表識せしむるが如き忽ち日本砲兵の爲通信機關を破壊せられ指揮の統一を缺き對戰僅かに三時間餘にして自爆退却の餘儀なきに至るが如きは全く認識を缺くものと謂はざるべからず。

四、配備の適切を缺く

正面四キロ米餘に互る陣地に僅かに一聯隊を配置せしは僅少に過ぐ已むを得ず此の正面を此の兵力にて防守するとせば作令一八九の原則の如く各獨立性を附與せる據點式配備により其の側防機關の充實により敵の突破を防止せざるべからず。

然るに豫備隊は僅かに三中隊を控置せしも忽ち其の二中隊を第一線に増加し漸く軍旗と歩兵一中隊

にて戰況に應じ陣地の一角破綻を生ずるも適時之に應じて防禦目的を達成せんとするが如きは可能なり之に反し南關嶺、小沙河、柳樹屯に配置せし兵力は約三大隊にして殆んど本戰鬪に關與せざるが如き態勢に控置せしは原則上の見地より無能なりと謂はざるべからず。

本防禦と雖も日本軍の攻撃一時頓挫せんとせし十四時前後に於て其の好機に乘じ斷乎として逆襲に轉ずれば或は陣地前に撃滅し得たるやも計り難し之が爲後方控置の兵力は今一步近く位置せしめ日軍の疲勞混亂に乗ずるか或は南山陣地を撤退する際に適置好機を捉へて逆襲を執行せば相當の價値ありしならん。

五、敵指揮官の意志の薄弱

「フオーク」少將以下各指揮官の意志常に動搖し戰況判斷を誤りて上司に報告し且絶へず不安の狀を以て戰鬪を指揮し陣地の一部にして一度危機を現すや直ちに退却に決して毫も懸命の努力に依り之を挽回するの意志なく唯僅かに「トレコチャフ」大佐の如き勇敢なる指揮官有りと雖も大勢の趨く所之を如何ともする能はず。

旅順要塞の堅壘を乃木軍六箇月に互り惡戰苦鬪死力を盡くし數萬の死傷を出して攻略せんとせしも「コンドラチェンコ」少將の勇敢無比の激勵叱咤は能く困難なる防守を全ふせしも十一月上旬彼が一度び北堡壘に於て我が二十八サンチ砲彈に因り戰死するや日一日と其の勢衰へて遂に開城せしが之

れ畢竟堅確鐵の如き意志を有する一上級指揮官の志氣を發揮せしめたるものなり。

防禦に於て防者の意志一度攻者に屈服せんか萬事既に休す防者の敗は攻者の之を敗るにあらずして防者自ら敗るるものなり。

之れ我が國軍の信念として防禦は絶対已むを得ざる時にのみ行ふものなる事を教ゆる所以なり。

天嶮人工相俟ちて難攻不落と稱せし南山陣地は僅々一日にして敗れたり決して露軍の物質上防止不可能なりしにあらず實に其の意志先づ屈せしに因るものなり。

六、最善の防禦は攻撃なり

最善の防禦は攻撃にありとは古來の格言千古不變の教訓なり如何なる科學と物資に依る壘壕の構築も唯だ敵に對し防守せんとする心理の有らん限りは完全なる防禦は完遂し得るものにあらず。

今次歐戰の「マヂノ」線の嶮要鐵壁を恃んで佛軍は敗れ祖國は蹂躪せられたり。

「フランダース」の野戰に殲滅的打撃を蒙りし英軍も心身喪失の形で其の本國に遁げ今や優越感と絶對壓倒的の獨空軍に連日連夜の空爆下に危急存亡の秋に直面して只管其の防禦に腐心肝膽戰々恟々として空襲、上陸侵入に怯へあるは畢竟英の開戰以來の作戰方針が常に守勢消極一步も攻勢的意志を有せず遂に累積して今日の天涯孤獨力以て獨軍の精銳に對抗しつゝ其の放膽不覇の包圍壓迫に曝さるる悲境に陥りたるものと謂ふを得べし。

旺盛なる攻撃精神、潑刺たる興隆の意氣は軍と云はず民と謂はず國家を護り國威を發揚する最大の原素たるを知るを得べし。

第六篇 歐洲大戰並に滿洲事變の一端より得たる教訓並に戰例

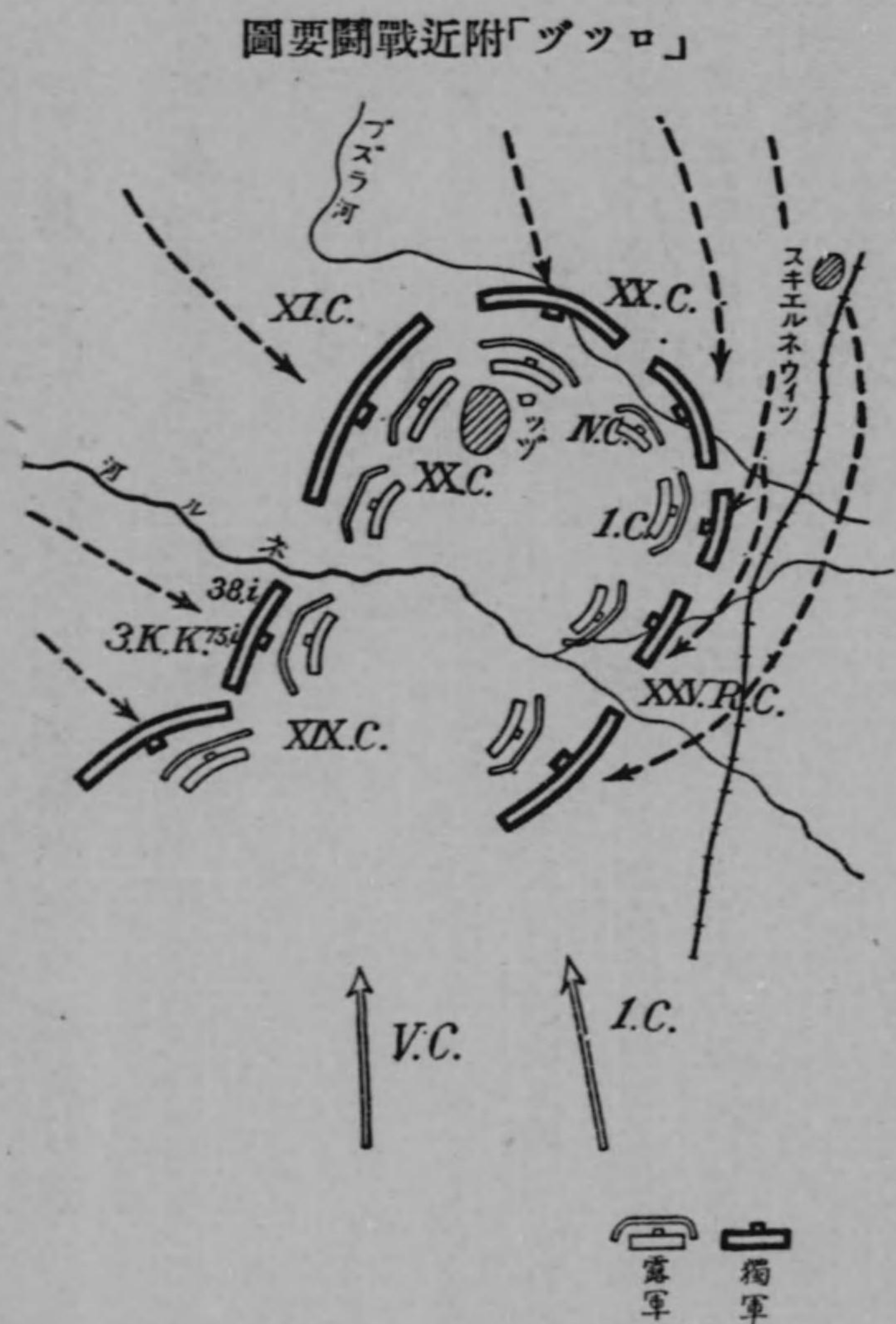
第一章 歐洲大戰に就て

其の一 堅心堅確にして死守奮闘したる結果能く優勢なる敵を拒止したる戰例

一、一九一四年(歐戰第一年)十月下旬獨軍は獨露國境に退却中に配備の變更を行ひ約五軍團半(第九軍)を「トルン」附近に集中し十一月十三日該方向より斷乎として攻勢に轉じ露軍の右翼を包圍し遂次之を南方に壓迫し各局部毎に或は中央突破又は包圍を行ひ露軍を「ロツツ」附近に殆んど圈狀に包圍し日夜連續猛攻を之を壓倒殲滅せんとす従つて戰鬪慘烈を極め彼我共に死傷續出す。露軍は十一月十七日—二十日に互る四日間全三方面を包圍せられ惡戰苦闘し彈、食共に竭きしも頑強に抵抗を持續し遂に友軍たる第一、第五軍團の増援を得辛うじて其の目的を達成せり。此の會戰に於ける露軍の陣地は退却後始めて急遽構築せられたる薄弱なる野戰築城にして其の被包圍圈の中徑は僅々十四キロ米に過ぎざに尙ほ克く四日間の抵抗を持續し得たるは近時の兵器併に科學が防禦を容易ならしめたるとは云へ一には決死的境遇に在る軍隊の抵抗力が如何に絶大なる力を

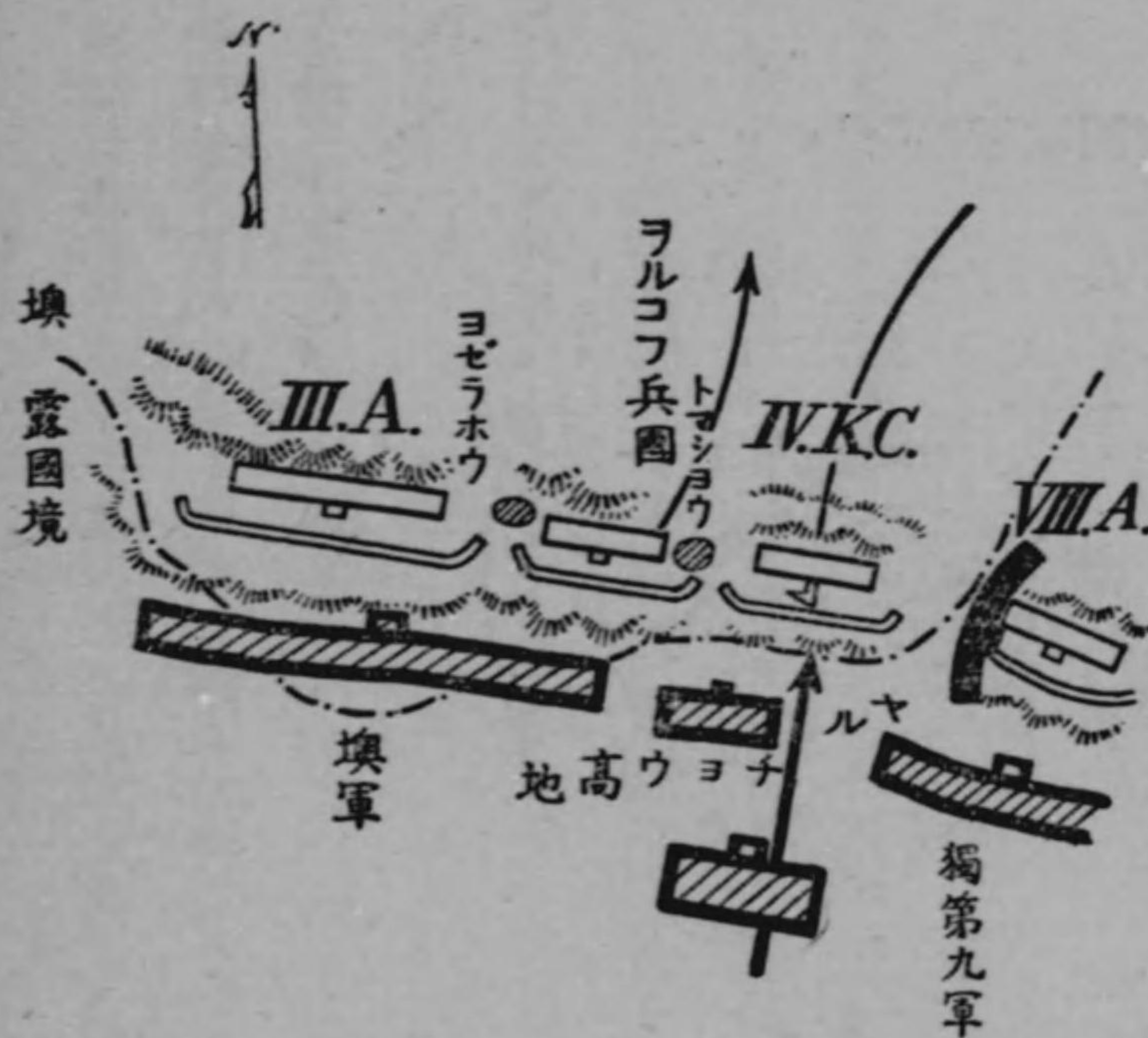
示すものなるやを現實に教ゆる所あり。

要するに指揮官以下一兵に至るまで堅確なる決心を以て守死奮闘する軍隊は縦ひ三面包圍せらるるも尙ほ能く其の陣地を保持し得るものなることは此の「ロツツ」附近の會戰に例證せられしものなり(左記要圖參照)。



其二 中央突破の攻撃重點を適當に選定して成功す

一、千九百十五年六月獨軍第一軍が「ガリチエン」(埃露國境の山嶽地帯)附近にて露の第三、第八軍を撃破し之を追撃するや露軍は其の第二、第八軍間に空隙を生じ之を充填するに騎兵第四軍團を以てせしが獨軍は速かに之を偵知し常に其の攻撃重點を此の騎兵軍團に指向して攻撃を續行せしため露軍の破綻は常に騎兵の占領正面より生じ特に六月二十八日露第三軍の左翼「オルコフ」集團は「ヨゼフホウ」「トマシヨウ」の線を第八軍は「ウウノウ」以南の地區を占領し騎兵第四軍團は其の中間「ヤルチヨウ」高地一帯を占領し防禦配備をなせしが獨軍は直ちに之を偵知し二師團餘の兵力を以て騎兵軍團の占領地區正面に猛攻を加へ遂に露騎兵團は忽ち撃退せられ一舉十八キロ米東北方に潰走



し獨軍は一部を以て之を追撃し主力を以て其の兩翼陣地を包圍又は背後を攻撃し之を潰亂せしめ中央突破を成功せしめたり。

此の戦例に徴するに敵陣地殊に其の弱點を速かに察知して攻撃重點を指向するは原則の教ゆる所にして殊に本日の如く騎兵軍團を以て陣地の中堅に配備しあるを看破したるものとして至當の攻撃法ならん。

現在列強の騎兵の裝備、編成は殆んど機械化部隊を配屬し主として快速機動により其の特性を發揮せしむる如くせられたり。

故に已むを得ず本戦闘の如く中間陣地に使用せんとするは全く一時の急を補ふ便法にして適當ならざるは勿論なるも之をしも爲さんとすれば相當強力なる歩、砲兵の配屬、兩隣接部隊の協力援助をなすにあらざれば必ずや敵は以て乗ずべき配備上の弱點として好個の攻撃目標たることは明らかなり。

其三 攻撃點を防者が其の兵力を撤退したる部分に選定し成功せし例

一、千九百十六年三月「ナローチ」湖附近に於ける露軍の攻撃作戦後其の二軍團の内より一軍團を他方

面に移動を開始するや獨軍は之を偵知し其の間隙を窺ひ殘置せる一軍團に向ひ直ちに攻撃を實施露軍が約五日間を要し數萬の損害を犠牲にして辛くも占領せる陣地を攻撃所要六時間に奮然突撃を決行して容易に之を奪回せり。

此の戦例に徴するに攻者は防者が其の兵力を移動の爲撤退するを知るや直ちに其の整理終らず部署完遂せざるに乘じ電撃的に其の虚に乘じ之を突破し得ば其の成功比較的容易なり。

但し之を實行するには攻者は他の正面に對し局部的に脅威、牽制、包圍、迂回等を実施し防者之に欺騙せられ混亂するに乘じ攻者の選定しある眞の突破正面より敵が撤退を開始すると共に急速果敢に突撃を行ふを要す。

斯の如き好機を捉ふるには常に周密なる諜報、候敵機關の活用と飛行機の敏活なる搜索と相俟ちて敵情を明らかにする要あり。

防者が如何に其の企圖を秘匿するを要するの絶對必要なるかも又以て知り得べし。

其の四 攻者が我が火力の集中容易なるべき敵配備の

突角部に攻撃重點を指向して突破を遂行す

一、千九百十五年五月二日獨軍が「ガリチエン」山地の「ゴルリス」附近に於て露軍配備陣地の突角に向

ひ全砲、銃火力を集中し之に乘じ歩兵を以て突破を決行し遂に全露軍は奥、露國境の「カルバラ」諸山頭を占領せる其の有利なる位置を棄てて自國內に退却せざるを得ざるに至れり。

此の戦例に依るも突破は先づ優勢なる砲兵火力を以て突破孔を猛射し一度び突破孔開設せらるるや逐次其の兩側より破綻端を包圍して之を席捲せば其の成功容易なり。

其の五 騎兵の快速と機械化の利用に依り敵の側背を

脅威せしめ攻撃に成功せし例

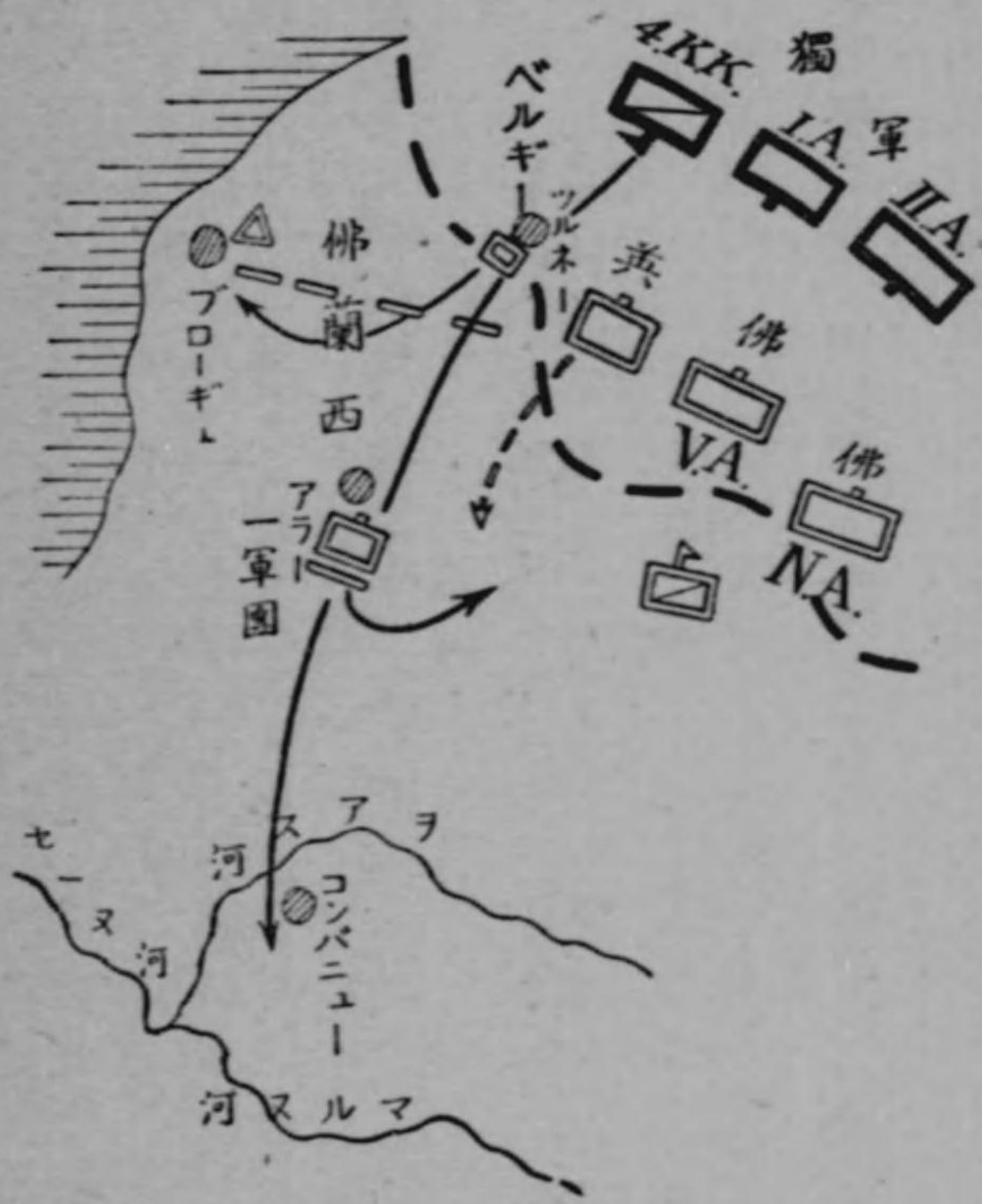
一、千九百十四年八月下旬獨軍は其の右翼第一軍を以て英軍を攻撃せしめ尙ほ其の騎兵團をして遠く英佛聯合軍の左側背を脅威せしむ。

騎兵團の編組は騎兵四師團、騎砲兵、積載自動車輕砲、自動車機關銃、自動乘車歩兵大隊よりなり其の快速に依り敏速なる機動を行ひ遠く「セーヌ」河下流と白佛國境間の地區に在りし微弱なる佛軍後備隊及鐵道守備に任ぜる英軍を驅逐し「ツールネー」に在りし佛軍後備一旅團を全滅せしめ「アラ」附近に在りし佛後備第一軍團を撃破し英佛軍の左側背に進出し甚大の恐慌を來さしめ遂に英軍は敗れて退き其の兵站地たる「ブローギユ」を放棄せしむるに至る。

作令二四二「機械化(騎兵)部隊は其の任務を勉めて攻勢的に解決し偉大な機動力と獨特の戰鬥力と

を利用し機先を制して敵を急襲するに在り」
 又同二五二「軍の作戰を容易ならしむる爲一部隊を選抜し特殊の任務を課し遠く敵の後方に挺進し
 獨立して行動せしむることあり」
 又同二五八「地形と機動力とを利用し放膽なる包圍を敢行し若しくは敵の側背に向ひ急襲するを
 有利とす」

右の諸原則と對照せば本戰鬪の機動は機宜に適したるものにして第一線部隊に至大の効果を與へ作



戦を鮮かならしめたるものとす。

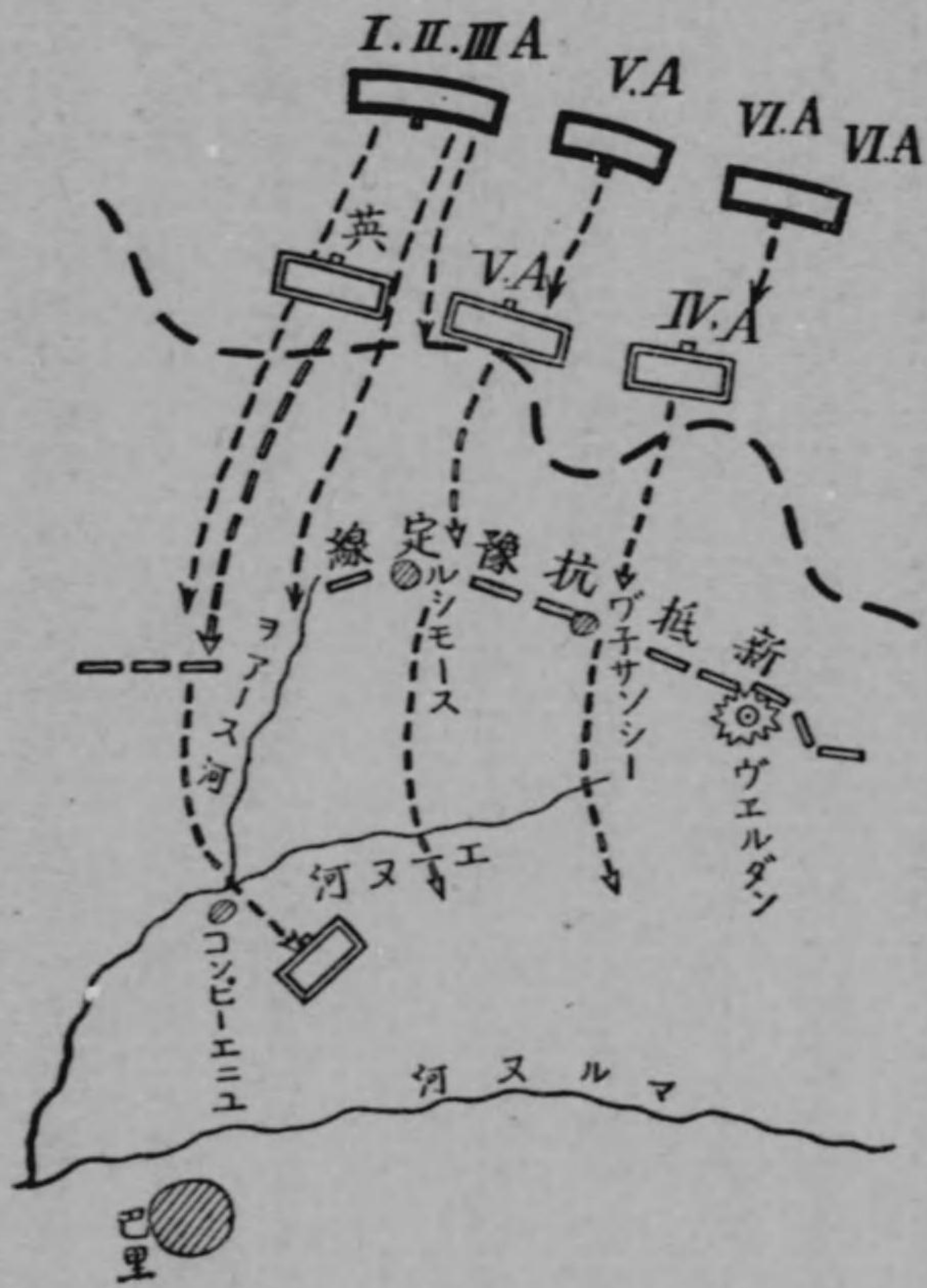
其の六 迅速果敢に追撃を執行し敵の第二の新企圖を
 挫折せしめたる獨軍の猛撃

一、千九百十四年八月獨佛國境會戰に於て退却せる佛軍は右襲を「ヴェルダン」要塞に托し略、「ブエ
 ザンシー」「ルシモース」「アム」の線に於て敵を邀撃し英軍及新編成の第六軍を以て獨軍の右翼を包
 圍せんと企圖せしも如何にせん獨軍右翼の追撃最も急速にして一時攻勢を斷念するの止むを得ざる
 に至らしめたり。

即ち八月二十九日「ノアイヨン」「ラフェール」の線に退却せし英軍は三十一日已に「コンビニュー」
 東南地區に敗退したるため佛第五軍は全然其の右翼を暴露し又第六軍は鐵道を輸送せられ二十九日
 夕刻より「アミアン」「モンディイデー」の線に就きしも集中完結に先だち獨軍の攻撃を受け敗退し
 て第五軍の左翼を危険ならしめ且主力軍がバリ、英軍及第六軍と分斷せらるるの危険を生じ又他面
 バリ撤退の爲鐵道の混雜より第六軍の輸送意の如くならず遂に佛軍は斷然攻勢を中止せざるを得ざ
 るに至れり。

要するに敵軍隨意退却したる時と雖も猛烈果敢に追撃を執行する時は敵の企圖を挫折し殊に巧妙に

敵前を退却せる軍隊と雖も其の背後の混雜は攻者の情像外にして従つて其の退却動作意の如くならざることを多し。



第二章 滿洲事變に就て

其の一 山海關附近の戦闘より知り得たる支那軍の防禦力

一、本戦闘の特質は堅固なる城壁を有する市街の攻防戦にして戦闘間諸種の戦況現出したり。敵たる支那軍は當時東北陸軍中の精銳の團へ高き獨立第九旅(何柱國)が決定之を死守せる戦闘なるが故に若干の教訓を左に述べん。

1、支那軍の築城は嚴冬の候約一箇月を費して城壁の側防、大西關の陣地、各種重火器、自動火器の配備、待期棲息の設備等何れも現代的築城として他に一步も譲らず所謂天嶮、人工兼備のと謂ふを後べし。

元來支那軍は勞力を惜まず且多數の苦力を徵發使用するため其の陣地は豫想外に堅固にして之が指導に任ずる將校の能力は侮り難きものあり陣地の秘匿亦嚴にして我が軍は之が攻略後初めて斯かる堅固なる築城ありしを知り得たり。

2、城壁に據れる支那軍の防禦力

由來術工物に據る防禦は彼の得意とする所にして涿州に於ける傳作義は山西軍一師を以て能く萬福麟の三師と砲三百餘門及飛行隊等に對し三箇月間の守城を全うして猶陷落せざりし例證を有し其の戦跡を觀れば素質及築城に於て山海關に及ばざるものあり。

然るに日本軍の攻略時間は約三時間半にして完全に其の目的を達成せり。

3、戦況に伴ふ防禦力の消長

我が砲撃間は狙撃兵のみを火線に就かしめ主力は掩蔽部内深く我が砲撃と爆撃を避け愈々歩兵の攻撃前進するに及び諸方面より自動火器及重火器を以て其の前進及突撃を防止すること頗る巧なり。

然れども白兵を以てする突撃は拙にして陣地内部に於ける逆襲の如きも火力の協調緊密ならず徒らに我が自火器の前に殲滅せらるる狀況なり。

支那軍が窮鼠的境遇に陥る時は頗る強くなるものにして掩蔽部内に残存せる敵は必死の抵抗を續け全滅するまで戦ふものとす。

例へば一部隊が突撃後急速に其の退路に迫り正面より他の部隊肉迫せんか敵は必死の抵抗をなし遂には軍旗敵前數十米に達するまで其の集中火を浴びせ最後迄奮闘する習性あり。

4、部隊間の協同は不十分

數萬の敵は鐵道を以て平津地方より増援の爲急行し來り石河右岸(戰場の西方四、五キロ)には展開せる敵の一兵團あり是等の敵にして山海關の友軍と協同せんとせば決意我が部隊の左側背を席捲するを要す。

然るに敵は何等爲す所なく空しく戰機を逸し我が冒險的攻撃を成功せしめたり。

戰場に於ても我は全城の八分の一正面を攻撃したるに拘らず他の正面に於ては我が攻撃を顧慮し

てか南正面に應援せし模様なく我が正面の敵は營長(大隊長)以下全滅せしも反對正面に於ては我が迅速なる戰果擴張に際し多數の迫撃砲及機關銃等を遺棄して敗退せり。

要するに斯の如く獨斷、協同の精神に缺ける支那軍に對する各個撃破は比較的容易にして我が放膽なる作戰も危険尠きものと云ふを得べし。

其の二 乘馬歩兵隊の特性と戰鬥の一端

一、乘馬歩兵隊の必要

昭和七年春季以來北滿各地に蟠居して反吉軍たる表幟の下に堂々皇軍に反抗し或は鐵道を破壊する彼等の行動は實に迅速機敏にして山野森林の別なく跋涉踏破し容易に端倪すべからず漸く捕捉せんとするも其の遁走又速く殊に七月の雨季に至りては道路泥濘全く膝を没し殆んど路外の行動を許さず我が歩兵は如何に氣許り急れども到底彼等を追及し得ず斯くて屢々長蛇を逸して無念極りなし。當時皇軍として悉く嘗めたる苦き體驗より我が部隊は當時令下にありし滿軍騎兵の支那馬約三百を借上げ急遽乘馬歩兵隊を編成し訓練の暇もなく直ちに出發せり。

二、乘馬歩兵隊の編成

歩兵各中隊より將校一、下士兵約五〇總計長以下約二百とし重機二、山砲一を附し獨立して行動し

得る如くせり。

三、戦闘と夜間の追撃

北滿榆樹縣城を奪取するや敵は殆んど騎兵にして李杜其の總指揮に任じ總兵力約一萬と稱し遁れて新立屯(榆樹より約四十キロ東南)附近に停止しあるを知り我が支隊は直ちに追撃に移る時に十六時行動開始後約三十分頃にして一天俄かに曇り電光物すぐ豪雨沛然として至り全身濡れ鼠となり道路忽ち泥濘滑走して歩行最も難む。

此の時前衛として先行せしめし乗馬歩兵は何等の苦痛もなく行軍を續行し夜半小行李の車輛通行全く不能に陥り且歩兵の行進著しく遲滯難進歩頗る鈍る。

此に於て支隊長は乗馬歩兵隊をづ先遣するに決し直ちに目標地向ひ大隊長の揮指揮を以て前進せしむ。

支那馬は嘶かざるを以て夜間の穩密行動に適し降雨篠々として人馬共に濡るるも黙々として暗夜深黒の原野を突破すること約四十キロ四時頃東天稍、曉色を呈する頃には敵の寄營地附近に達し直ちに山砲、機關銃を配して徒歩攻撃を行ひ此の拂曉の夜襲は前夜來の雨に敵は全く油斷し殆んど警戒哨も設けず各自民家に睡眠しありし事とて其の周章狼狽は言語に絶し討伐隊は大に奮闘せしも如何にせん兵力二百に足らず爲めに全部落を包圍するを得ず其の大部は遁走せしも捕虜約五十馬約百頭

を鹵獲し次で支隊主力の到着と共に直ちに追撃に移れり。

四、要するに支那馬を利用する乗馬隊は其の編成容易にして馭法又頗る簡にして然も特種の地形に於ては最も有利に活躍し得る特性を有するものとす。

今次事變に於ても山地帯の急速突破の前進等に一部の隊は之を利用して大に其の効果を揚げしも只だ注意すべきは一時に多數の馬を徵發する時は資質良好なるものを得難く殊に痺阻帶患馬相當多きを以て我が軍馬に接觸する時は多大の損失を蒙る事を注意する要あり。

作戰要務令と戦史の對照研究 卷二 終

昭和十五年十二月十日印刷
昭和十五年十二月十五日發行

作戰要務令と戦史の對照研究(奥付)

定價金壹圓五拾錢

不許
複製

著者

舟橋茂

發行者兼印刷者

東京市麴町區三番町十四
橫尾民藏

印刷所

東京市牛込區市谷臺町二十二
成武堂印刷所

東京市麴町區三番町十四番地

取扱所

成武堂

電話九段(33)二八一五番
振替東京三〇七一三番

